農學士 志賀重昂講述

地理學

早稻田大學出版部藏版

地理學目次

(一) 地理學の定義……一
(二) 地理學の必要……二
(三) 日本地理考究の方針……三六
(縱)日本海岸の日本と太平洋岸の日本
北日本と南日本……一三八
(四) 亞細亞地理考究の方針……六六
(五) 支那地理考究の方針……八四
(六) 歐羅巴地理考究の方針……一〇六
歐羅巴各國の人情風俗……一一六
○羅甸民族……一一七
○チュトニック民族……一一八

○羅甸民族の植民地とチュトニック民族の植民地……一一二
○スラヴォニック民族……一一一
○葡萄牙史の一章……一一五
○支那外なる第二の上海……一一八
(七) 亞弗利加洲、太洋洲、南北亞米利加洲地理考究の方針……一二三
○米國史と日本史の地理的關係……一三七
(八) 餘意……一五九
●土地と人文……一六一
(九) 地形と人文……一七四
(一) 島と人文……一七四
●初島物語……一六五
●大島日記の一節 社會……一六七
(二) 半島と人文……一七〇
(三) 大陸と人文……一三五
(四) 地峽と人文……一三九
●島國と大陸國との戰爭……一三三
(十) 地勢と人文……一三四九
(一) 山と人文……一三四九
●大島日記の一節 山と島 古風の遺存……一三五七
(二) 高原と人文……一三八〇
(三) 平原と人文……一三八四
(四) 溪谷と人文……一四〇四
(五) 沙漠と人文……一四二七
(十一) 水と人文……一四三三
(一) 河と人文……一四三四
一 河の所在は平坦なり……一四三五
二 河の所在は肥沃なり……一四三七

三　河の所在は交通に便まり……四四四
四　河は航運に利す……四四六
運河……四四八
五　河は灌漑に資す……四五一
六　河は水力利用に供す……四五四
七　河は諸般の生業を授く……四五七
八　河は其他雑多の便宜あり……四五八
(二)　湖と人生……四五八
(三)　河湖と破壊……四六六
(十二)　洋海と人文……四七二
(一)　海岸と人文……四七二
●志摩及其附近……四七六
(二)　海と人文……四九二
(三)　太平洋時代……五〇三

(四)　海の將來……五二三
●燐礦を産する太洋島……五三〇
(五)　日本の將來と海及び水産……五三四

地理學

志賀重昂講述

一　地理學の定義

地理學は地球に關せる萬般の現象を考究する學問なり

日本にて地理學と云ふは泰西にては「ヂオグラフヰー」又たは「ゲオグラフヰー」と喚ぶ。然れども見れ一個の獨立獨歩せる理學にあらず、強ゐて理學と喚ばんとせば、最も幼稚にして最も鴻濛なる理學なり。蓋し如何なる理學と雖も他の理學の力を借らざるべからざるは勿論なり、理財學は社會學、史學、農學、商學、法學等の力を借らざるべからざるは勿論なりと雖も而かも亦た其の間に絶特なる原則の確定せるもの夥多あり、史學は社會學、地學、哲學、人類學、系統學、傳記等の力を假らざるべからざるは勿論なりと雖も而かも亦た其の間に絶特なる原則の確定せるもの夥多あり星學、動物學、植物學の如きに至りては他の理學の力を借らざるべからずとは云へ、確固不拔なる大原則のあるなり。獨り所謂地理學に至りては然らず地文學、地質學の力をも大に借ら

ざるべからず、星學、氣象學の力をも大に借らざるべからず、動物學、植物學の力をも大に借らざるべからず、物理學、化學の力をも大に借らざるべからず、政治學、理財學、社會學、人類學、史學、哲學、農學、商學等の力をも大に借らざるべからず。此の如く未だ獨立獨歩せる一個の理學にあらざるが上に、亦た其間に絶特なる原則の確定せるものとては特に少し、比較的に少きにあらず眞に少きなり。所謂地理學にして未だ獨立獨歩せる一個の學問にあらずとせば、之れを大成して眞誠の學問と化醇せしむるは吾人後進者の任にあり、幼稚なる代りには亦た今後大に發達するの餘地あるものあり、故に此學の前途は他の百般理學に比較せば殊に多望なりと謂ふべし。

又た地理學をして定則の如く「地球に關せる萬般の現象を考究する學問なり」として考究せんか其の人世に利益すること少からざるを信ず、況んや興味も亦た多大なるおや

凡そ地を離れて人無く、人を離れて事無し、地理學の考究は實に百般學問中の最も緊要なるものと知るべし

(二) 地理學の必要

さて順々に地理學の講義を致しますがまづ此學の必要に付て大體をお話し致します。夫れより順序を追ひて各國の形勢より、政治、風俗、人情、教育、宗教、兵備等に至るまで夫れ〳〵お話しを申し上げる積りでありまする。

世界の大勢とか或は形勢とか又は何やらの策論とか云ふて今の人は種々喧きことを能く申しまするが大勢論、形勢論ほど云ひ易ひ者はまたと無い。諸君の御承知の通り世の中の形勢とか世界の大勢などゝ云ふことには標準が立て居らない、例へば此机の長さが幾尺あるか或人は五尺である或人は六尺である或人は五尺五寸五分であると銘々勝手なことを云ひたりとモノサシを以て當てゝ見れば何尺何寸何分と云ふ事がチャンと精密に判かるからお前は當つた、お前の云うたのは稍々近いお前のは餘り見當が違ふと云ふことが判かる何んでも標準のあるものは確乎として分る天文學でも物理學でも化學でもそうてある。何日幾時に日蝕があるどの邊より缺け始める、そうして何時何分に極點に達し、而して後ダン〳〵と復たもとの通りになつて明るくなると云ふことは、天文學の原則を應用して實測してあるから標準が確かである以上少しも間違はない物理學でも同じとである。此樣に原則即ち標準の確かなものは結果が的面に來て理非が直ちに判るから無暗の議論は出來ない。然るに世の中の大勢論又は策論なぞと云ふに至つて、露西亞の形勢はかうてあ

る、英吉利の形勢はかうである、佛蘭西はドウ、亞米利加はドウ、世界の大勢はドウなどと云ふとは銘々天狗になつて鼻を突き合せておれが云ふ通りになる、イヤ將來は必ずさうならなければならぬ、所で標準が一向判らんからお互に威張て勝手なことが云つて居れる、そして又お互に誹謗もし論爭もするが、其の誹る者も論ずる者も、共に五里霧中に彷徨して居る、此の如く最も云ひ易い者は實に世の大勢論、策論なぞて何時まで議論しても標準なしの議論なれば果しがつかない。然ればどうにかして、此の標準原則とでも云ふべき者を攻究しなければならぬことである。然るに世の中の大勢と云ふべきものは鳥が造るのでもない、獸が造るのでもない、又草木が造るのでもなく、全く人間が造りだすより外はない。一家は一人の人が集つて出來、夫れが又た集つて村が出來、町が出來、市が出來、一つは國民が出來る、斯樣にして日本の社會が出來、東洋の社會が出來、歐洲の社會が出來、世界の社會が出來たので世の中とか、社會とか云ふものは全く人間が造つて居るものである。然れば世の大勢とか形勢とか云ふ者は松の木や杉の木や鴉や馬や猫や拵らへるものではない、全く人間に依つて造らるゝに相違はない。世の大勢は正しく個人の聚合したるものが造るものと極まつた以上は個人は如何なるものか、個人の自然の性向はどう云ふものか、個人の

希望はどう云ふものか、欲望はどう云ふものかと攻究して見れば、世の形勢もそれに伴なはれるに違ひないからそれと自から解釋される。然らば人と云ふものは如何なる性向希望を持て居るかと云ふに、第一に自己の身體を保護するとて是は人間は固より、如何なる動物でも身の保護をしないものはない、小さき蟲又は魚に至るまでもさうてある、皆な危險に對して己れの身を保護し又は氣候の寒い暑いなどの變遷なり、風雨に逢ふても分に應じて己の身を保護して居る。それから第二には同一の種族を繁殖せしむると云ふとが動物の定職になつて居る、自分と同一の種族を造るやうにすることは蟲類させる、絶滅されないやうに保護して大に同一の種族を繁殖なり、鳥類なり、犬ても、猫ても、皆な左樣てある、人間も矢張り人間の種族を繁殖すると云ふことを希望して居る。種族を繁殖せしめる希望と、己れの身を保護する精神と此二つは動物第一の希望てある、亦た人々自然の欲望てある、是より外にはない。或は高尚なる希望を煎じ詰めてしまふと此二つのものに歸するとになる。個人の希望が右の二つてある以上は個人の集つた國民、國民の集つた世界の大勢も此原則から生み出されて居るに相違ない。更に言ひ換ふれば世界の大勢は個人の希望を賬らしたるもの即ち國家の獨立同國民の繁殖と云ふとを根據として居るに外ならぬ

のである。つまり各國が敎育事業を盛大にし、實業を奬勵し、陸海軍を擴張するなぞと云ふとは其國の獨立を保護する爲と、又同一の人種を繁殖すると即ち國利、國權を擴張せんとするに由る者である。殖民政略と唱へて他の地方へ移住を謀り又占領する、夫れ許りじやない、英吉利は自分の文明を世界に輸出する、佛蘭西は佛蘭西語を他國に傳播する、獨逸は自己學術を外國に向て普及する等要するに自分と同一の種族の隆盛即ち繁殖を計るのである。そこて此原則が如何に應用されて、そして世界の有樣がどうなつて居るかと云ふに、歐洲中でも白耳義、丁抹の樣な小國は孜々として出來る限り自國の獨立を保護して居る。夫から、佛蘭西、獨逸、英吉利、魯西亞又た亞亞米利加合衆國と云ふ樣な大國は更に進んて國利、國權を擴張する爲めに世界に擴げ得らるゝだけ繁殖を計て居る。御承知の通り白耳義の如き國よりは何時ても國際公法に關するやうな立派な議論が出る、是はなぜかと云ふに小い國であるから、てございますからどしても自分を保護する爲めに國際公法のような正義的の武器が入用てあります、一體正義道德なぞと云ふとは固より宜しいとてはあるが、是はどう云ふ處より發するかと云ふに、多くは弱い者の口から出るとてございます、伊蘇普物語に小羊と狼との話がありますが、狼が小羊を取つて喰はんとした

るに小羊は罪もなきものを殺すとは宜しからずと云ふや、狼はおのれ蓄へ置たる肉を汝が喰たから其代りに貴樣を喰てしまうと云ふ、然るに小羊が云ふには私は其の蓄へたる所に行きたることもなし、それはこうこういふ譯てあると言ふて說明をすると、狼は成程さうてあるかと云つたが、又た理窟をつけて一昨年頃汝は己れの蓄へ置きた肉を喰つたから汝等も喰てしまうと云ふ、すると小羊は私は一昨年には未だ產れなかつたとて道理を述べる、狼はこまつて夫てお前の爺父が己れの肉を喰つたから其の代りに貴樣を喰てしまうと云ふて、とうとう小羊を喰つてしまつた語がある、強い奴は何とか、かとか理窟を付ける者てある、而して無理てございます、不道德てございます、亂暴でありますぞと理窟を云ふとは弱い者が云ふことてある、強い奴は正義道德と云ふとは餘り云はない、正義道德は元來弱い者が強い者を制裁するために云ふことてある、白耳義丁抹の如きが國際公法を八釜敷云ひはやすのは、つまり此理てある、即ち自國を保護する爲めてある、夫れが大國になると力が餘るから露西亞ても英吉利ても獨逸ても佛蘭西ても強國は國利國權を出來るだけ擴張して殖民政略をどしどし行ふのてある。

此原則から割出し、歐洲の列國かどうして此原則を今日の如く極端にまて施行せね

ばならぬ必要になつたかと云ふことをお話しいたしまする。

一體日本と歐羅巴とは全體の社會の情態が大變に違つてゐる。日本には非常なる金持がない。然るに西洋では一分間に何十圓と云ふ利息が入ると云ふやうなる大きな金持がある、其代り反對に隨分ひどい貧乏人がある。諸君も御記憶の通り米國のグヮント將軍が我が日本に漫遊されたときに、日本の貧乏人の樣子を見たいと云ふて東京の貧乏人の處へ往つて見られたるが日本の貧乏人は中々裕福なもので決して歐米の貧乏人のやうではないと云はれたのでござりまする。日本の貧乏人の有樣を探つた人があるが、最下等の者が一家三人暮しとして、正月元日に雜煮餅一切づゝと、鹽鮭の切身を一切買づゝ喰べる、夫れより更に進めば一家三人が雜煮餅一切づゝと、鹽鮭の切身を一切買て來て其一つの切身を三人も喰べる、此等が眞の貧乏人でござりまする、勞力者はどういふ樣にして居るかと云ふに中々裕福な者でございます、御承知の通り寢酒の一合位は隔晩位に飮む、まぐろの刺身は一週間に一度位は口に這入る、さうして一二錢位の石蕗などの鉢植が椽先に据えてあり、富士山か、婦人が猫を抱て居るなどのやうな石版畫の額は、壁の上に掛けてある、大工其他左官杯の辨當の添物は鯖の切り身か鯵か大根と油揚の煮しめか煮豆位は必らず這入て居ると云ふやうな譯で、實に裕福な

者でござりまする、西洋の貧乏人に比較しては眞の貧乏人とは云へない。西洋の眞の貧乏人は地面の上に住むとは出來ない地の下や家屋の下に住んで居る者が大きな都會には澤山ある、そうして一生涯自分の住居で火を焚いたとはない、燈火も點けたこともない、一本の蠟燭を見ると猶金剛石を見るが如しと或る書物に書いてありまする位にてなか〳〵元日に雜煮餅を喰べるなんと云ふ樣な境涯は出來ない、日本の大工は每晩に寢酒を飮むが、西洋の勞力者は麭包半斤をポケットに容れて製造場に往き正午過ぎになると休憩の少時間があるから其の製造場にある水(停車場にあるやうに鐵柱管から水が出る)を飮んでポケットより彼の麭包を出し、ムシヤ〳〵と喰べる、それより上等の者は麭包を二つに割つて兩側はバタを附け(恰かも日本で握り飯に燒味噌でも附けたやうに)これを新聞紙の反古に包んでポケットの中へ入れつゝ製造場に往き十二時半頃の休憩時間になると、水出の鐵柱管より水をシヤーと出しこれを飮み〳〵麭包をムシヤ〳〵と喰べる、丁度日本の大工や左官が鯵か油揚のさいて飯を喰ふ位に當つて居る。濠太利は新開地で、鐵道の事業が起り、道路の開鑿が起り、荒野の開墾が起り、實に職業の多い處でありまする、然るに公園地の內にある洞穴中に這入て每晩泊る游民が多い(日本では巡査が嚴しく叱かるから公園地に野宿

などする者は居らない是等の遊民は大抵生まの馬鈴薯や破れ着物やズボンなどを入れたるカンバス製の袋(布袋さんの袋の様にを持つて來て夜になれば洞穴の中に寢て明くれば海岸へ往て海の水で顏を洗ひ生まの馬鈴薯を喰べて居ます。此の如くどうしても西洋と日本とは社會の情態が大變違つて居る。是はどういふ譯だかと云ふに西洋では文運が發達して理學を應用する、經濟を利用する、交通が開けて居る、諸外國と盛んに取引をすると云ふやうな譯で、富が一個所のみに、吸收されてしまうから、貧乏人は益〻貧乏となり、金持は愈〻、金持となるのである。夫に又た金持は品物の廉いときに澤山買ひ占めて置くことが出來るから、昂くなつた時にも廉い品物が使はれる、一寸石油を買うのでも貧乏人は漸く一合位づゝ買うから昂い、金持は大きな雜詰の石油を買うから割合て大に廉い、靴足袋なり鉛筆なりをお買になつても一ダース買へば二つ餘計に附て來る、金さへ持て居れば此通りのことが出來る、貧乏人は其の力がないから益〻貧乏人になる。歐羅巴や亞米利加の樣な文明の利器が立派に具はつて居る處にては以上に申上げた事がいよ〳〵其度が劇しいから金持は長足の速度を以て益〻貧乏になるそこで貧乏人も長足の速度を以て益〻貧乏になるそこで貧乏人は殆んど存在することが出來ないほどひどくなつて來たものだから、あらゆる破壞的の事を工夫する樣になる、虛無黨とか、社會黨とか、共產黨とか、無政府黨とか云ふものが起り人の位地財產を平均せなければならない此の樣に上下高低があつては成らない全體社會の現在の秩序は間違ふて居るから之れを根本より破壞して平等にせねばならぬと、不平の餘り〳〵に言動することになる。夫は誰が惡いからといふ譯てもなく又強ち時の皇帝が仁政を施さないからと云ふ譯てもない彼等は主義として善惡に拘はらず社會全體を破壞し且つ主權者を片端から殺して社會の全組織を根本より改めなければならぬと主張して身を犧牲に供して運動してゐる。露西亞の虛無黨などは嚴密なる探偵の中にあつて一寸ても嫌疑があれば捕縛され、シベリヤの雪の中に送られ、終生を鑛山の穴掘に使はれ殆ど死んだと同樣の嚴刑に處せらるゝにも拘はらず、或は鐵道の下へ穴を掘り、丁度皇帝を乘せた汽車の通る時爆裂する樣な工夫をする、夫れには久しく鑛山學、土木學などを研究してあらゆる技術を學び苦心して始めて應用の時機に際會する、我は帽子の內へダイナマイトを容れて皇帝が見へるときに萬歲と唱へて振ると破裂する樣なことを發明した學者もある、又た迷信深き皇帝を誘ひ出し其處て暗殺せんが爲め先帝の幽靈となつた者もある、夫れから皇帝の侍從と容貌のよく似た者、をさがし髮ても髭ても理學を應用し

て其待從と寸分違はぬ樣に侍へて皇帝の傍に往て暗殺せんとしたる者もある、其他あらゆる手段を以て社會全體を破壞せんとして居る。然れども惡意を以て全體の破壞を試みると云ふ譯ではない、虛無黨も、社會黨も無政府黨も期する所は位置財産を平均して主權者なり又たは金持を打破するのであるどうも金持が益〻跋扈して人情が日に酷薄になつて來て耐えられぬ、一日も早く之れを打破しなければならないと云ふのである。そこて歐米諸國にては宗教家は宗教家て其博愛慈善の考へより「人間が此の樣に喰へない樣になつては困る、どうしたら宜からうか」と心配する、經濟學者は「人が此の如く麪包が得られん樣になつてはどうしたら宜からうか」と考へ、政治家は「虛無黨や無政府黨の樣な社會の秩序を紊亂する者は如何にしたら宜らうどうしたら社會の平和が維持せらるゝてあらうか」と考へ、つまりどうしたならば己れと同一の人種を保護し且つは人情も酷薄にならぬ樣になり、又は社會の秩序も亂れいとになるだろうかと考へ出した結果、遂に「自分の國に餘つて居る資本と勞働とを出來る丈け他所へ掃き出すより外はない餘つて居る人間を移住せしめ餘つて居る力を投散して弱い人種の所をば出來る丈け占領するより外は仕方がないと云ふ」になつて申合せた如く植民政畧が流行することになつた、言葉を換れば植民政略が今日に流行になつて遂に今世界の大勢となりました。つまり自國を保護する制限より一步進みそうして同一の人種を繁殖する必要が愈〻極端に迫つて來て弱い人種の所の領分の未だ定まらない土地を占領して仕舞うと云ふ大勢になりました、麪包が得られないと云ふ所より背に腹は換へられないと云ふて目を眠つて他國を占領するそれが植民政略と云ふ文字になつて現はれて來た。我が日本にても鐵道が十二分に出來電氣の應用が十二分に出來そして總ての機關が具はれば遂に以上の樣になりまするも測られないと存じまする。西洋にては電氣力を十二分に應用し、又た蒸氣力を十二分に應用し、理學的の諸應用に改良に改良を加へて僅の勞力と廉價とを以て非常に品物が澤山出來るやうになつた、夫れ故に人の需用するよりも供給する方が餘計になつて來て、品物が餘り、勞力が餘りまして、遂に止むを得ず人種の弱く素養の薄弱なる所へ此等の餘りたる勞力、資本、物品等を掃き出せと云ふことゝなり、前に申しました通り植民政略の流行となつて來たのてござりまする。そこて其結果が如何になり、來つたかと云ふことは後てお話し申すことゝ致し以上申述べたる義を通俗に解釋せん爲め茲にドクトル・ボイスキルバートの著述なる『シーザーの標柱』と稱ふる小說に付て少々お話し申しまする。

此のボイスキルバート著の『シーザー之標柱』と云ふ書物は日本には然まで流行致しませぬが、西洋には非常に流行する、私が見た本は三十二版でございました今はもう四十版位になつて居りましやう、原本は亞米利加で出來たもので、英吉利、獨逸、佛蘭西等各國に傳播して居りまするが、日本丈けには來ない、私は漆太利より歸朝せし友人より見せて貰つたのである、彼地などにては職工場でも造船所でも乞食のやうな勞力者でも此『シーザー之標柱』と云ふ本を僅かの休憩時間にも讀んで居り又た公園地にでも行けば穢いポッケットの中から此の小說を取り出して讀んで居る者が澤山ある由にて、表紙も極く粗末にして誰にでも廉く買へる樣にしてある、斯樣にして彼地にては一般に流行して居るが、日本丈けは流行しない、其の流行しない所以もある。夫れて此『シーザー之標柱』はどういふことが書いてあるかと云ふに、大體を申せば二百年ばかり未來の事蹟の小說で、亞非利加大陸の中部なるウガンダと云ふ處に移住して居るヘンリエッタと申す人があるが、亞米利加のニューヨルクまで旅行するに汽車や汽船ではなく輕氣球に乘つて行きます、此の如く理學の應用が出來る丈け應用してある一體此の小說の著者が醫學者であるから精細にして而かも架空の想像ならざる理學的應用が記載してあつて實に面白いのである旅館抔の構造も理學の力を以て造つてありますから實に完全なものであります、此處へ泊つて『酒を持て來て呉れ』と命ずると給仕のボーイは妙なる顏の色をして『今ではそんなものはありません、二百年許前に高曾祖父の頃には酒とか申すものがあつたそうでございまするが、今ではかゝる飲料はございませぬ』と答へる、ウガンダから來た先生は『おれの所には今でもある』と云ふと、ボーイは『なるほど彼方などにはあるかも知れませんが、此方には一切ございませぬ』と云ひました、丁度其時に客が傍に飯を食べて居りました、ずるとウガシダの人は『私は折角こちらへ來たから一杯酒を飲まうと、これを命じたるに、酒などゝは昔にあつた飲料のことだとボーイが申しますがどうか酒は飲めますまいか』と云ふに、其客の答ふるには『それは肉だとか、果物だとか、菓子だとか、云ふものゝ中にアルコールの分量が丁度能く調合して這入て居りまするから、夫れを喰べれば自然に酒を適度に飲んだやうになる、それをお命じになつてもあがりなさい、何時の間にか、ほろ〳〵と心持よく醉が廻つて來ます、肉や、果實の中に巧く理學を應用して酒になるやうに仕込んであるから、用ゐる中に云ふに云はれない好い心持になる、昔はそれをガブ〳〵飲んだのでございますが、今では自から食物に侵込ましてありますから、ほろ〳〵醉ふやうになつて居りま

す」と云ひたり。ウガンダの人は大に驚ろきました。夫から食事を了りて散歩に出掛けると、向ふからアラビヤ馬の極く勢のよい六頭立の馬車に乗つてカバノ公爵なる人が街道を走らせて來た、すると一人の乞食が其の馬車の通る路に居るから、ウガンダ人か避けよ〳〵と云ふ内に、馬車が近寄つて來て非常に危險てございますから、走つていつて「オドキナサイ、アブナイ」と云ふて乞食を避けさした、カバノ公爵は揚々として馬車を驅つて往てしまつた、すると件の乞食がウガンダの人の所へ來て「お前は何處の人ですか、金持の通る前に居る人に避けよなどと云ふと、金持に無禮になるから、巡査が捕縛します」と妙なることを云ふ故、ウガンダ人はこれに答へて「私はそれは一向分らない、唯金持が通る路に居て馬車に突き當りさうですから忠告してやつたのである、これは人情當り前なことである、然るに巡査が捕縛するなどと、そんな馬鹿なことはあるべき筈はない、何のことだか一向分らない」と云ふと「全體あなたは何處から來ましたか」と問ふから「私はウガンダから來ました」と答へると「成程あちらなどでは事情が違いましやうから、左樣かも知れませぬ」と云ひました。すると前の乞食が馬車を持て來てウガンダ人に對し「此の馬車に乘りなさい此は危險な馬車ではないから」と頻りに勸むるより、不思議だと思つたが、乞食の云ふがまゝ馬車に乘つた、

凡そ十五分間もズーット馬車は一直線に往つた、さうすると或家に着いた、乞食は直ちに奥に這入つて凡そ十分間も過ぎると立派な紳士が出て來て「唯今は實に君の御蔭で助かりました、若し君が注意して手を引て呉れなければ私は助かりませぬ、誠に有難いことである」と云ふと、ウガンダ人は「私は乞食を救ひましたが君を助けたことはない、お禮を云はるゝ筈はない」と不思議そうに云ふと、其人が「先刻の乞食は實は私てす」と云ふから「いや君は奇麗な人てありますが、先程の乞食は穢ひ膿が出て膏藥だらけてありました」と云ふと、其の紳士は「夫れはあなたが一向此國の事情を御存知ないからてす實にもう此國は金持計り跋扈して居ります、其れに付ては色々とお話がありますが、實は私はあなたが全くウガンダの人か、又たは探偵ではないかと、半信半疑して居りまして、其實否を電話てウガンダの同志に問ひ合せて見ました、すると全くあなたはウガンダの人て正直な君子てある、道德家てあると云ふ返答が來たから、今より私の身の上をお話申す譯てあります、私は何を隱さう金持を破壞せやうと苦心する秘密結社中の一黨員てござりまする、探偵の嚴しい爲めに他へ出るには化學や理學の力を應用して顏に膿のやうな色をなすくつて穢いやうに見せかけるのであるから、洗へば直ぐに元の通りになる、今は顏を洗つて本當の私になつて來たので、

す、先刻の乞食は實に私でございまする」と云ふと、ウガンダ人は「實に不思議である、私の國の人情では人が馬車にても觸れやうとすればお避けなさいと呼ばるそれから其人の手を持て避けさして遣る位は當り前てあるのに、此の亞米利加國てはそんなことをすれば巡査が怒るとは分らん」と云ふと、紳士が「それは其筈てございまする、警察官ても新聞記者ても皆な金持の奴隷てございまする、夫れて金持の前て無禮なことがあれば捕縛される、或は馬車に引かれて殺されても誰れも何とも云ふ人はない、構はない仕方がない、殺され損てす、夫れてありますから君が先刻私の手を持て助け て下されたから無禮の奴てあると云ふことになつて、却て私よりあなたの方が叱かられて警察署へ連れて行かれる有樣てある、總じて此國の人情は右樣にございます から君の國の人情にては想像は出來ますまい、私は此等の事が第一不平てあります から社會を破壞しやうと思ふのてす、先刻の事は急度もう新聞に出た時分てせうから見ましやう」と云つて電話を掛ける、さうすると『カバノ公爵に對する無禮漢』と題したる新聞の記事が電氣仕掛て直ちに部屋に具へ付けてある大鋭の樣なものに映つて來る、それを讀むと實に事實は顛倒して却て公爵を譽めて書てある、即ちカバノ公爵が家族を連れて愉快に公園に往からと思て街上を驅らると、不潔な者が無禮を

加へやうとしたるに、流石金持は金持丈けに寛大なる度量を以て車を避けさせて經過せられた、然るに其の無禮なる不潔の乞食を或る奴が引つばつて往つたが此者は更に一入の不敬な奴てある、と書てある。かゝる人情てあるからウガンダから來た先生には少しも想像が出來ない、その筈てす、金持は新聞記者を買收する、官吏を買收する、殆ど人生の快樂を極端に盡して居て最早別に快樂が無いから、カバノ公爵も大金を出して伊太利の古い貧乏華族の株を買いまして今の公爵になつたのてす、其實亞米利加の只の金持てございまする、又た有名なる英雄ワシントンの後裔なるワシントン令孃を妻にせんと計畫せしまて肉慾の人てありまする。ウガンダの人は段段色々な話を聞て、こう世界が電氣だの蒸汽だのを應用して少數の人が富を吸集し、金持が跋扈して來てはどうしたら宜からうと慷慨した。夫れから其內に段々紳士と心安くなりたるが、紳士は思ふ樣モー此人ならばどういふ話をしても間違はあるまい、秘密結社のことを話しても宜いかしらん、本部に連れて往つてもよかろうかと思ふが、まだ躊躇して居る、そして色々の話を仕掛ける、するとウガンダ人は頻りに慷慨悲憤の情を表はし且つ言ふ所は實に危險なることゝ雖も能く實行致しまするから、今日は自分等の目的を話しても必らず漏洩はないと考へて、紳士は愈よウガンダ

人を秘密結社に連れて往かうとして、其目を隱し、さうして馬車に乘せて連れて往つた、東へ曲がり西へ曲がり左に折れ右に往き又た折れ又た廻はり、あちらこちらを長き時間驅けて往き、遂に馬車より下ろして目隱しを取つた、取られて見ると一大會堂にて燈火が晃々と一面に點いて居つて全く地の下でござりまする、其の會員が幾百人と云ふ程列び居りて何か會議をして居た、是は會員中に一人の探偵が居ると云ふことが分つて、今や之れを處分せんとする最中である、參謀が三人ありて先の乞食を裝ひたる紳士も參謀の一人である、黨の領袖及び參謀都合四人で地の下の更に奥の密室に這入て相談を了り、軈て密室より出て來て報告をする、彼は探偵に間違はないと報告するや、會員一同は異口同音に「死」と云ふ聲を掛ける、すると探偵と目指された奴が中央の所に引張り出されて來たが眞青になつて居る、其内に死んでしまつた、ウガンダの人は絞殺でもするのであろうと思つて見て居たが、何にもせず只だ死んでしまつたから、どうも不思議でならん、どう云ふとかと聞て見ると、「首を絞めるの斬るのと云ふ殘忍なることは二百年前の殺し方で、今では理學の應用で苦痛もなく直ぐと靜かに殺ろすのです、此の結社に一人の醫者が居りまして此の醫者は貧乏である、が、金持の病家へは往かない、貧乏人の病家へばかり往て廉く診察をして居ります、此の醫者が毒藥中の一番惡い毒を化學的作用に依つて一滴小刀の先に付けて置き、其れを持て人の皮膚に一寸刺せば其人々忽ちに死ぬと云ふ事を發明した、我黨の爲めに發明して呉れた、つまり金持を殺す爲めに造つて呉れたのだが、今ま探偵を殺したのもこれである、今は首を絞め首を斬るやうな野蠻なことは決して致さない」と。夫から色々な話をして一旦歸ることになりましたが、先には目隱しのまゝ馬車で大變廻つて來たが、今度は家に歸へるには殊の外早かつた、不思議であるが、先には目を隱して廻はり廻つて連れて往つたが、今度は直に歸へつたから早く歸れたので、これもウガンダ人に地下の秘密會堂の在所を判からん樣にしたのでありまする。それから後、年月を經て秘密結社の領袖はいよ〳〵全社會を悉く破壞すると云ふ大運動を實行することになりました。一體此黨の領袖シーザー・ロミニはどういう人であるかと云ふに、非常な君子で慈善家で、云ひ分のない完全な人である、所が伊太利より亞米利加に移住して農業をして居りましたるが、或年に收穫物を抵當にして金を借りたのである、金を借りた所が非常な高利でありまする、其年收穫が不充分で借りた金を拂ふことが出來ない、さうすると土地でも家でも道具でも何に一つも殘さずすつかり其の貸主が持つて往つてしまつた、夫れから慨然としてから社會が殘酷になつ

て居てはならぬ、第一金持を打潰してしまはねばならぬと云ふ大慨慨心を發しました、非常に際すると、こういうことがよくありまする、日本にても鎗掛の松と云ふ男が大晦日の晩に江戸の兩國橋をズッと通ると、十四五の處女が石を袖に容れて身を投げやうとしてるからお前は何をするかと問ふと、少女は「私はどうでも死なねばなりませぬどうぞ死なしてくだされ」と云ふ、其譯はと問ふと、「私の兩親が或金貸から金を借りたが、不幸が打續いて其金を拂うことが出來ませず、內は大困りに困つて致し方がありませんから、私一人でも死んでしまつたなら、一人丈け入費が助かろうと思ふての思ひ立ち、どうぞ死なして下さるなら、有り難うございます」とさめ〳〵と泣いて申しますから、鎗掛の松は坐ろに惻隱の心を起した所が丁度或る大名の金持か雪見船て藝者を乘せてドンチャン〳〵と遣つて橋の下を通る、夫を見たる鎗掛の松が猛然として自分の懷中にある金をスッカリ其女に遣つて助けた、さうして雪見船を見下ろし、今に見て居れ彼等を破壞して遣るからと慨然として九て性質が變つて其後金持ちの諸侯の倉に忍込んで金銀を奪ひ品物を取り、そうして貧乏人に呉れたと云ふことがある、仁者は大刺激に逢ふと却てこういう性情になることがよくある。偖又た前述の亞米利加の破壞黨は段々考を廻らして、遂に大有毒なる瓦斯を大なる袋

に容れて輕氣球に乘つて空中に上り、大慨いゝと思ふ處に往つてドーツト袋を開けると、さうすると一度に地上にある一万人や二万人は直ぐに殺せる、此等は理學の應用にて出來さうなことてありまする、我々が遣つて見ても出來そうに思ふ、其の仕掛がちと六つかしいてありませうが、鐵砲などより餘程早くらちがつく。夫れて以てとうとう社會をすつかり破壞し、人間を悉く殺して仕舞つた、何千万何億と云ふ人の死骸がうね〳〵して横はつて居る、そこて死骸を積み累ね積み累ね塔を造り、其表面をセメントにて塗り、雲の上までも屆くやうに建てる、丁度基督敎にある太古ノアの大洪水にて世界の生類を悉く殺したやうになつて居りまする、又た基督敎の古典にある雲に衝くバベルの高塔を建てると云ふ代りに、今度の塔は死骸を積んて拵へる、どこまて積んても如何に理學の力てあつても何千万、何億と云ふ人を殺したのてありますから止め所がない、どこまて建てゝもねることとは止め、塔の表面に近世文明の大破壞の紀念として其由を大書したてれを領袖シーザー・ロミニの名に依りて『シーザー之標柱』と喚ぶことになつた。然るに太古ノアの大洪水の時、ノアが船の中に鳥獸や、虫や、草木や、色々な生類を一雙宛乘せて洪水を遁れ、以て世界の生類の種を殘して置いたと同じ樣に、ウガンダの先生は色々

の文明の利器や、近世理學の發明品を輕氣球の中に一杯に乘せてウガンダに歸り、歸つて來て沈思熟考するに、社會はとう〳〵悉く破壞してしまつたから、此後は完全無缺なる社會を新に造らねばならぬ、さうするには外より惡い人が入つて來てはならぬとそこでウガンダの山中に石門あるを幸ひに外來の弊惡、誘惑の來ない樣にピタリと石門を堅く締めてしまつて、其中にある平原に村落を作りてあらゆる善良の道德政治を行つて居た、さうすると三年ばかり經ると石門をコン〳〵と叩くものがある、はてな誰か來た樣だが、開くか開くまいかどうしやうか、然かしモー三年も經つたのだから部內の組織も定つて居るしそんなに心配はあるまい、どんな人が來たかと思つて開けると、一人が這入て來た、其人が云ふには、私は社會大破壞の節に生き殘つた者でございまするどうも實に世界が臭くつて〳〵たまりませぬ、死んだ人が燒ける臭氣と云ふものはたまりませぬだから方々を廻り廻はつてやう〳〵此處まで來ました、尙ほ燒殘りの世界の話を頼りに致したと云ふと、まして愉快でございまするが書いてござりまする、是がボイスキルバード著の『シーザー之標柱』と云ふに書いてある、金持を誡める爲の小說で、能く亞米利加の現狀幷に將來を露はして居ります。此れは唯一片の小說であるが、西洋の貧富の懸隔の甚だしいことより書き出し

兼ねて社會黨の大勢力を得べきことゝ、大破壞の必らず來るべきことゝ、又た大破壞するも却て利益なきことゝを警戒する爲めに工夫をこらした小說である。然るに此貧富懸隔の動機は銳利の政策を生み出し遂に植民政略と云ふことを八釜敷く云ひ又た頻りに實行する樣になつて來たのである、其聲と實行とは日を追つて段々大くなつて來て滔々たる世界の大勢は唯一條の植民政略となつて來たそうして此の大勢が東洋に向て迫て來て我が日本の如きも亦た此の大勢の渦中に投ぜらるゝことゝなつて來たのであるより勉めて世界各國の風土文物人情風俗等を研究し言ひ換ふれば地理學を研究して今の時に處する道を講せねばならぬと信じまする、地理學は今の日本には大必要の課程でござりまする、敎育の根柢は此に置かなければなりませぬ。

今までボイスキルバードの『シーザー之標柱』なる小說のお話を致しましたが我が日本には凡そ西洋で盛んに行はれる書籍や新に出版された書籍は大概輸入し、それを好みて讀む、歐米の新しい有名なる著述は皆な日本にて直ちに翻譯する、然るに此の『シーザー之標柱』のみは這入て來ない、私の友人が持て居たのが、已に三十二版であつたからもう五十版位てございましやう、之れを歐米の各國は總て自國の語に翻譯を

して大喝采を得た。私の友人は十年前濠洲に渡航し、同地の造船場に行つても製造場に往ても、何れの處にても人が此本を讀んで居るからどんな本かと思つて一冊買ひ船の中で讀んで見たら中々面白かつたと云ふて其の讀んだ後を私に見せた夫を大略お話申しましたのであります。尤も一昨年に至りて日本にても初めて翻譯された、夫も件の友人の緣故の人が翻譯したのである。私共は西洋人とは違い唯面白く此の小説を讀んだり聽いたりするだけであります、日本にては『歐羅巴、亞米利加などより輸入した珍本を翻譯すると實に流行を致しますが、此の『シーザー之標柱』などは日本人は面白半分に讀むので、一生懸命に讀む者はない、則ち歐米又は濠洲にては大金持があつて大貧乏人がある、勞力者が困つて居る、故に勞力者は皆な金持に對して大に不平がある、故に此の小説は貧乏人が金持に對する大不平を洩らすのであるからいづれも喜んで愛讀する、然るに日本にては前にも謂ふた通り勞力者もさまて貧乏せず又彼地の如く大金持もないから、まだ〳〵此の小説を愛讀するまでの趣味が生しないのである、歐米又は濠州と我が日本とは總ての社會の狀態が違ふ、とは是れにても好く判かる。

歐洲各國にては前にも申し上げました通り、貧乏人が多くて飯は食はれない、則ち麭包は得られないと云ふ結果から、止むを得ず植民政略と云ふことが盛んに起り、餘つて居る勞力餘て居る資本を掃き出して力の弱ひ組織の定まらない國へ流し込みます。一口に云へば植民政略が熱病の如くに流行して居る。今より四百年前歐羅巴人が亞米利加を發見して、續々移住しました。さうして今の英領亞米利加も加奈陀も北米合衆國も元とは土着蠻人の所有てあつたが、遂に歐羅巴人が植民し、南亞米利加にも亦植民政略が應用されて、すつかり歐羅巴の者になつた。そして南北亞米利加にも遖利は少くなつて來た、すると濠太剌利亞に植民した、尤も濠洲を發見したのは殆んど二百年前てござりまする、然かし此に初めて植民したのは百十餘年前てござりまする。一口に云ふと歐羅巴に住んて居りました人民が多くて仕方がない、麭包が得られない、即ち飯が食へないから、どうしたらよいだろうと云ふて居る所に、丁度亞米利加と云ふ新太陸をコロンバスが發見し、そして段々亞米利加に移住して此所に新なる歐羅巴を作つたのである。最早亞米利加に於ては遖利が得られぬ樣になつて來たから、濠太剌利亞に植民した、濠洲の各植民地は今ては立派な責任內閣を作り、鐵道を盛に起し長足の進歩をして未來には第二の亞米利加が出來んとする。此の如く濠太剌利亞も段々遖利がなくなつて來た、するとソロ〳〵亞弗利加に手を

出し始めた、亞弗利加は歐羅巴に近い土地で、古い時代から判つて居たが御承知の通り氣候は炎熱であるそうして大きな沙漠がある、それで歐洲の各國にても此の太陸のみは占領せざりしが、米國にも、濠洲にも、道利が乏くなると亞弗利加の分割が遂に始まり、英吉利も、伊太利も、佛蘭西も、獨逸も西班牙、葡萄牙も、さては小國の白耳義に到るまでいづれも競つて亞弗利加を占領し、今ではサハラ大沙漠の砂迄も佛蘭西の領土となつて、所謂佛蘭西の勢力範圍となつたのである。さあそうなつて亞弗利加も悉く侵略をし盡くしてしまうと、殘つて居る所は亞細亞ばかりになつた。其の亞細亞の中でも北方一帶の西比利亞は露領であるし、印度は英領である、安南は佛領であると、段々調べて行けば目下殘つて居る所はペルシャ、シャムと支那、朝鮮と日本ばつかりである、ペルシャ、シャム支那、朝鮮、日本が獨立して殘て居るのである、しかし殘つて居るには相違ないが、其の中の一國を除くの外は正當に獨立して居るのではない。ペルシャの如きは英領と露領との間に狹まつて居るから、此の兩國の權力の平均に依り辛ふじて獨立して居るのである、露西亞に煙草の專賣權を許可せば英吉利にはアフガニスタン鐵道の延長を許可すると云ふ有樣で、此の兩強國の均力の爲めに天秤に懸つてぶら〳〵して獨立して居る、本當に積極的に獨立して居るのではない、それだから戰々競々として兩方の國の御機嫌を取つて居る、露西亞の皇帝にペルシャの高貴な人が御目見へに行けば英吉利へも御目見へに行けば露西亞へも亦た其通りに致します、そこで兩國でも互に待遇を大層に厚くして互にまけぬようにすると云ふやうな譯で、隨分優待をする、これは儀式的に優待するのであるが、實を云へば此の如き有樣で、どうかこうかして獨立を保つて居る。次にシャムはどうであるか、文久二年即ち西曆一千八百六十二年今より四十年前、シャムの東隣なるカンボジャ王國を佛蘭西が亡ぼして、又た之れと接する東京をも滅ぼし、夫れから安南には內亂があつて、明治十七年に佛人に侵略せられ、今では佛國は支那の境から東京、安南を懸けて交趾、支那、カンボジャまで占有して居る、かやうに佛國が侵略するのを嫉みて英吉利は明治十八年ビルマと云ふシャムの西隣なる古い王國に對し、つまらぬ名義を以て開戰し、直ちに之れを亡ぼして占領してしまつた、然たばシャムの東には佛領及び佛の勢力がある、西には英領及び英の勢力があるこの兩勢力の均衡の爲めのみてシャムは僅かに獨立して居ると云ふ有樣である。それから朝鮮なり之も本當の獨立ではない、僅に露西亞と英吉利と日本との天秤に掛つて均勢の爲めに獨立の姿をして居るのである。支那も獨立して居るには

遠ないが其の獨立とても强固の獨立とは云へぬ、旅順口も、大連灣も、膠州灣も、威海衞も、云はゞ國都北京の咽喉とも云ふべき所を晴天白日の間に列國が分取りをし、又た北京は列國の軍隊に占領されて居る主權者は國都より逃れて山中の小都會に蒙塵して居ると云ふ有樣であるが上に、此の成行を豫想すれば國家の基礎は全く潰敗し最早完全なる獨立國とは云はれない。只獨り日本は海洋中に屹立して、列國環視の中に今日まで國威を損せるともなく寸地を失ふこともなく體面を全ふして來たけれども、歐洲列國の植民政略の極端まで行はるゝ今日に於て益〻我國の威武國力を發達させやうとするには、浮か浮かとして居つては出來るものでない。第一に世界萬國の形勢を能く知るやうにしなければならぬ、教育家、政治家は勿論、實業家、宗教家等男でも女でも誰でも彼でも苟も日本人であらば必らず地理學の知識を養成し發達させて、四千七百萬人の頭腦が銘々に世界の形勢を會得するやうになつて、列國の兵備貿易のことより都ての得失利害を了解して四千七百萬人の地理學者、四千七百萬人の外交家を作り出せば、萬一のことがありましても狼狽するやうなことはない、チャンと準備して居りますから立派に國家の體面を全ふすることが出來ます、されば、どうしても我國の體面を保全し國力國威を發達宣揚せしむると云ふには地理學

思想の養成は一大急務である。

西洋と日本と智識度合を較べて見るに日本ほど或る一部人士の智識の能く開けて居る所は少ない、獨逸と英吉利を除くの外は日本ほど醫者の學問技術の進歩して居る國はない、このことは歐羅巴人も確かに認めて居る、それから警察ですが警察制度は隨分完全である、又た警察官の廉潔なることは世界無比でございまする、西洋では往來の人が巡査に道を教へて貰うと、其の巡査は金を請求するとか、酒を飲ませてもらうとか、中には妓樓を教へて一盃の酒のおごりに預かるとか云ふやうなことがあるさうです、日本には絶えてそんな事は聞かない。それから郵便制度の如きも隨分完全と云つてよろしい、日本でも勢力の安いのが一原因かも知れませぬが、三錢の郵便切手なり、一錢五厘の端書を郵便箱に投げ込めば山の中の一軒家でも屆く、たとひ大井川の水源の奥の木挽小屋の中でもチャンと屆く、西洋では左樣なることは出來ませぬ、邊僻な所などでは村役場へ郵便物を集配人が入れて去る、ガラス箱ですから宿所姓名が表より見えるやうになつて居ますから甲なる人が乙なる人へ宛手紙を出してモーう今日あたりは乙より返事が來さうな者だと思ふと、態々役場へ見に往くのです、或は役場へ

行く人があれば、返事の來て居るかを見て來るやうに賴んでやる、そんな譯けて各々勝手に自分へ名宛の郵便物をガラスの函から取つて來るのであります、苟も日本ではそんなことはない、郵便の便利なるとは無比である、實に發達して居りまする。それから西洋の雜誌や新聞を讀んで御覽なさりませ、深い考の掲載してあるのは誠に少ない、高尚の議論があることは珍らしい、多くは、日本の雜誌にあるやうなものが書いてある、中流以上は左程智識が違はない、しかし中流以下に至ては大變な相違がある、日本でも新聞を讀む人が凡そどの位あると云ふに、新聞の日々の賣れ高が實際漸くのことで七十萬枚しかあるかないかのほどである一枚を平均三人宛讀むとしても二百十萬人である、然しながら新聞を讀む位の人は必ずしも一人で一つの新聞を購讀すると云ふわけではない、中には五種七種も購讀して居る、そうすると實際の讀手は二百萬より少數の人である、即ち日本の人口が四千七百萬人とすれば其內四千五百萬は新聞すら讀まない譯の分らない人てござりまする國家の輿論なぞ云ふても二百萬足らずの人の云ふ通りに成ります、他は新聞を讀むことすら致さざる譯の分らぬ者のみてござりまする。此の點が西洋と違ふ、西洋人は中以下の者が大概の智識を以て居ります、隨分中には ひどい奴もありますが普通の智識は餘程發達して居りまする、夫を日本人は缺乏して居る、智識が普及して居らない、常識が乏しい、是れが日本と西洋と大なる區別のある所て御座りまする、西洋人は十人の內八九人は譯が分つて居ります、國民的思想も多少以て居る。日本では中以下の智識の程度が低いから西洋のやうにはいかぬ、此點は早く改悛し發達させて普通の智識を中以下に普及せなければならない、實に智識の普及こそ國の元氣を養成する大原因てござりまする。私は曾て山陰道に往きましたが、山陰道の日本に對する形況は、丁度日本の世界に對する形況と少しも違はない、智識の程度は他地方と較べて山陰道は劣つて居ります、私は山陰道に三十日も居つて、そうして馬關に來た時は世の中が違つたやうに感じ、實に愉快てござりました、山陰道は御承知の通り山が多くして交通が不便てあり太平洋沿岸のやうに往來も頻繁てないから、自然開明の度も後れて居る。日本の全體から山陰道を見るのは、猶ほ世界より日本を見るやうなものてあるから、山陰道の我が日本に對して智識を進めねばならぬが如く、日本は亦た世界に對して勉めて智識を普及し進歩させなければならぬ、そうして世界に對する日本は、日本に對する山陰道の如くにならないやうにせなければならぬ。中流以下の人間もドシ〳〵智識を進めて世界の大勢を諳んずるやうにせねばならぬ。前にも云ふ

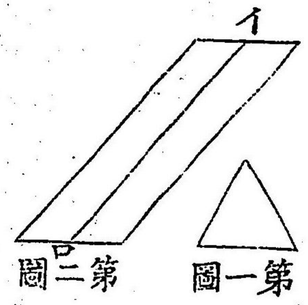
通り第一に地理學の智識を普及せねばならぬ、此の智識が何より必要である。然るに此の地理學と云ふものは甚だ面白くないものでございまする、日本の地理書を讀んでも西洋の地理書を讀んでも實に面白くない、英吉利の倫敦が北緯何度何十何分に當りてテームス河の北岸に濱して居るとか、露西亞のモスコーの人口が幾十萬であるとか建築物がどふだとか、佛蘭西の製造所が何んだとか、獨逸の物産が何々で、鐵が出るとか出ないとか、石炭に富んで居るとか居ないとか、丁抹の宗教が基督新教とか舊教とか、チリーの政體がとうで、風俗はどう、兵備はどうと、誠に趣味のないことで、一度はどうかこうか覺えても四五日經ては直ちに忘れてしまいまする。それは無理のないことである、實に教へる教師自身も自分が面白くなくて教授するから、聽く者は猶ほ面白くない、先生も忘れる生徒も忘れる、忘れる樣では地理學の普及を口に唱へても仕方はない。夫れだから地理學を研究するには、第一に誰にても分るやうに注意し、學者が聞ても、百姓が聞ても、漁夫が聞ても、女が聞ても分るやうに致さなければならぬ、そうして小學校の初歩の子供にても分るやうにすると云ふことが必要である。第二に忘れないやうにすること、即ち永く記憶の出來るやうにすることが必要である、唯今申す通り宗教が何んだとか、地勢の高低はどうだとか直ぐ忘れるやうてはならぬから、覺えたら何時までも忘れぬやうに致さねばならぬ。第三には此迄のやうに器械的に山川、都邑、物産、宗教、人情などを羅列するてなく、道理に訴へて道理上斯てある斯ならなければならぬと云ふやうに思考力を回らし、此力によりて記憶し判別するやうに致さなければならぬ。以上のやうにして地理學を研究致すなれば今日の忘れやすい面白くない弊を除くことが出來やうと信ずる。私も最初地理學の研究に志しては見たるものゝ矢張り面白くなくて覺えては忘れ、忘れては又た新に覺えると云ふわけて少しも捗取らない、これはどうしたら宜しかろうどうしたら正確に覺えられるならんと思ひ、思つて、一の考を起したのは今より十三年許り前のことてありまする、丁度佛蘭西の地理を見て居つた、御承知の通り佛蘭西は西にビスケー灣があり、南に地中海があつて、ギロンド河が東から西に流れてビスケー灣に注ぎ、ローン河が東から西に流れ忽ち南に折れて地中海に注ぐ、して見ると此の兩流の間にどうしても高い所がなくてはならぬと思つて地圖を開て見ると、セヴアン山脈がある、なる程と思つて少しく發明する所があつてそれから總ての地理をこうゆうやうに研究したれば宜しからうと思ひはじめた。これらが聊か考へた始めてあつてこれから段々簡便なる研究の仕方道理に訴へて研究する仕方を考へて地

理學に關する一の研究法を作つたのであります、これが今より逐次に講義を致さうと思ふ私の地理學であります。

(三) 日本地理考究の方針

今より日本の地理に付き考窮せんとす。日本は我々の生國なるを以て、その地理の如きは誰人も詳知し居れども大體の方針に付ては少しく考ふる所なからざるべからず。

日本の地形は先づ大體に於て第二圖の如く細長きものにして、柏子木を斜にせし樣のものと見做して可なり、而して又た同圖のイロの如く中央に大山系ありて國の脊骨を作せり、然れば假りに斧なり鋸なりを以て日本の國土を橫に截り絕ちたらんには第一圖の如く三角形をなすと知るべし。此の三角形の頂點即ち中央大山系には水蒸氣多く凝結して雲となり、雨となり、氷となり、雹となり、霰となり、雪となるを以て河の水源は必らずや此の山系即ち三角形の頂點にありぬべし、而して此等の川河にしてイロの右に出づるものは南流して太平洋系に注入し、イロの左に出づるものは北流して日本海系に注入すること



第一圖　第二圖

を悟り、又た地形かくの如く幅狹きを以て日本に長き河のなきことをも悟り、又た地勢第一圖の如く傾斜急激なるを以て流勢急激なるのみにして大なる河のなきことをも悟り、幷せて日本の河はあまり舟航の便に供するに足らざることをも悟りぬべし、而かも流勢急激なるを以て舟には便利少き代りに水力の利用即ち水車器械などに水力を應用する事と人力電氣の發作には甚だ便利なることを悟るべし、況んや日本の如く石炭の少量なる國柄にして且つ外國にても石炭は漸く採り盡くさんとする將來に當りては、此の急激なる水流は日本將來の經綸となり立國の根本となりて大勢力を揮ふべし。

又た日本の國土は蜿蜒として北より南に向ひて伸びに伸び、其間三十六度の長きに亘り、北の方は北極圈を距ること僅かに十度半、南の方は熱帶圈に入ること一度半、最北方にては海豹、獵虎、膃肭獸などの貴重獸を產すれば、北方にては林檎、玉葱、甘藍、亞米利加櫻、亞米利加防風を善く產し、中部にては百多の物產多く、南部にては米、綿、煙草、など善く產し、最南部にては椰樹、檳榔樹、榕樹、鳳梨、芭蕉實、芭蕉布などを產するに至る。試みに冬間富士川の溪谷に入らんか、溪の竹籔は雪の爲めに壓せられて委々と轡を

なすや、猿の天性は素と卑怯なるを以て爲めに恐慌して誠に悲哀なる啼聲を放つなり、吾々日本人はこれを見聞して奇なりともせず、尋常一樣の感をなせども、竹樹猿聲共に熱帶のものを積雪の下に見聞することは、到底印度人、亞弗利加人の腦裡には畫く能はざる所なり、又た以て日本が寒帶、熱帶の風物を兼併することを知るに足れり。海流に至りても太平洋岸の南半は赤道海流即ち黑潮の洗ふ所となり、既に赤道線近傍より流駛し來りて溫暖なれば鰤(ぶり)、鮪(しび)マグロ、鰹(かつを)などの如き熱帶魚類は南方にて漁獲少からず、而して太平洋岸の北半は寒冷海流の洗ふ所となり且つ日本海の北部には寒海流帶リマン海流の餘派流駛するを以て鱈(たら)、鯡(にしん)、鮭(しゃけ)、鱒(ます)、昆布などの水產甚だ多し、即ち水產物に於ても寒熱兩海流のものを包羅せり。

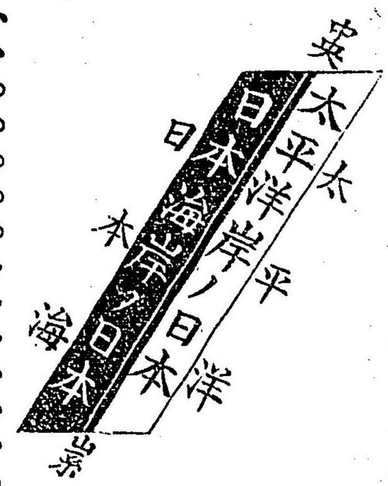
これより日本を縱(日本海岸の日本と太平洋岸の日本)及び橫(北日本と南日本)に區分して考究せんとす。

(縱)日本海岸の日本と太平洋の日本

一室より障子なり、カラカミなりを開きて外に出てんとするや、己れが直ぐ前にある障子なり、カラカミなりを開きて出づれば可なり、然るに己れが直ぐ前にある障子なり、カラカミなりを隔てゝ二三枚目の所に障子なりカラカミなりの從前より開き居るものあるを見るや、人は直ぐ前にあるものを開かずして即ち迂回しつゝ從前より開きてある所より外に出づるを例となす、一枚の障子なり、カラカミなりですら自から手を出して之れを開くを面倒なりとし、少しは迂回しても從前より開きてある所より外に出づること此の如し、人間なるものゝ橫着なること之れを以ても知らる要するに難を避けて易に就くは人の普通性たり。幅僅かに三尺、高サ五六尺ばかりの障子カラカミを聞くのすら厭ふこと此の如し、況んや海面上三千尺、五千尺、七千尺、乃至一萬餘尺の山系が障子カラカミを併べ立てたるか如く堅固に障屏すとせば此の山系に依りて人々の交通を遮斷すること豈に少しも恠むに足らんや。此の如くにして日本本島の中央なる大山系に依り、本島地を形的に二大區分せり、即ち圖の如く山系の北にありて日本海に沿ふ所を日本海岸の日本とし、山系の南にありて、太平洋に沿ふ所を太平洋岸の日本と稱ふ。

日曜日にして放晴の天なるや、淺草公園地なる料理屋の主人は謂ふ、今日はお客が多からんと、乃ち多數なる客人の準備するも遂に待ちぼけをなさず、雨天なるや、乃ち謂ふ、今日はお客が少からんと、客果して少し、大雪の日なるや、乃ち謂ふ、今日は百人前の懇親會の用意をせよとの注文があつたれども、此の雪だもの、俄かに來ないお方も多

いダロー八十人前も用意して置いたらエー」と果して來會者殊に少し。大都會にして坦々たる道路あり、傘あり、高下駄あり、將た長靴あり、出づるに車あり、而かも猶ほ且つ雨天には外出者の少く雪日には殊に少きこと此の如し、人なるものは此の如く横着なるものなり、天然的障碍が人の交通を障碍すること之れを以ても知らる。東京に於て一日降りて二日目に消ゆると云ふが如き些少の雪にしてすら猶ほ且つ此の如し其の高さ三尺四尺五尺乃至八九尺の大雪が四五箇月間も堆積せる日本海岸の日本に於て氣候的障碍が人々の交通を障碍し引きて知識の交換物品の交換を障碍し、無形上に有形上に各般の障碍を由來し精神上にも物質上にも何事につけ、遲緩沈滯せしむるものあるは故なしとせんや、其年内晴天多く人々の交通を促致する太平洋岸と日本との間に差異あると偶然にあらず。果して然り、日本は日本海岸の日本と太平洋岸とに區分せり、即ち兩日本の正反對なる個所を列舉すべきか。



日本海岸の日本

太平洋岸の日本

海岸線　海岸線は屈曲少し、是れ港灣、半島、海角の出入多きが故なり、故に繁榮なる港としては少し（北端なる陸奥の三厩より長門の赤間關に到るまで海岸線六百五十一里）

地勢　傾斜急劇にして海岸には雄崖にあらずんば砂丘多く平原少く、山嶽と海岸との距離近接なり。地質も見から堅硬なる所多し。

氣候　北方にあるが上に、亞細亞大陸の感化を享くるを以て氣候大陸的なるが上に寒冷なり、氣壓は概して強し。

風位　規律正し、殊に冬季は西北風多し、此の西北風は亞細亞大陸より吹き到るを以て本來甚だ乾燥せるものなれども日本海を經過する間に其の水蒸氣を收容し、之れを傳送して日本島の中央なる大山系に衝突し、此の水蒸氣は此所に凝縮して山系以北の土地か濕潤ならしむ、故に冬中殆ど天氣に多く、雪を降すこと多量なり、且つ年内を概するも太平洋岸より晴天少し。

物産　以上の如く冬季長くし寒冷に、且つ積雪の間も長日月なるを以て米穀の收獲少し。又た年内晴天少く、蒸發運緩なるを以て海水は鹽分少量に、且つ海岸に平坦なる干潟少きを以て製鹽の事業殊に盛んならず、要するに米鹽は太平洋岸に比ぶれば少量にして惡質なり、物産の種類概して太平洋岸より少し。

交通　在來交通の利便甚だ少し、且つ山多く平地少きを以て旅行に困難なり、鐵道は日本海岸の西半に一條もあるなく唯だ

海岸線　海岸線は屈曲多し、是れ港灣、半島、海角の出入多きが故なり、故に繁榮なる港甚だ多し（北端なる陸奥の三厩より長門の赤間關に到るまで海岸線一千三百十一里、即ち日本海の海岸線の二倍強）

地勢　傾斜緩慢にして海岸には雄崖も少く砂丘も亦た少し平原多く、山嶽と海岸との距離隔遠なり、地質も自から疎鬆なる所多し。

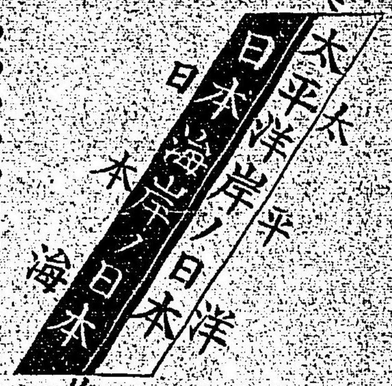
氣候　南方にあるが上に、支那海、印度洋の感化を享くるを以て、氣候洋海的なるが上に温暖なり、氣壓は概して弱し。

風位　變化多し、然れども夏季は大體東南風多し、此の東南風は印度洋、支那海を極て吹き到るを以て、本來甚だ温暖なるが上に、印度洋、支那海を經過する間に多量の水蒸氣を收容し、之れを日本に傳送し來るが故に、夏季に到り五月雨即ち梅雨なるものを隨ずのみにして、冬中殆ど天氣に少く、雪を降すこと少量なり、且つ年内を概するも日本海岸より晴多天し。

物産　以上の如く夏季濕潤温暖にして且つ五月雨も殊に多量なるを以て米穀の收獲多し。又た年内晴天多く蒸發速かなるを以て、海水は鹽分多量に、且つ海岸に平坦なる干潟多きを以て製鹽の事業殊に盛んなり、要するに米鹽は日本海岸に比ぶれば多量にして良質なり、物産の種類概して日本海岸より多し。

交通　在來交通の利便甚だ多し、且つ山少く平地多きを以て旅行に困難ならず、鐵道は最北端より殆んど南端に到るまで幹

いダロー八十人前も用意して置いたらエーと果して來會者殊に少し。大都會にして坦々たる道路あり傘あり、高下駄あり、將た長靴あり出づるに車あり、而かも猶ほ且つ雨天には外出者の少く雪日には殊に少きこと此の如し、人なるものは此の如く横着なるものなり、天然的障碍殊に氣候的障碍が人の交通を障碍すること之れを以ても知らる。東京に於て一日降りて二日目に消ゆると云ふが如き些少の雪にしてすら猶ほ且つ此の如し其の高さ三尺、四尺、五尺乃至八九尺の大雪が四五箇月間も堆積せる日本海岸の日本に於て氣候的障碍が人々の交通を障碍し引きて知識の交換物品の交換を障碍し、無形上に有形上に各般の障碍を由來し精神上にも物質上にも何事につれ、遲緩沈滯せしむるものあるは故なしとせんや、其年内晴天多く人々の交通を促致する太平洋岸と日本との間に差異あると偶然にあらず。果して然り、日本は日本海岸の日本と太平洋岸とに區分せり、即ち兩日本の正反對なる個所を列敍すべきか。



日本海岸の日本　太平洋岸の日本

海岸線　海岸は屈曲少し、是れ港灣、半島、海角の出入少きが故なり、故に繁榮なる港とては少し（北端なる陸奥の三廐より長門の赤間關に到るまで海岸線六百五十一里）

地勢　傾斜急劇にして海岸には懸崖にあらずんば砂丘多く平原少く、山嶽と海岸との距離近接なり。地質も見から堅硬なる所多し。

氣候　北方にあるが上に、亞細亞大陸の感化を享くるを以て氣候大陸的なるが上に寒冷なり、氣壓は概して強し。

風位　規律正し、殊に冬季は西北風多し、此の西北風は亞細亞大陸より吹き到るを以て本來甚だ乾燥せるものなれども日本海を經過する間に其の水蒸氣を收容し、之れを傳送して日本島の中央なる大山系に衝突し、此の水蒸氣は此所に凝縮して山系以北の土地を濕潤ならしむ、故に冬中曇天殊に多く、雪を降すこと多量なり、且つ年内を概するも太平洋岸より晴天少し。

物産　以上の如く冬季長くし寒冷に、且つ積雪の間も長日月なるを以て米穀の收獲少し。又た年内晴天少く、蒸發遲緩なるを以て海水は鹽分少量に、且つ海岸に平坦なる干潟少きを以て製鹽の事業殊に擧がらず、要するに米鹽は太平洋岸に比ぶれば少量にして惡質なり、物産の種類概して太平洋岸より少し。

交通　在來交通の利便甚だ少し、且つ山多く平地少きを以て旅行に困難なり、鐵道は日本海岸の西半に一條もあるなく唯だ

海岸線　海岸線は屈曲多し、是れ港灣、半島、海角の出入多きが故なり、故に繁榮なる港甚だ多し（北端なる陸奥の三廐より長門の赤間關に陸るまで海岸線一千三百十一里、即ち日本海の海岸線の二倍強）

地勢　傾斜緩慢にして海岸には懸崖も少く砂丘も亦た少し平原多く、山嶽と海岸との距離隔遠なり、地質も自から疎鬆なる所多し。

氣候　南方にあるが上に、支那海、印度洋の感化を享くるを以て、氣候洋海的なるが上に溫暖なり、氣壓は概して弱し。

風位　變化多し、然れども夏季は大概東南風多し、此の東南風は印度洋、支那海を經て吹き到るを以て、本來甚だ溫暖なるが上に、印度洋、支那海を經過する間に季候風の中なる多量の水蒸氣を收容し、之れを日本に傳送し來るが故に、夏季に到り五月雨即ち梅雨なるものを釀すのみにして、冬中曇天殊に少く、雪を降すこと少量なり、且つ年内を概するも日本海岸より晴多天し。

物産　以上の如く夏季濕潤溫暖にして且つ五月雨も殊に多量なるを以て米穀の收獲多し。又年内晴天多く蒸發速かなるを以て、海水は鹽分多量に、且つ海岸に平坦なる干潟多きを以て製鹽の事業殊に盛んなり、要するに米鹽は日本海岸に比ぶれば多量にてし良質なり、物産の種類概して日本海岸より多し。

交通　在來交通の利便甚だ多し、且つ山少く平地多きを以て旅行に困難ならず、鐵道は最北端より殆んと南端に到るまで幹

東半の半部分（越前より越中越後の一分を除き越後新潟市の對岸に到る）に一幹線あると、中に一條、加賀より能登半島に到る一條あるのみ。

人口　以上の如くなるを以て人口少し、即ち十萬以上の市一もあるなく、八萬を以て最も人口多き市（金澤）とし、五萬以上の市三、三萬以上の市六、二萬以上の市町九、一萬以上の町村二十一あり、人口散布の度に至りても疎漏にして方里に付き、

北陸道二千四百六十人、山陰道千六百九十二人。

地位　露領亞細亞、滿洲、支那の北部、朝鮮に對するもの。

既に然り日本海岸の日本は太平洋岸の日本に比れば海岸線は短く港灣は少く平原は狹少にして山嶽と海岸との距離は近接し地質は堅硬なり而して氣候は寒冷に風位は變化少く積雪は多量にして長日月間に渉り晴天も亦た多からず加ふるに米鹽も少量にして惡質に物産の種類も亦た多からず、故に交通殊に不便不利にして行旅に困難なり、是を以て人口少く其の散布の度も亦た疎薄なり。即ち以上各般の短所か相綜合して以て精神上に物質上に日本海岸の人士をして太平洋岸の人士に一歩を讓らしめたるもの豈に偶然ならんや。今や日本海岸の日本の西半は其の東半に比ぶれば更に山嶽多く、平原少なく、土地も亦た狹

少にして、物産の種類多からず、故に交通一層不便にして入口もまた疎薄なり。試みに太西洋岸の日本より此所に入らんと欲せんか京都より西の方丹後に入るに同じく京都府の管内にありながら三年前までは人は京都管内の土を踏まずして迂回し、先づ京都より汽車に搭じ東向して近江に入り北向して琶琵湖畔を通過し、越前の敦賀港に到り敦賀より滊船に搭じ西行して丹後の宮津に到るを例とす、即ち四角形の三邊を經過して初めて丹後に入りしなり、固より四角形の一邊を經過して丹後に入るの距離は近邇にして僅かに四分の一に過ぎずと雖も先づ山城丹波境上なる老坂を經過せざるべからず、尋て丹波の觀音峠を經過せざるべからず、行旅の困難と、費用と、時間とを計算するに、却て迂回して四角形の他の三邊を經過するの簡便なるに如かざるを以てなり。近く阪鶴鐵道竣工せりと雖も、是れ亦た京都より大阪に迂回し、攝津の內陸より丹波に入るものなり。播但鐵道に依りて但馬より因幡に入らんと欲せんか、但馬より因幡に到る海岸に沿へる道路は三人曳きの人力車と雖も進行すべからず、乃ち內陸にある山陰街道に依りて入らんと欲せんか、但馬なる八井谷、春來峠の雨險を超えざるべからず、但馬、因幡、播磨、の間に盤峭せる氷の山々下の難路を過ぎざるべからず但、因境上なる蒲生峠を超えざるべからず、孰れも三人曳きの人

力車を要す悪詩あり。

郎今去向古因州。四月氷山冷似秋。夜半菜油燈火下。密縫八木木綿裘。

山陰竹枝之一。菜種油。八木木綿。丹波所産。

丹後紗袷染旅塵。鐵鈷山外度嶙峋。勸君更盡白桑酒。西出但州逢故人。

同上白桑酒。詞況可愛。

と、詩は拙悪を極むと雖も實際實境なり、以て山陰道の風土人情を察知すべし。既にして蒲生峠の絶頂に到るや、是れ但馬、因幡の境界なり、太平洋岸の日本にて甲州より乙州に到らんとし、其の境界なる大山嶺の絶頂に登れば必らず乙州の平原の眼下に蒼茫として開展するを瞰視し得るは何處に到るも然り、而かも蒲生峠の絶頂に登るも眼下には連山奔馬の如くに起るのみにして、遂に因幡の平原を瞰視せず、峠を下りて行く〳〵因幡に入り海岸に出づるや、また馳山の難路あり、駟馳山の名、珍にして奇なり、乃ち住民に問ふに山名の由來を以てす、曰く「日本にて七番目の山なるを以て名づけたるなり一見低きが如きも海岸より屹立するを以て實は高きなり」と、駟馳山や然までに高きものにあらず、然れども因幡の中心、山陰道の大都會たる鳥取市より僅々直徑三里の所、而も海岸に沿へる大官道に此の如き山路あるは太平洋岸の人士が夢寐だにもせざる所とす。駟馳山を超ゆるや更に細川の山道あり、細川の山道を超ゆるや、更に枩峠の難路あり、枩峠の絶頂より鳥取市に到る直徑僅かに一里、而かも市の居住せる平原を下瞰する能はず、市を距ること五七町、歩兵第四十聯隊の新築兵營ある邊に到り初めて市を認め得るに到たりては、流石山陰道の名詮自稱に背かずと云ふべし。又た山陽道なる播磨より因幡に入らんとせんか、播因の境上には三人曳の人力車すら通ぜず、僅かに人力車を牛に曳かしめて超ゆる所の志戸坂峠の難道あり。美作より伯耆、出雲に入らんとせんか、美作の西部に於ける難道險路の多きのみならず、作、伯の境上に知名なる四十曲峠の險路あり。安藝、備後より出雲に入らんとせんか、備、雲の境上に横谷の大山道あり。安藝より石見に入らんとせんか、藝、石の境上に九瀬山下の險難あり。即ち南の方太平洋岸の日本の西半に入るは此の如く困難なり。豈に獨り縱線的に南より北に入るの困難なるのみならんや、既に山陰道に入り日本海岸に沿ひて横線的に東より西に往還するも亦た山又山に限られ殊に困難なるものあり、是を以て山陰道にては交通社會の範圍は狹少にして小天地に跼蹐せられ、甲谿谷より山を隔てゝ乙谿谷に入るや、居民の思想、人情言語等著しく變化するを見聞谷各々社交上の事物を相異にするを見る。

但馬の春來峠を超ゆるや、春正に酣にして山花競ひ發し、花間頻白鳥（ウグヒス）の囀啼するあり、三人曳きの三車夫齊しく曰ふ、これ山雀なり、その啼く音を翻譯せば宛かも遠行の夫婦が故國に留守せる細君に與ふ所の消息なり、即ち、一筆啓上、火の用心、子供泣かすな、ヨー守（たより）りせ今、度の消息に金十兩、遣りたいけれども一文も御座無く候（そろ）」と泣くを聽けると、鳥語の翻譯を奇なりとし、且つこの譯語の古來より所在に傳來せる由を三車夫より聽き、堅く語を記臆して峠を下り、他の谿谷に入り休憩してこれを居民に問ふにまた知る者なし、即ち此の面白き鳥語の傳播せる範圍も亦た山に依りて限られ、その殊に狹小なるを悟りき。因幡の如き一谿谷に一枚の日本新聞の入る所と、他の谿谷にして一枚の時事新報入る所と甲は思想悉く日本新聞的にして、乙は思想悉く時事新報的となり、兩新聞各個の感化は歷々として甲乙の谿谷に認むる所あり。但馬、因幡より漸く西して伯耆に入り、伯耆の西部より出雲に接する邊に到るや、日野川の冲積平原は開展し來り（山陰道第二の平原）細長き夜見（ヨミ）半島は北に向ひて突出し、夜見半島の北に當り出雲の島根半島は西より東に向ひて突出するを以て、兩半島は相對して恰かもTの字形をなし、而してT字の右は抱きて美保灣を作り、左は錦海（伯耆）の畧を作くり、錦海を越えて中ノ海（出雲）を作れり。中ノ海中に大根島、小大根島等の大小島嶼點綴し、海を越えて宍道湖（出雲）あり、湖を越えて所謂神門（カンド）十万石の肥沃なる冲積平原開展し來る（出雲、山陰道第一の平原）、而して海を隔てて近く隱岐列島と相對す、此の如く平原開展するが上に、海岸は水陸の出入屈曲甚だ多きとなれば、陸上に、湖上に、海上に、鼎内に、灣内に、島嶼外に、半島外に、交通往來特に便宜にして定期の滊船は到る處に往復し、人口も亦た稠密にして美保灣の南に人口三千五百の淀江町あり、夜見半島の極端と島根半島と相對するの間に境町（人口五千）あり、錦海の東岸に米子町（人口一万六千）あり、境、米子共に伯耆に屬し、山陰道中無比なる港にして其の繁榮も人口も近年長足の速度を以て進歩するを見るなり。中ノ海の南岸に安來町（人口五千）あり、中の海と宍道湖の中間なる沖積層上に松江市（人口三万四千）あり、山陰道第一の都會たり。蓋し中ノ海と宍道湖の沿岸大約三十里、而して此所に十五万の生露を棲居せしむ、即ち沿岸一里に付人口五千の割合なりとす。既に此の如くなるを以て、均しく日本海岸日本の西半たり山陰道たりと雖も、伯耆出雲に人情警敏にして進取的に商業も活潑にして長足の進歩をなし、社交上諸般の事物山陰道らしからず、要するに沙漠の中ヲアセスの觀をなす。米子城趾なる丘上に登臨して水陸を眺賞するや、眼下には錦海の錦波起り、當面に大小の大根島は中ノ海の

瑠璃一碧上に浮び來り、海を超えて島根半島の連山翠眉の如くなるを望み、左には宍道湖の春水淡くして煙の如く、右には夜見半島一帶五里、白沙青松と點綴して白は青を粉し青は白を抹するを認め、後を下瞰せば、數里の平野、菜花麥苗、黃綠繡錯し、人をして坐ろに身の山陰道にあるを忘れしむるものあるや、東道の主人織田氏(伯陽新聞主筆)笑ひて曰ふ「山陰道も此所に來ますと明かるくなります」と、氏は實に予の爾か感じて言はんとする所を先づ唱破せし、なり。此の如く山陰道にても伯雲の境上は明かるくなれり、故にこゝに到るや交通なり、社會なりの範圍は他の日本海岸、日本の西半地方に比ぶれば正しく濶大となり、自由となり、前の但因の境土なる鳥語の飜譯が一溪谷の間に限られ居るが如きものならず、聽け「ドッサリ節」と「安來節」とを、其の大山お山の二股椿枝は姫路に、葉は日野川に、花は米子の城で咲く(大山、姫路、日野川、米子町、皆な、伯耆にあり)大山お山から隱岐の國見れば、島が四島に大滿寺、東日がたから朝日さす。西にや五色の雲がたつ(大滿寺山、隱岐群島の最高點にして海拔六百四十一米突、火山岩なり)「安來千軒、名の出たところ、社日櫻に十神山」(安來町、十神山、出雲中ノ海湖の南岸にあり)「三上山から沖を見れば三味(線の樣なる帆を懸けてヨサホ〳〵で上のぼる」、「關の五本松一本伐りや四本あとは伐られぬ夫婦松」美保關の五本松、出雲島根半島の最東端にあり、一株伐りてなし)の俚謠の如き、伯耆、出雲、隱岐の間に傳播し所在三十里、市上に行商する漁娃より、髯蓬々としてむさくるしき船頭に到るまでこれを哦はざるはなし、予が手冊の間に鉛筆にて亂書せるあり、

明治三十一年五月八日、從隱岐西郷港往一區村、詣水若酢神祠、歸途將入中山越洞門。門外有一小舍。瞽女在焉。乃命謠所謂ドッサリ節者。節々悲凉。感慨無量。與銀錢一片、女喜甚。記以備他日之忘。時雨餘。福浦嶽色如拭。嵐光欲滴。將過洞門探。唐澤中將流謫遺趾。

と、然れどもドッサリ節や、要するに地方的なり小天地的なり、規模狹少にして放大ならず彼の「ナポレオン元をたゞせばコルシカの土百姓、今ぢや佛蘭西のエムペロル」の如き「行こかロンドン歸へろかパリス、こゝが思案の地中海」の如き、世界的コモポリタンの俚謠は山陰道より發する能はず果して太平洋岸の日本より發するものに屬す。伯耆出雲を過ぎ石見の境上に到るや、山はまた多大となり、直ちに海岸まで連亘して懸崖海面より峭立し、隨て平野はまた狹少となり、こゝに再び眞成の山陰道を現出し石見に入るや、巉巖は磊落として到る處に狼藉し、地盤亦た堅硬、官道は石間を削りて開鑿し、人は石上を踏みて來往し、眞個の「石見「石州」をなす。これを要するに日本海岸

日本の西半はその風土の人生に不利不便なる爲めに日本本島に於て最も未發にして原始的なる區域なり、西班牙にては Siesta と稱へ午睡するを以て國民のインステ*テューシ*ンとなり、午後 Siesta の間は國を擧げて死するが如く沈寂となれり、但馬に於ても亦た然り、午睡は正しく一個のインステ*テューシ*ンとなり四季ともに農事の間毎日午後宰予を學ばざる者とてはなし、但馬あり「播州では一月が三十五日だが但馬では二十五日だ」と、その意たる山陽道の播磨の如き人口の稠密にして生計の困難たる地方にては、一個月三十日間の外更に五日勞役せずんば克く衣食する能はずと雖も、但馬にては一個月に二十五日間のみ勞役し、他の五日は休息するも輒ち衣食するを得と云ふなり、此の俚諺や實に太平洋岸の日本と日本海岸の日本との社會的に太差異あることを言說して餘蘊なし、一俚諺正さにこの三萬言のかたくるしさ『日本地理考究の方針』に優るや萬々。

日本海岸日本の東半(北陸道及び兩羽)はその西半に比ぶれば山少くして川多く、土地また濶大にして平原も少からず、越前には安居河系の沖積平原延綠せり、加賀の海岸には沖積平原延綠せり、越中の太半は沖積平原なり、越後の中部には蒲原の大沖積平原あり、羽前に最上川の沖積平原あり、羽後に御物川及び能代川の兩沖積平原あり、陸奥の

日本海岸に岩木川の沖積平原あり。是を以て地勢の利便は西半に優り洩きて交通社會の利便も西半よりは大に發達せり、然れども太平洋岸の日本に比ふれば山多くして土地狹少に平原も亦た大ならず多からず地勢の不利不便なること殊に甚しく殊に降雪は西半より一層甚しく、積雪の月日もまた長きものあり。列藩史略を讀み「慶長五年十二月廿八日、秀康公(德川)封越前國、先是公戲言侍臣曰、仄聞嚴君(家康)賜我以播越之際、我執播耶、執越耶、長谷部采女好親進曰、越前可也、公曰世俗稱一播二越、然則播磨元爲越前上、今捨之執越者有說乎、好親曰夫播磨土肥疆大、雖然南有四國、西有九州、北列山陰、東隣畿內、西海之要津、中國之咽喉、四通八達、是不爲養兵之地、越前形勝之國、帶山河之險、左大山、右蒼海、前有木芽栃木之固、後有蓮浦吉崎之限、江都不遠、京師左近、爲北國網領、豈換播磨哉、六年冬大雪降、公徵長谷部好親勃然曰、則汝勸吾受越前、今而如有事、神君出征、吾如何從之乎、以汝之生國欺吾乎、如親不能答而退」の處に到るや、秀康と長谷部好親との問答中に太平洋岸日本の地利多くして日本海岸日本の地利少く、且つ氣候的障碍多きことを說明し加ふるに太平洋岸日本の四通五達にして封建の時代にありては兵を養ふの地に非ず、日本海岸の日本は地利の不便あればこそ封建の時代には兵を養ふの好適地なることを說明するを以て予常に愛誦し以て太平洋岸の日本

と日本海岸の日本區の別を說明するの好文辭となせり。かくの如く地勢上の不利不便なるが爲め日本海岸人士の發達を阻喪せしめたるのみならず、その發達すべき近世期に至りても德川幕府は諸侯制禦の政略上能ふ丈け出來る丈け日本海岸人士が英氣の發達を制禦したり。特に幕府の日本海岸に於て最も忌憚し最も畏れ視し三所あり一は加賀(加賀のみならず前田氏一族の所領せし能登越中を合す)一は越後一は秋田(羽後の殆んど全部)なり。加賀は豐臣時代に德川家康と比肩して些も下らざりし前田利家のの裔孫が一百餘万の大封を提げて領有する所なり、その素養の強大なるを以て德川氏は常に己れに謀反せんことを畏れ德川氏第三四世以後は殆んど幕府の全力を竭して加賀を控制し第三四世以後と雖も猶ほ且つ懈りなく加藩の一舉一動に注目し偵察したり、是を以て加藩は力めて嫌疑を避け、故さらに安逸を事とし、無爲を表し、優游三百年以て明治維新の際に到れり加賀の日本第一の大藩を以て維新前後に何等の事業をも敢てせざりしものは故なきにあらず。越後は其初め上杉輝虎(謙信)嶋を此州に負ひ、猛然として出でゝ四方を咆哮反噬し當時の群雄均しく猫となり鼠となりてこの獸王(輝虎)の前に慴伏し、その子景勝の武幹また父に恥ぢず、會津に移封されながらもその越後に對する勢力は散佚せず、越後人の剛毅なるを根據とし、越後の富裕多糧なるを根據とし、以て德川家康に反抗せしより、爾來德川氏は頗る越後を忌憚畏視し、海內を靖定するや、先づ自己の公族を此國に封じ、公族亡びるに至りて、力めて州の人心を揆離せしめ聯合團結を分解せしめ、以てその素養を殺滅せんとし、州を十一藩に分賜し、その間に處處自家の直轄地(天領)を作くり、一奉行所三代官所を設け、加ふるに諸雄藩の飛領地を作くり、能ふ丈け各般の所領地を犬牙複雜せしめ以て明治維新の際に到れり。是を以て越後人は三百年間德川氏が遐般の政略の爲めに箝弄せられ、その感化は州人の頭腦に深く浸染して容易に洗脫せずこれが結果は事々物々に現はれ、人心は揆離し易く、聯合團體は容易に分解し、粘着力薄弱にして離合集散常なく、三四年前までば均しく自由黨と雖も信濃河系にあるものは東京なる中央本部に隷屬し、而かも河系の中流にあるものと下流及びその以北にあるものとは別個に獨立せる團體を作くり、又た關川の河系にあるものは中央本部に隷屬せずして一頭城自由黨なるものを組織し均しく改進黨と雖も信濃河系の中流以上にあるものは多く東京なる中央本部に隷屬し、中央大山系の下にあるものは獨立して越南改進黨と稱へ關川の河系にあるものは中央本部より全く獨立して雄大なる政友同盟會を組織し、均しく國權派と雖も中央大山系の下にあるものは國權回

復同盟會を組織し、大小の黨派個々に分裂し、或は山に據り或は別々の河系に據り以て東西に南北に角立したり。秋田の幕府に對する關係に等し、秋田藩祖の佐竹義宣は關ヶ原役の當時石山三成上杉景勝と一味徒黨して德川家康を東西より夾み討たんと謀りしものなり、佐竹氏は元と常陸を所領せしものなり、その常陸を所領するは古代より德川氏の初代に到るまで五百餘年間連續せしものなり、源平時代にも南北朝の騷亂中にも足利時代にも元龜、天正の戰國時代にも、佐竹氏の常陸に於ける勢力は些も變化せざりしなり、故にその常陸に於ける素養の根抵深きは後年水戸なる德川家が長歲月の間これを根扳せんと銳意盡力せしに係らず、猶ほ且つ絕滅せず、現今と雖も茨域縣下の各地に殘留するものあるを見ても測り知るに足れり。是を以て家康はかくの如き素養の强大なるものが自家の根本地たる江戸近くに居ることを忌憚し義宣は兵を擧げて德川氏に抵抗せざりしに係はらず、關ヶ原の役了るや、家康は「乘時舉事英雄之常不足深咎也」獨觀望兩端者可鄙之甚故吾憎義宣過於勝景」とて輒ち常陸を奪ひ、北陬なる秋田に移しゝものなり、德川氏と佐竹氏とはかくの如き關係なるを以て、幕府は常に秋田を忌憚しその一擧一動に注目し偵察せり、故に秋田藩は加賀の如くまたこの嫌疑を避けんとし、力めて安逸を事とし無爲を裝ひたりしなり。然れば日本海岸の人士は地勢上の不利不便より由來せる幾多の惡感化を享けたるのみならず、期即ち德川時代に於てすら幕府の政略の爲めに其英氣の發達を阻害されぬ、日本海岸の振はざる故なしとせんや。以上の如くなるを以て日本海岸の日本は在來の日本歷史に甚だ振はざるものなり。太平洋岸の日本には舊事記に載する所の國造二十四の多きありと雖も日本海岸の日本には二方(但馬)賀我(加賀)伊頭彌(越中)久比岐(越後)深江(越前)若くは越後の五あるに過ぎず。神武天皇の肇國後太平洋岸の日本には國造五十、古史に記載する所の君、別臣連、縣主等四十五の多きありと雖も、日本海岸の日本には國造十君別、臣連、縣主等十あるに過ぎず。源賴朝の六十餘州總追捕使となるや太平洋岸の日本には守護奉行、大椽、權介、二十四人を任じたるも日本海岸の日本には守護、地頭、管領十人を任じたるに過ぎず。南北朝の亂には日本海岸日本の西半は、時に南朝に與みし、時に北朝に與みし、或は朝廷に忠事して、曖昧模稜なる態度を取りき、その今日何んとなく國民協會的にして佐々友房氏以爲らく協會の擴張すべき地方は山陰道にありとし、品川子、古莊嘉門氏、其他國民協會連の時々こゝに遊說して收獲を博せんとし遂に今の帝國黨の根據地となしたる者自から

故なしとせざるなり。南北朝の亂後より元龜天正の戰國に到る迄大約二百年、其間大內氏(長門、石見)、吉見氏(石見)、尼子氏(出雲、伯耆)、山名氏伯耆、因幡、但馬)、一色氏(丹後)、武田氏(若狹)、斯波氏、淺倉氏(越前)、富樫氏)加賀)、畠山氏(能登)、神保氏(越中)、上杉氏(越後)、最上氏(羽前最上河系の上流)、武藤氏(同最上河系の下流、小野寺氏(羽後御物河系の上流)、秋田氏(同、御物河系の下流等大小の群交る〳〵起り、威名一時を震燥せしものなきに非ずと雖も、いづれも日本の歷史上にさまでの影響を附授せず、その感化や限りあり、且つやその勢力も日本海岸卽ち中央大山系以北のみに跼蹐し能く中央大山系を超えて太平洋岸まで切りて出てたるものは今を距ること三百四十年前獨り上杉謙信の相模なる北條氏康を小田原に攻めたる一事あるのみ、この一事こそ實に、日本海岸の人士が太平洋岸の人士を懲毘せしめたる空前(今日以後は太平洋岸の人士を懲毘せしめたる空前)の事業なれ、他異せしむるもの必らずや多々あるべきを以て「絕後」とは云はざれども)にまた此事あるを知らず、而かも謙信や小田原を攻めて糧の續かず忽ち自から圍を解きて越後に引き返へしぬ。且つや以上の諸氏は德川氏の初年までには前後に亡び盡くし、能く故土を守りて諸侯たりしものは獨り山名主殿が六千七百石の提封を以て但馬村岡に旗本となり、明治維新の少し前自から空祿四千石を增加して一萬石の資格を製造し以て僅に諸侯となりしものあるに過ぎず、其他上杉氏ありと雖も、越後より會津に移封せられ、會津より米澤に移封せられ、轉々して固より謙信の故土を守るものにあらず。更に日本海岸の日本に於ける古來の智力を點檢せよ、石見にては柿本人丸、橘南谿(東遊記、西遊記の著者)、齋人雪舟をその產なりと稱ふれども、人丸は曾て朝廷より石見の守に任ぜられ、こゝを統治せしより石見美濃郡高津村に柿本神社に祀られたるのみ南谿の何許人なるやは久しく考證家の疑問に屬せしも數年前史學會員の精確なる調査に依りその伊勢人たるとは正しく證明されたり、雪舟の石見人にあらず、備中赤濱の人たるとはその自から「備溪齋」と別號するにても知られたり、但馬よりは刀工の法城寺國光、僧の澤庵和尙(出石)、三味線彈キの鶴澤勝右衞門(城崎郡)を出し、丹後よりは詩人の野田笛浦(舞鶴)を出し、(齋人圓山應擧は丹波の產なれども、その南桑田郡に生れ、中央大山系以南にして河系も南流して太平洋系に注入するが上に、重もに京都にて發達せしを以てこれを數へず、若狹よりは國學者の伴信友、蘭學者兼蘭醫の杉田玄白(共に小濱)を出し、越前よりは泰澄大師(麻生津)、瑩山和尙(能登總持寺の開山)、齋人の曾我蛇足(足羽郡)、鐫師の妙珍小左衞門の初二三代(福井、ロンドンの南ケンシントン博物館に天才(ゼニヤス)の作として陳列せる鐵製の鷲は二代または三代の作な

りと)、唐太開拓家兼理財家の内山七郎右衛門(大野)を出し、加賀よりは儒者兼著述家の太田錦城(大聖寺近郊福田)、俳人千代女(松任)、俳優の初代中村歌右衛門(金澤)、企業家の錢屋五兵衛(石川郡)を出し、越中よりは算博士の三善爲康(射水郡)、刀工の郷義弘(中新川郡)、書人の岸駒(上新川郡)、醫家及び醫書著述家の村田畝齋(東礪波郡)、美琴家の盲人和泉市(東礪波郡)を出し、越後よりは詩人兼書家の館柳灣(新潟)、詩僧の良寛(長岡)を出し、秋田領よりは國學者の平田篤胤、農學者兼經世論者の佐藤信淵を出したり、(以上人物産所の九年四月公布の變更區の新郡名に依りて書き改めたるも郡名は明治二十なれば、現時の地圖に徴するも不都合なし、以下これに倣ふ)以上は大概記憶中より喚び起したる人々のみなるを以て固より許多の遺漏あるべく、日本海岸より尚ほ更に幾多の人物を輩出せしことなるべきも、而かも果して大人物なりせば誰人の頭腦中にも記憶し居るべき筈なり、予が頭腦の如何に小なればとてその撰に洩れたるものは必らずしも悉く大人物なりと云ふべからざらんか。既に然り、茫々たる日本海岸の日本廣袤五千餘方里の間天才の各方面に向ひて點檢するにその人物僅かに以上の如きに過ぎずとせば、轉た索寞の感なきにあらず。更に近世期の人物を點檢するに、王政維新の運動に前後與り、或は斃れ、或は生存せる者は石見に福羽美靜(津和野)あり、因幡に慷慨家の冲剛介(鳥取、冲守固の弟)あり、又儒士の正垣適所ありと雖も唯だ鳥取藩の子弟を感化して勤王の主義を取らしめ其門下より幾多の勤王家を出したるのみ、王政維新の功績は第一に薩長土肥、次に因備にありと當時の艷稱せる因幡にして、世人をして唯だ一の河田景與を記憶せしむるのみに至りては其他推して知るべきなり、但馬に北垣國道、原六郎(共に後鳥取藩人となる)あり、若狹に梅田源次郎(小濱)あり、越前に橋本佐內、三國八郎(由利公正)關雪江(福井)、越後に竹內式部(新潟)、長谷川鐵之進(粟生津)、本間純一郎(寺泊)、室孝次郎(高田)あり、羽前に清川八郎(清川)、吉田大八(天童)あり、羽前と雖も、一二を除却せば第二第三の人物なり、秋田は全藩勤王してその王家の爲めに斃れたるものを合計せば些も薩長二藩に劣らずと雖も、而かも勤王黨の一領袖たる初岡敬治は地利交通の不便なる地方に人と爲りしが故に時勢の全局に通せず、岩倉公の大使として歐米諸國に派遣さるゝや、中興の諸名流は大使一行が送別の宴を大に東京江東の中村樓に張る、宴酣なるや、初岡は佩ぶる所の大刀を抜き「奸可斬兮、奸可斬兮、奸不斬兮、何日伸皇威」と朗吟して自から舞ひ、席上南日本の一名流が「奸とは誰ぞや」と呼びしに初岡は聲に應じて「後藤象二郎なり」と呼び、以て南日本なる諸功臣の忌憚を買ひ、尋て九段の招魂社創めて成り朝廷始めて祭典を擧行し殉難の士を祀るや、初岡は甲冑着けたる日本人が洋人を蹴倒す所を畫き、そが上に陸放翁の詩句「天涯烈士

皆垂涙、地下驚魂定嚙臍」と大書せし大幟二旒を奉納せしより益〻忌憚を買ひ遂に斷頭場裡に斬られたるが如き、好漢惜むべし世運の大躰を曉らざりしことを、その領袖にしてかくの如し、秋田が全力を提げて王事に盡碎しながら、維新以後の政府に登庸されたるものゝ少なきまた知るべきなり。若し夫れ日本海岸の日本に於て世運の大躰を曉りたるものを問はゞ信濃の北半は中央大山系以北にあり、河系もまた北流し日本海に注入するを以て、乃ち佐久間象山(松代)を擧げまくのみ。

太平洋岸の日本は海岸線長く、港灣多く平原多くしてその幅員も廣大に山獄と海岸若くは洋岸との距離は遠く隔り、地質もまた新近の構造に係り疏鬆にして肥沃なり、風位は變化ありて、年內晴天多く、冬季は降雪多からず、その積むことまた長月日ならず、是を以て米鹽も多量にして精質に、交通の利便多くして行旅も困難ならず、隨て人口多く、繁昌の都邑開港場多し、其の日本海岸の日本に比ぶれば地利の便甚だ多きを以て無形的に有形的に所在に進取の氣象を授け、脚色自から濶大にして跼蹐する所少し、而してその正しく文明の現象あるは實に人口中女性の員數男性より多きことを以て明かに徵知せらる。蓋し社會の愈〻活潑となり益〻頻繁となるや、隨て腦力を費すこと多く、隨て危險に會ふことも多く利害得喪殊に甚しくなり、而してこれが衝に當るものは男性なり、且つ四方に往來奔走行商出、稼移住するものもまた男性殊に多く、而して內を守るは實に女子の事たり、是を以て歐米各國にして社會の愈〻活潑頻繁なる地方邦國ほど、益〻男性の員數は女性より少くなり、男女員數の割合漸次に隔懸し來るを例とせり、而かもこれに反し社會の愈〻沈滯して事物の簡易なる地方邦國ほど益〻男性の員數女性より多となるものなり。是を以て太平洋岸の日本に徵せんか、上野(男每一千人に付女一千九人强)より安房(男每一千人に付女一千十三人强)に懸け、而して、伊豆(女一千四人强)甲斐(女一千二人强)より三河(女一千二人强)尾張(女一千一人强)を經、その土壤狹少にして人口多く、州民の四方に出稼し若くは遠洋漁業を經營する志摩に入るや男每一千人に付女一千五十九人强の多きに達し、全國中行商することの最も盛んなる近江に行くや女一千十二人に到り、更に幾內に入るや、山城(女一千九人强)に和泉(女一千六人强)に到る處、女性の員數男性より多しとす、而も日本海岸の日本に至りては、加賀(女一千十五人强)、越前(女一千十人强)、丹後(女一千二人强)を除くの外、悉く男性の員數女性より多く石見(男一千三十四人(出雲)男一千四十一人强)伯耆(男一千三十二人强)、因幡(男一千三十人强)、但馬(男一千四十三人强)、若狹(男一千十六人强)、能登(男一千二人强)、越中(男一千二十八人强)、越後(男一千三人强)、羽前(男一千二十一人强)を經、

遂に羽後に到りて女毎一千人に付男一千七十八人強の多きに到る。想ふに本邦全躰の人口たる男性の員數實に女性に超過するは、長へに國を鎖し來り海外四方と交通せざりしことその總源因をなし、また戰國千年の間女子を卑みて男兒を尊尚せしこともその一源因たるべしと雖も、而かも均しく本邦の中にして太平洋岸の一部は、女性の員數却て男性に超過すとせば、また以てこの地方の文明的なることを徵知すべきか。既に然り、太平洋岸の自然界は濶大なり山少くして平原多し、是を以て個人若くは團體の勢力を膨脹し得べき範圍もまた自から濶大となり、四方に向ひ自由自在に膨脹し得べきを以て、此間に起りたる豪傑の交る〳〵海內を一統せしもの偶然にあらず、源頼朝尾張の熱田に生れて相模の鎌倉より起り、足利尊氏の祖族三河の南部より移りて上野に往き尊氏上野より關東の勢力を提げて起り、織田信長尾張の名古屋に產れて(今の東本願寺別院の庭內)こゝより起り豐臣秀吉尾張の中村(今の名古屋停車場の近西)に產れ、德川家康三河の岡崎に產れてこゝより起りいづれも海內を一統して日本の歷史上に無限の影響を附授せしもの故なしとせんや。海內の一統者は悉く揃ひも揃ひて太平洋岸の日本より孕み出し、皆なこゝを根據として起り遂に偉大の事業を成就せり、其他學者に、文士に、畵人に、工藝家に、技術家に、天才の各方面に向ひ多數なる人豪のこゝより起りたるもの實に枚擧に遑あらず少くも日本海岸の日本の二三倍はこゝより孕み出したるを知る、必ずしも一々これを列擧せざるもがな。謂ふ勿れ人豪は太平洋岸の日本のみより孕み出したりと、日本海岸の日本は人豪其物を孕み出さゞりしにあらず孕み出したるも地理上の不利不便は、實に幾多の人豪をして克くその大伎倆を揮ふ能はざらしめしにあり、源頼朝や足利尊氏や關東の太平原にあり、遂によく覇を六十餘州に稱へたり、織田氏や尾張美濃の太平原にあり、故によく中原の形勢を控制せり、豐臣氏や播磨若くは近江にあり、故に京師に近く中原に近くして遂によく群雄を制御せり、德川氏や三河の平原にあり、故によく海內を靖定したり。若し夫れ假りに出雲の尼子氏をして播磨若くは近江にあらしめんか、その豐臣氏たること或は知るべし。上杉氏をして尾張の平原にあらしめんか、その織田氏たること固より期すべし。出羽の最上氏すら三河の平原にあらしめんか、その德川氏たること料るべからず、其他日本海岸の擾々たる群豪をして關八州の大野にあらしめんか、その頼朝たり尊氏たること庶幾くは期し得べし。輕々に謂ふ勿れ、地理上の不便は些事なりと、聽かずや蒲生氏鄕の會津百万石を賜ひ、會津人のその大封を授かり奥羽の重鎭を治むるを祝するや、却て萬事去れり我れまた中原に事を

成すべからずと聲を揚けて號哭せしことを。既に然り、日本海岸の日本が過去の間に於て太平洋岸の日本に一歩を讓りたるは實に地利上の不便に歸因すとなし現在及び將來に當り地利上の不便日に月に減却するものありとせば日本海岸は日に月に發達して遂に太平洋岸より一頭地を拔くに至るや固より期すべし。試みに見よ、

(一)地利上の不便なるにかゝわらず人爲的の障碍たりし關所なるものは必ら

湖中ノ海、信濃川阿賀野川等の如き內陸の氣航と共に築港、浚渫、河身改良、河口改造、郵便、電信、爲替、法等の發達はまた必らず日本海岸の發達を促すべし去り、且つ將來に當り大に減却せんとす。

(二)北海道、西比利亞に於ける將來の發達は日本海岸に於ける地利上の不便を日に月に減却し。

(三)十數年前露西亞の參謀家ラリオノフ立論して曰ふ「日本海は東洋のバルチック海なりと、果然日本海は今やバルチック海たらんとす、即ち東亞問題の切迫と共に日本海はいよ〳〵重要を加へ來らん、日本海にしてバルチック海たらば對馬は恰かも露西亞獨逸瑞典を控制する彼のツ*ーランド島(Zealand.丁抹なり)、隱岐は恰かもバルチック海中の要衝たる彼のボルンホルム島(Bornholm.丁抹領なり)、佐渡は恰かも瑞典がバルチック海中の重鎭たる彼のゴットランド(Gothland.瑞典領なり)、雄鹿半島は恰かも露都ピーテルブルクが所在せるフ*ンランド灣の出口に據在する所の彼のヲーゼル島(Osel.露西亞領なり)以て對島、隱岐、佐渡、雄鹿半島が將來に大に重要を加へ來ることを悟らん、隨てバルチック海岸のボムメルン地方に相當する山陰道、その東部普魯西(プロシヤ)に相當する北陸道、その露亞西のリガ灣、フ*ンランド灣沿岸に相當する羽前羽後もまた將來ます〳〵重要を加へ來るべし。

以上の如く日本海岸の日本に於ける地利上の不便は日に月に減却し來り、その重要もまた將來大に加はるものあらんとす、而して地利上なる不便の減却と共に近代の智力は日に月に增加し、王政維新の時代までは甚だ振はざりし日本海岸の人士も維新以後に於ける日本海岸日本の智力就中近代的智力(ジンテレクト)に至りては最も人目を聳動するものあり、特に維新以後は大に見るべきものあり、某の地質學、某々の物理學、某の法律學、某々の英文章、某々の哲學、某の動物學、某々の醫學君くは醫術某の新聞記者としての材能の如きは、到底太平洋岸の人士に見るべからざるものとす、其他日本史綱

及び「大日本人名辭書」の日本海岸人士の頭腦より成りたるが如き日本人の頭腦と雖より發する唯一の外字新聞ジャパン・タイムスが山陰道人士より成るが如き、また帝國大學、各種の高等專門學校、陸軍士官學校へ學生を出すこと全國中第一等に居る加賀の如き、道般の近代的智力が將來の日本なる活舞臺に立ちて演出する所は蓋し測るべからざるものあらんか。

今や日本海岸の日本も日に月に發達し以て太平洋岸の日本に匹似せんとし、而して太平洋岸の日本もまた遂に沈滯せずいよ〳〵ます〳〵進取せんとするものあり、是に於てか兩日本の無形的に有形的に勢力の相平衡して均一となり、以て大に今後の國家を發揚するは蓋し期して待つべきなり。

北日本と南日本

東京を出發し東海道の汽車に上りて西行（寧ろ南行すべし。國府津停車場に五分間停車中「新聞は入りませんか、々々々々々々々々々々々々」と喚ぶ新聞賣子あり、乃ち車窓を開きて「オイ朝日新聞を呉れい」と命ずれば、賣子は直ちに「ハイ」とて東京朝日新聞を渡すなり、又た「毎日新聞があるか」と問へば「ありまする」とて必ちず東京の毎日新聞を渡すなり。汽車はいよ〳〵進行して富士山下を過ぎり、靜岡停車場にて停車中に「ビールは

入りませんか、々々々々々々々々々々々々」と賣子の喚び來るものに「オイ大瓶を一本呉れい」と命ずれば、必らず東京の惠比須ビールにあらずんば麒麟ビールを渡すなり。汽車はいよ〳〵進行して濱松停車場に到るや試みに新聞賣子の手にせる新聞紙を點檢せよ、朝日新聞は東京の朝日新聞毎日新聞は彼の島田三郎氏の主宰せる毎日新聞にして其他各種の新聞紙は悉く東京にて發兌するものにあらざるはなし、又は賣子の肩に掛け居る麥酒入れの板臺を點檢せば、十瓶の中の七本は東京の惠比須ビールにして殘る三本は東京の近隣なる橫濱にて釀造する麒麟ビールにあらざるはなし。既にして名古屋停車場に達し、停車中に新聞賣子を招き「朝日新聞を呉れい」と命ずれば賣子は「東京のですか、大阪のですか」と反問するなり「毎日新聞を呉れい」と命ずれば「大阪毎日新聞ですか、東京のですかどちらですと反問するなり。又た麥酒入れの板臺を點檢せば、東京橫濱にて釀造する惠比須麒麟の兩ビールに雜ふるに必らず大阪の吹田にて釀造する朝日ビールを以てすることを發見せん。「東京のですか大阪のですかどちらですか」と反問する所、惠比須麒麟の兩ビールに雜ふるに朝日ビールを以てする所、即ち東京的勢力と大阪的勢力とは中京の名ある名古屋近傍にて相參合することを知る、東西寧ろ南北の勢力は尾張平原にて衝突することを知る、切言せば

北日本と南日本の社交上の境界は此所にあることを知る。

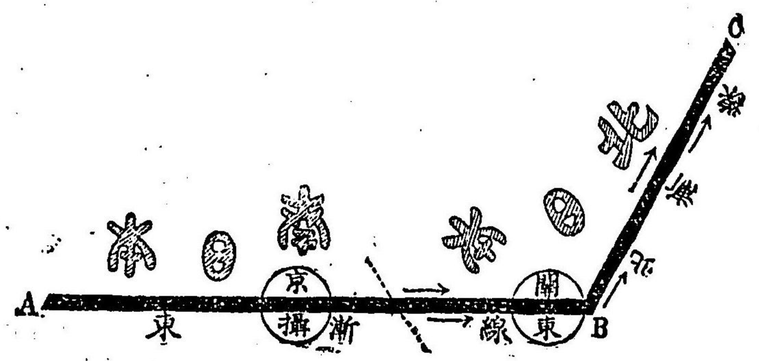
汽車は名古屋市を去り、いよ〳〵進行し大垣停車場に到らば東京の新聞紙は愈〻減少して大阪の新聞紙は益〻増加し、麒麟ビールは既に資子の板臺に上ぼらず、惠比須ビールは僅かに臺上に殘り、大阪の朝日ビールのみ幾本となく列び居るを見るべし。米原停車場にて新聞ヨロシウか〻々々々々々と資子の喚び來るを招きて「朝日新聞を呉れい」と命ずれば問はずして「ヘイ、大阪朝日新聞、一錢五厘」とて渡し、「毎日新聞を呉れいと命ずれば、直に大阪毎日新聞を渡し、東京の毎日新聞とては殆ど影もなく西行(寧ろ南行)して此所に至りては島田三郎君の勢力もなにもあつたものにあらず、「ビールを二本呉れい」と命ずれば二本共に朝日ビールを渡し、此所に至りては惠比須の唉顔は遂に認むべからず。いよ〳〵西行(寧ろ南行)して琵琶湖邊を繞ぐり大津町に到り遂に京都に達せば大阪の各新聞と朝日ビールとは共に益〻跋扈せり。既にして大阪、神戸、岡山、廣島と次第に進行し折れて山陰道に入り、鳥取、松江、濱田に到るも大阪の各新聞と朝日ビールとは到る處これを見ざるなく、而かも東京の各新聞紙と惠比須麒麟の兩ビールは益〻少し。

蓋し日本本島の中央にありて地形の最も幅狹く而も地質の最も新近なる構造に係り(第四期層)且つ最も平坦に最も低卑せる地方は琵琶湖東より濃尾に延緣せる平原これなり、(最近世の構造にして地盤の軟弱疎鬆なる地質なるに依り、前年地震の際、劇甚慘酷なる禍災を被ふむれり)琵琶の大湖あるは即ち地面の低卑なるを以てなり)。若し夫れ假りに太平洋なり又たは日本海の水面をして今少しく高からしめなば、水は此の平原に注入し來り、琵琶湖は膨大して日本本島は別々なる二島に分離するに至るべし。即ち此の濃尾の平原を以て日本本島を地形的に二大分し、東(寧ろ北)にあるを北日本と稱し、西(寧ろ南)にあるを南日本と稱ふ。

神武天皇を初め、太古の日本人は西より東に寧ろ南より北に移動せしものなり。即ち日本人種の遷徙は東漸寧ろ北漸なり。かくて東漸し又た東漸して現今の京都、大阪の邊に到るや、日本本島の西部(寧ろ南部)にありて地形の最も膨脹せる處に到るなり、即ち紀伊の大半島は遠く南方に斗出してUの字形をなし此のUの內に澱川、大和川等の起生せる沖積層の肥沃なる大平原(京攝奈良に延緣せる平地)あり。さて地形の最も膨脹して人民の往來に便宜なる處、所謂四通五達の地の中心に肥沃なる大平原の在るありとせば、太古より人民のつどひ〳〵て此所に集合するは偶然にあらず、知るべしUの字の袋の如き內に人民の盛りに盛られて此所に西部日本即ち南日本

の中心を作りたること。を。即神武天皇の大和の橿原に帝居を定め給ひて肇國の基礎を固め給ひし以來、歴代の天皇或は大和、河内の隨處に或は攝津の難波津今の大坂に、或は平城(今の奈良)に、或は平安城(今の京都)に宮居を定め玉ひ、遂に六波羅室町の幕府も京都に開き、日本歴史の大英雄たる豊太閤も大坂に城き、所謂京阪即ち上方なるものは歴として南日本中心たり、宜べなり、京阪的勢力即ち上方風の南日本の全體を蔽ふことを。豈に獨り大阪の各新聞紙と朝日ビールの勢力あるのみならんや、言語風俗衣食住の情態等一切の社交上に取引の關係賣買の調子等一切の經濟上に大阪の南日本に大勢力あるは甚だ明瞭なりとす。大阪に入らんとして市東の吹田に達し、所謂朝日ビールの醸造所なる大阪麥酒株式會社の大工場を望み幾個の煙突より煤煙の隆々と天を衝きて蒸上し巨額の麥酒を醸造して南日本全體の人を醉倒さしむるかの如きものあるを見而して當面のむさくろしき一民屋に小看板を掲げ朧ろに「エビスビール」と書せるものあるを見る毎に東京的勢力即ち北日本の勢力の僅かに此の小看板に殘留して孤城を嬰守するの感あるを免れず。

日本の地形は楕圓狀をなせり楕圓には二個の中心なかるべからずとは幾何學の教ふる所なり、既に南日本の中心ありとせば北日本にも亦た中心なかるべからず。即ち南日本を經過し又た境界線なる濃尾の平原を經過して北日本に入り東漸し又た東漸して關八州の邊に到るや日本本島の東部(寧ろ北部)にありし地形の最も膨脹せる處、否や日本本島にて最も膨脹せる處に到るなり。即ち相模、武藏、常陸、總房半島より雨毛信越を包羅せる部分これなり。此の膨脹せる部分に利根河系の起生せる肥沃なる大平原(關東の大野)ありかく地形の最も膨脹して人民の往來に便宜なる處所謂四通五達の地の中心に肥沃なる大平原の在るありとせば、古來人民のつどひ〳〵て此所に集合するは偶然にあらず、且つや地形より見るも同溫線より觀察するも、山陰山陽より關八州に到るは略ぼ一直線をなし略ぼ東漸をなすも、關八州よりして日本の地形は突如と北に向ひて走れり、故に關八州よりいよいよ前進せば東漸にあらずして眞の北漸となること上の圖に示すが如し、即ち北漸せば氣候はいよ〳〵寒冷となり、人生に不便不利なるが上に、直ちに利用し得らるべき天産物とて少く地味も亦瘠薄なり而かも關八州は實に東漸線ABと北漸線BCとの相會する所にあるが上に土地潤大、平坦肥沃にして氣候も和順に、物産も亦た饒多なれば古來より人民の北漸にせずして關八州のみに充滿し、此所に東部日本即ち北日本の中心を作り出したること宜べなりと云ふべし。源氏、北條氏、足利氏の鎌倉に覇府を開き、後北條氏の小田



原に城き遂に德川氏の江戸に開府して三百年間の文化を啓き、王政維新後皇居を此所に移して東京と改め玉ひ所謂關東又た江戸即ち東京となるものは歷として北日本の中心たることを見るべし東京的勢力の北日本全體を蔽ふもの偶然るにあらずと知るべし。豈に獨り東京の各新聞紙と惠比須ビスビールの勢力あるのみならんや言語風俗衣食住の情態等一切の社交上に取引の關係資寶の調子等一切經濟上に東京の北日本に大勢力あるは甚だ明瞭なりとす。福島町(岩代)の市街を散策せんか衣服店に飲食店到る處「東京」の二字を冠する中に一小木札に「大阪金山寺味噌あり」と掲げたるものあり大阪的勢力即ち南日本の勢力の僅かに此一小木札の名殘を留むるを見れば他の大阪市近の吹田に「エビスビール」の小看板ありしと對照參考して同一の感想を生ぜしむるものあり。

日本はかく北日本南日本の二大部分に別れ而して北日本は關東を中心とし南日本は京攝を中心とすること以上說く所の如し。然れば日本三千年の歷史も畢竟北日本と南日本との對抗運動に過ぎず。初代神武天皇の肇國より王朝の衰微に到る頃までは勢力京攝にありて南日本の時代なりき、藤原氏跋扈して後に衰へ平氏これに代はりたるも兩氏共に朝廷に賴りて根據を京都に据えたるもの要するに開國より保元平治の頃までは南日本得意の時代なりき。是に於てか朝廷に志を得ざる者藤原氏若くは平氏に平かならざる者は去りて關東に赴き南日本に不平なる者はより〳〵去りて北日本の中心に集り源賴義義家に賴り賴義義家相踵て逝くも南日本に對する不平の氣は潛默して遂に逝かず賴朝起りて家祖賴義の故地鎌倉に據るや關東に鬱積せる潛勢力は茲に勃發し關東の群豪も亦たこれに心を傾け賴朝乃ち北日本全躰の勢力を提げて南日本に對抗し平氏は其の根據地たる京攝を引き揚げ南日本の南へ南へと落ち行きて遂に壇の浦に滅亡し南日本は茲に北日本の爲めに全く敗北し北日本得意の時代は初まりぬ。鎌倉當時の繁昌は想ふべきなり。北條氏源氏の後を承け亦た關東を根據地とし鎌倉に

居りて全盛を極むるや、京都の朝廷はこれに平かならず、南日本の群豪も久しく關東即ち北日本の跋扈に平かならず遂に後醍醐天皇の建武年間に到りて非(ファン)關東若しくは排北條の感念は「勤王、々々」の呼號につれて大に嵩まり、北條氏亡びて王室中興し、北日本の勢力は暫時鎖沈して再び南日本得意の時代となりぬ。然れども當時南日本黨の有力者たりし足利尊氏たるもの朝廷に平かならず、尊氏は其の京都等持院に儼存せる木像にても顯示する如く完全に發達せる頭腦と身躰と相貌とを三備し、且つ天性リーダーたるの資格を備へ、自己には利益と財產とを一も取るなくして人には惜氣もなく分與しゝかば、其の人望の隆々として士心を得たることは日本歷史中に他に其比を見ざる所なり、尊氏の朝廷に叛せしは固より不義不忠なり、然れども其の前代未曾有の大人望家なりしことは如何に蔽はんとするも蔽ふべからざるを如何せん尊氏や此の如きの人望を以て關東に旗を揚ぐ、其の戰功を負ひ朝廷の恩賞に洩れたる者即ち政黨內閣の獵官洩れの如き者若くは南日本に志を得ざる者の相率ゐて尊氏の麾下に集り來りたるは偶然にあらず、かくて尊氏は北日本の勢力を提けて朝廷に叛き、以て南日本に對抗せり、所謂南北朝の亂是なり。其間に起りたる楠公父子の盡瘁も、北畠雅后が神皇正統記の著述も「西陲僅存臣武光」の孤忠も畢竟北日本と南日本との磨擦中に發したる意氣に過ぎず。既にして南風競はず、足利氏勝ちて遂に十五世の覇圖を作りぬ。足利氏の末造より群雄蜂の如くに起り、世は苅り菰と亂れつゝ何時治まるべきかと見ゆる間に中原の鹿は遂に豐臣秀吉の手に落ち秀吉大に大阪に城きたり。秀吉死するや其の坏土未だ乾かざるに秀吉に代はらんとする者いよ〳〵江戶より頭を持揚げたり、是に於てか豐臣氏即ち大阪を中心とせる南日本の勢力と德川氏即ち江戶を中心とせる北日本の勢力との絕大なる對抗運動は起れり。豐臣黨の謀主を石田三成となす、三成は自から奉ずること極めて薄くして人に厚く士が祿を貯蓄するは盜なりと自から宣告して一も自から貯蓄する所なく、佐和山四万石の半を割きて島左近を聘しゝが如き非常の人望ありしものの故なしとせず、然れども彼れ如何に自己の部下には人望ありしとは云へ、素と武勳なき一個の後進なる文官出身者なり、而かも尙ほ能く大小の諸侯伯を一味に集め得たるものは實に大阪にある豐臣秀頼を擁して起ちしを以てのみ。既に大阪を中心として起てり南日本の諸侯伯が集り來りたるは些も怪むべからず、即ち備前の浮田氏も中國の毛利氏も四國の長曾我部氏も九州の小早川氏、小西氏も、南日本にあるものは悉く來り會し、夫の豐臣氏と舊怨ある薩摩の島津氏すら來り會したるは偶然にあらざるなり。

南日本なる諸侯伯の大阪を中心として起つこと此の如し江戸にあるもの如何ぞ手を叉きて坐視せんや、徳川家康乃ち師を擧ぐるや北日本にあるものは夫の傲岸不屈なる獨眼龍伊達政宗と雖も尚ほ且つ家康の麾下に來れり、況んや其の他の擾々たるものをや、出羽の最上氏、甲斐の淺野氏、駿河の中村氏、遠江の山内氏、有馬氏、堀尾氏、三河の池田氏、尾張の福島氏、飛驒の金森氏、伊勢の吉田氏など或は徳川氏に宿怨あり或は豊臣氏に洪恩ある者と雖も、競れも競ひて家康の麾下に來り會しぬ。是に於てか大阪を中心とせる南日本の勢力と江戸を中心とせる北日本の勢力との對抗運動は果して兩々の境界線たる濃尾平原にて開始せられ兩軍大に關ヶ原に雌雄を決し豊臣黨敗れて徳川勝ち南日本の勢力は茲に銷沈して天下は北日本の所有物となりぬ。

天下は徳川氏の掌中に歸し徳川氏江戸に居城して日本を制治すること二百數十年、南日本の者これに平かならず、長州藩士の家にては兒の寢に就くや、母は其足をして東即ち北日本に向ひて伸ばさしめ枕上に其の頭を撫でつゝ「愛兒よ願くは此足を以て關東を踏みたくつて呉れ、關ヶ原の敗北を忘れるなよ」と、島津氏の江戸に參勤交代の節其の三田四國町なる屋敷を引き揚げて去らんとするや、乃ち儀式として千代田域(江戸城)に向ひ一發の鐵砲を放ち去るを例となせり、以爲らく早晩必らず眞に江戸城に向ひて鐵砲を放ち以て關ヶ原の汚辱を雪がんと。かゝる間に世は太平打ち續きて江戸なる徳川旗本の少壯年は齒に金を鍍めたる者と銀を鍍めたる者とを分つて金齒組、銀齒組と名づけ髮付ヶ油をべた〳〵と滴るばかりに頭髮に塗り付け、紫紐にて髭をくゝり、サスガ、ツバ、メヌキに金銀を鍍めたる朱鞘細身の大小をスラリと差し、吉原、芳町將た猿若座の芝居に遊びくらし居ける折しも南日本にある失意の藩士は「衣到肝、袖到腕」とて乾葉大根に豚の味噌汁を啜りつゝ琵琶一曲悲歌淋漓武を勵み筋骨をきたえじかば羅馬人は遂にゴール蠻族に抵抗すべからず、江戸と南日本と成敗の數は初めより早く旣に知られたり。かくて南日本の徒は長州の毛利氏、薩摩の島津氏は固より、四國の山内氏(土佐)、蜂須賀氏(河波)、中國の兩池田氏(備前及び因幡)、九州の鍋島氏(肥前)、黒田氏(筑前)、有馬氏(久留米)、立花氏(柳川)よりはては徳川御三家の一なる紀州すら南日本に所在するより地形の然らしむる所いづれも我れも〳〵と「勤王々々、尊王攘夷々々々々」と呼號して南日本の中心たる京都の朝廷を擁し以て江戸なる徳川幕府に對抗しぬ徳川御三家の一なる紀州すら朝廷に一味せり、南日本なる大小諸侯伯の中には彌治馬となりてまで出懸け來りて京都に競び集り、浪人儒者より、さては鳥東千百の妓まで所謂尊王攘夷を唱へて幕府に反對したり。

徳川將軍は遂政權を奉還し、尋で伏見の一戰に敗北して關東に遁れ歸りぬ。是に於てか南日本の軍勢は北日本を征伐せんとし錦の御旗を押し立てゝ東海道へ向け進發しぬ。是より前き德川家康の封建制を以て諸侯を全國に封ずるや、其の配置の方法は專ら算數の上より立てゝ安排し、外樣なる甲大藩に列ぶるに乙れと勢力の相匹敵せる外樣乙大藩を以てし、以て相互に睨み合ひをなさしめ外樣なる丙中藩の傍には之れと封土の伯仲せる外樣丁中藩を置き以て相互に競爭せしめかくて外樣各藩をして復た德川氏に叛抗するの餘力なからしめ、かてゝ加へて這般の外樣各藩の間を環繞するに多數なる譜第の小藩を以てし、而かも這般譜第各小藩の聯合勢力をして恰かも外樣各藩の勢力と匹敵せしめ、かくの如く相互に牽制せしめ、以て全體のエクキリブリヤムを保たしめたり、日本全體の封建制は此の如く算數上より立てゝエクキリブリヤムを保たしめたり、日本全體の永久萬全ならんことを期圖せしと雖も、若し夫れ後年に當り德川氏に叛くものありとせば、せめても日本の半分即ち北日本だけは德川氏の所有たらしめんとし、琵琶湖東には自家が四天王の一隨たる井伊氏(彦根)を封じ、湖北には一族たる松平氏(越前福井)及び四天王の一たる酒井氏(若狹小濱)を封じ、次て濃尾の平原には一族たる德川氏(名古屋)を封じ、かくて南日本と北日本との境界の地方には自己と最も親密なる諸藩を封じ、以て萬里の長城を此所に築き、以て南日本に對する押へを作さしめ長城以內即ち北日本だけは自己の領地たらしめんとし期せしなり、而かも此の長城すら破壞さるることありとするも、尙ほ且つ防衞を盡さんとして以て尾張以東に多數なる譜第の諸侯が封土を飛び石の如くに駢列し置き以て、二重、三重、四重の城壁を築き這般の城壁にして尙ほ且つ破壞さるるなどのことありとするも更に函根山にて防衞を盡さんとして山下に親藩の大久保氏(小田原)を封じ、而して江戶を中心となせる二十里の圈內に川越、熊谷、岩槻、騎西關宿、古河、佐倉、土浦等の親藩を環遶せしめ以て小田原陷るも江戶大城の防衞を盡くさしめんと期せり。江戶の防衞は此の如く八重、十重、十二重なり、故に南日本より進みて江戶を陷れんとせば先づ主力を東海道に用ひて其の幾重の城壁を破壞せざるべからず。かくの如くして明治維新の際、南日本の大軍は主力を提げて東海道に向け進發せり。大軍湖東に到る、德川氏の四天王たる井伊氏(彦根)は早く既に南日本の勢力に捲盡せられて「勤王」せり。井伊氏すら此の如し、沿道の小藩は風を望みて南日本に降れり。大軍尾張の平原に到る、さすがは南日本と北日本の境界線なり、東京朝日新聞ですか、大阪朝日新聞ですか、どちらですと問ふ處即ち

維新の際に當りても、江戸(佐幕)たらんとするか、京都(勤王)たらんとするかどちらにせようかとて尾張藩の去就を迷はしめたり、而かも伏見の一戰後は勝敗の數固より歴々として最後の勝利は南日本にあること豫め知り得べし、尾張人は豫て慧敏怜悧を以て世上に知られたるもの、如何ぞ勝敗の數判然たる此際に當りて輙ち敗者たらんとする江戸に與するが如き野暮の骨頂をなさんや、果然どちらにせようかとまごちたる評議の末、田中富士麿一派の議論勝を制し藩を擧げて南日本に降り戈を倒して德川氏に反對しぬ。境界線なる尾張の大藩は既に、南日本に降れり、遠近の小藩は競ひて款をこれに通ぜり、南日本の軍は輙ち破竹の勢を以て北日本に入り、大兵潮の如く岡崎城下に迫り來れり。岡崎は北日本の入口に當りて其開戸を守るもの、區々五萬石未滿の小藩と雖も豈に一戰して以て門戸をこじ明けんとする南日本の勢力を拒絶せざるべけんや、果然北日本の爲めに佐幕の旗は初めて岡崎藩士に依りて揭げられたり、固より小藩のことなりとて力足らざれば北日本の堂殿たる函根山に入りてこれと戰ひ敗北して上總に入り、磐城に入り、羽後に入り、北日本の奥へ奥へと入り、藩土半ば戰沒して連敗如何ともなし難き折しも此役や固と北日本と南日本との對抗運動なれば北日本の列藩は南日本に對する意氣地を張らん爲めに同盟を作爲したり、乃ち會津、仙臺、南部、庄內、二本松を始めとし、夫の德川氏と舊怨ある譜代の後裔なる上杉氏(米澤)すら連盟して佐幕の爲めに起ちたり、かくて奥羽大小の十八藩同盟し、越後の長岡も地形上これに同盟し遂に北日本は江戸を中心として南日本に抵抗せり、而かも勝敗の數は當初より知られ北日本は脆くも南日本の爲めに打ち破られぬ。關ヶ原の戰勝者幕府、德川氏、江戸、北日本の勢力は茲に敢へなく蕩盡して表面には皇室、京都の中興となり、王政維新となり、裏面には關ヶ原の戰敗者薩長氏、藩閥南日本の天下となり、所謂藩閥政府は茲に興りぬ。日本三千年の歴史何にものぞ、畢竟南日本と北日本とが相互に交る〳〵新陳代謝して南盛北替、北興南亡、南隆北衰、北起南伏、南勝北敗と唯だノルリ〳〵と回轉循環するものに過ぎず、大局より觀じ來れば源平の爭も、南北朝の亂も關ヶ原の大戰も、王政維新の大業も、正に是れ一個の南瓜を指し上方人が「ぼうぶら」なりと云へば、江戸つ子は「とうなす」と云ひ「イーエ、ぼうぶらデヲマス」「ナンダ、とうなすだてよ」「ぼうふらじや、とうなすダ」と罵り爭ふに過ぎざるのみ。

此の如くして天下は南日本の所有物となれり、政權は所謂藩閥の掌中に歸したり、分捕り物は戰爭にて最も多く働きたる者の手に落つるなり、即ち九州なる薩摩、肥前四

國なる土佐より大小人物が前後參議參與若くは大臣となりたるもの偶然にあらず。かく藩閥の主腦力は專ら南日本の堂奥たる九州と、四國にありて日本本島に至りては九州、四國と僅かに一葦水を隔てたる長門にのみ主腦力のあるに過ぎず切言れば明治年間の政權は南日本中の南に壟斷されたるものなり薩長土肥に專有せられたるものなり。然れども王政維新の事業は南日本の事業なり、故に政權は幾分か南日本全體に分配せられたり。此の如く政權は薩長土肥に專有せられ其他の南日本の人も亦た幾分かこれか分配に預りたりと雖も遂に北日本に分配せらず豈に獨り參議若くは大臣のみならんや、其他政黨の如きに至りてすらも南日本は文武共に悉く優先權（プライオリテー・プレフェレンス）を占有したり。南日本の人の得意なる知るべきなり、東北人士の今の政治界に不平なるに引き代へ北日本の人の失意なる蓋し世の古今を問はず海の東西を論ぜず、凡そ正義の聲善を主張するの聲、惡を排斥するの聲は常に弱者、敗者、逆境者の間より出づるものなり、例へば亂暴なる腕力家の拳を固めて無辜なる弱者を擊たんとするや弱者は輒ち正義の聲善を主張するの聲、惡を排斥するの聲を發し、罪もなき者を無暗に擊ちたゝくは不正なりとて自己を防禦するなり、而して強者、勝者、順境者は常に正義の聲善を主張するの聲惡を排斥するの聲を忌み嫌ふを常とす。明治年間に於ける所謂藩閥人士及び南日本の人は強者なり、勝者なり、順境者なり、故に我が儘勝手の言動多く公人としても私人としても汚穢なる振舞少からず、正義の聲善を主張するの聲惡を排斥するの聲を忌み嫌ふこと殊に甚しきものあるは偶然にあらず。是に於てか正義の聲善を主張するの聲惡を排斥するの聲は常に弱者、敗者、逆境者たる東北人士の間より起るべき者なり然れば今の日本社會にて實行者の地位に立つ能はざるが故に專ら批評者となりて筆に舌に正義の言論を唱へ、上下兩院に、新聞雜誌上に、演說壇上に侃々諤々するものは大概東北人士なること些も偶然にあらず。

これを要するに、北日本の地質に火山岩殊に多く、隨て活火山沈火山多く、峭拔奇警なる山嶽多く又た平原曠野少からず景象雄大にして自から太陸的なり南日本の地質に至りては花崗岩多く隨て火山殊に少く、圓滑なる山嶽多くして平野曠野変多からず、這般の花崗岩は分解破碎にて白色の砂となり、青松其上に點綴して野謂白砂青松の風景を形り、氣象溫雅美にして雄大ならず。北日本と南日本と風物の差異あること此の如し、其の社交上に歷史上に人情風俗に差異あるもの偶然ならんや。然れども今や陸には道路鐵道電線郵便爲替の便大に開け、海には蒸汽船の便大に開け川河

には小蒸汽船渡し船橋梁の便大に開け、而して復往來の旅人を誰何抑留するの關所なるものあるなし、然れば北日本と南日本とはしげ〴〵交通をして相融和し相調訂し、今より以後渾然一家となること固より期すべきなり。

(四) 亞細亞地理考究の方針

その面積を問へば、全世界陸地の三分の一を占め、その人口を問へば全世界生靈の二分の一以上を有ち、陸地には全世界第一の高山(ヒマラヤ山脈)高原(西藏)平原(露領亞細亞)湖水(裏海)內陸灌域(トルキスタン低地)あり、而かも全世界第一の高山あるかと思へば、また全世界第一の低地(シリヤ國シ㆖ルダン溪谷)あり、生靈には黃人、白人、馬來人の各人種あり、三大言語系統あり、生物には象、虎、獅子、犀の如き動物の最も壯大に最も猛烈なるものあり、氣候に寒帶、溫帶、熱帶を包羅し、極寒と極熱、極乾と極濕とを占領し、極風、變風、貿易風、時風(ムンスーン)、颶風の區域を保有す。隨て陸外には全世界第一の水面(太平洋)と全世界第一の深淵(タスカロラ號の實測に係る日本國千島ウルップ島の西五十里海里四千七百尋ある所、所謂タスカロラ深淵は全世界第一の海深なりとして知られたれども、二年前アルバトロス號が日本の南赤道線の北に於て海深五千尋以上なる二個所を實測したり、是れ刻下に於ける全世界第一の海深たり)ありその歷史を問へば今より

二十五万年前世界最初の人類はこの大陸の中部に生育し、爾來絕代の偉物「釋迦、孔子、耶蘇、基督、ゾロアステル、マホメット等相踵ぎて此所に生れ婆羅門(バラモン)敎、拂敎儒敎、拜火敎(ゾロアステリズム)基督敎、回敎、薩滿敎(シヤマニズム)等みな淵源を此所より發し而して西洋人の所謂世界最古の邦國ズメル、アカッド、アッシュリヤ等みな此所より起り、東洋人の所謂世界最古の邦國印度支那等みな此所より興り、今の文學、理學、美術、巧藝の淵源太概は此所(印度、支那、アッシュリヤ、バビロニヤ、フェニキヤ、波期(ペルシヤ)、亞拉比亞(アラビヤ))等より發す、豈に獨り古代史の見るべきものあるのみならんや、その近代史に至りても亞細亞人は實にこの太陸を根據地として全世界第一の大帝國を再び(成吉思汗(ジンギスカン)又び帖木兒(タメルツン))興起せり。これを要するに地勢上より觀察せば歐羅巴亞弗利加の二大洲は亞細亞洲の純然たる附庸なり「而かも歷史上より視察するも亦た亞細亞洲の附庸たを免かれず、キヨー博士の歐羅巴洲の風土を講述するや、歐洲發達の原因を主としてその地勢の"Permeability"(「入り込み易き事」)に歸し以て歐洲太陸構造の至妙なるを得々として稱揚せり、而かも元來"Permeability"の容易なるは素と事物の小なるを以てのみ奧行(オクユキ)の淺きを以てのみ、別言すれば歐洲太陸の構造は規模淺小なるを以て普通の人類には使用し易く何事につけ甚だ重寶なるものなり、是れ容易に文明の域に到達せし所因となす亞細亞洲に至りては然らず

其の規模の絶大なるその奥行の深宏なることまことに測り知るべからざるものあり、比較すれば歐羅巴は小なり、測り易し、亞細亞は大なり、測り易からず、要するに亞細亞は大なる未來を有す。

亞細亞洲の眞隨は「大」と測るべからざるものと二あり、以て歐羅巴洲の容易に使用し得べきものと大に異にす、請ふ少しく歐亞二洲の過去と未來とを講述せんか。歐洲始初の人文は希臘より發す、何を以て希臘より發せるか、希臘の地形たる半島にして而かも此の半島の中に更に小なる半島を作り又更に最小なる半島を作れり、故にその地形は最も容易に人類に使用され得べき樣に作くられ居れり、而して其の地勢とし云へば、山脈縱橫して其間各處に溪谷を開き、溪谷個々泉甘く土肥へ、最も人類が個々の小社會を構造するに容易なり、加ふるに海岸は屈折出入して島嶼あり港灣あり、裨海も亦人類の使用に容易なり、要するに海陸ともに規模の淺小にして重寶なることそに入り、こゝに復た一大文明を造くり來れり、而かも羅馬の在る伊太利も亦半島なり、實に歐洲始初の人文が希臘に啓發せし所因なれ。希臘の人文や潛轉默移して羅馬北はアルプス山脈を以て限られ、蜿蜒として南に趨り、地中海とアドリヤチック海に突

入せる細長き陸地なり、其規模や少しく希臘半島より大なる所あるも、かも人類の使用に容易なる點に至りては希臘と其揆を一にす、唯希臘よりは規模の大なる丈け人類のこれを使用すること少しく艱難なりしのみ。希臘羅馬の前後に亡ぶるや歐土の人文一時に鎖沈して所謂「暗世」をなせしも所謂「復活時代（ルナッサンス）」來りこゝに到りて大に活力を發揮せしものを西班牙及び葡萄牙となす、西班牙及び葡萄牙や亦た半島國「イベリヤ半島」なり、水陸の規模淺小にして自から人類の使用に利便なり、これ「復活時代」の始初に當り大に活力を發揮せし所因なり。蓋し希臘地形の規模は極小なり、而して人文希臘に次てこゝに啓發し、羅馬地形の規模は希臘より大なり、而して人文羅馬に次てこゝに啓發す、三半島に於ける人文啓發の順次たる其の源因や必らずしも悉く地形の大小の順次のみに據るべからずと雖もその源因中の太要なるものたるや疑ふべからず。歐洲南方なる三半島の人文漸く凋落するや、人文の盛場は次第に北漸し去れり、即ち次第次第に人類の使用するに艱難なる地方に向ひて趨き、容易より稍々容易なる個所、稍々容易なる個所より稍々艱難なる個所に移動し、佛蘭西、英吉利、獨逸を經て、遂には北方なるスラヴォニック民族の根據地たる露西亞に向はんとす、歐

洲の識者以て大希望を露西亞の未來に屬するもの豈に理なしとせんや。白哲人種の邦國歐洲の東西に角立し、人殖えて土壤限りあり、相互に競ひて地形の規模淺小なる此洲を使用し、漸く使用し盡くさんとして各々寸土を爭ひ、虎呑狼噬、弱肉強食の活劇を演するや、神明天に在まして歐人の慘狀を看過するに忍ばせ玉はず、歐人中の一人なるクリストフーア・コロムボ(所謂コロンブス)をしてその同胞の爲めに蔽はれたる幕を引かしむ、幕の開くや新に現はれたる大舞臺こそ實に「新世界」即ち亞米利加なれ、神明の亞米利加太陸なる舞臺を築造さるゝや充分に思慮を費されたること〻見へ、その地形の構造や斐然として觀るべく、その規模や絶大にして歐洲の如き淺小なるものにあらず、而かも北亞米利加は東西を繞らすに各々太洋を以てし內陸なる氣候の乾燥を防衞せんため面積の廣大に、水底の深邃なる五個の連續せる淡水湖(寧ろ海とも稱ふべき)を湛え中央には全世界第一の大河を鑿ち以て好く乾濕の總度を調訂し、鹽梅せしめぬ、まことに自然の太美に近きものと云ふべし、南米太陸はその構造たる北米太陸に劣るものあり、而かも亦た大に嘆美に堪えたる所少しとせず、然れば「新世界」の舞臺たるや規模は絶大なりと雖も其間人類の使用するに利便なる所殊に多しとす、是れ白哲人種が第二の歐羅巴をこゝに大造せし所因なり。當

初神明以爲らく「新世界」の面積や絶大なり、地形、地勢や完美なり、萬億の世靈「舊世界」より渡來するとも、これを容れて長へに餘裕あらんと、乃ち大に門戸を開きて「イクラ」でもドシ〳〵おいで」と喚び玉ふや、歐人は突喊して闖入し、地を拓き邦國を興し、漸くにして人口充實し、土地の餘裕乏きを告げ來り、農產國は一轉して製造國たらんとし、歐人の植民政略の舞臺たりし米國は却て自ら植民政署を太平洋の外に行はんとし、共和主義は漸くにして帝國主義に轉移せんとする動機を隱微の間に察しさせ玉ふや、神明は以爲らく「米國は餘程大きく且つ完全に造つて置いたから、歐羅巴人がドノ位ひ這入つて來ても三四百年やソコラの間には〻ダ〳〵澤山餘地があると思つて極く安心して居つたのに、思ひ懸けない樣に多人數這入つて來た、コレては第二の舊世界が此所に出來る樣になりソーだ、コレは大變だ」とて、俄かに身を起して突嗟に濠太利洲を築造し玉ひ、忽ち幕を引き明け去り、最新なる舞臺としてこの濠太利洲を歐羅巴人の植殖の用に授け玉ひぬ、然ればにや濠太利の地形たる規律的なる長方形にして海岸に屈折出入の少なきこと猶ほ細かに彫刻せざる建物の如く、地勢も亦山脈あるなりに海岸に近くして自然の缺點少からず、內陸は不毛無水の廣寞たる方土にして、內陸の氣候を調訂するに北米大陸の如き大湖大河あるなく、その動物とし云へば子

供を袋の内に入れ引きかゝへて直ぐと逃げ出すことをなし得る俗に申せば裏店の婦の如き)カンガルー(袋鼠)の如き、禽鳥なる家鴨と獣類なる田鼠との合の子とも見まがふべきダックヒル(家鴨の嘴)の如きあり、いづれも大忙ぎに忙ぎて製造せしものゝ如く濠太利の自然界の事物は最も疎陋に作られとても亜米利加と比肩し得べきものにあらず、故に欧人は先づ濠太利の使用し得べき部分だけを使用し、今やこの「最新世界」亦た早く既に第二の亜米利加たらんとし欧人を客るべき餘地の漸く乏を告げんとするや、動機は亜弗利加洲に向ひて移轉し去れり。亜弗利加洲は欧羅巴洲と一葦水を隔てゝ相對せり、その北西の如きは殆んど欧洲と連接せり、而かもその地形の徒らに尨大に失して海岸に、内陸に、交通の便利を缺き、且つや内陸には萬里不毛の沙漠彌茫として連り、かてゝ加へて気候もまた炎熱瘴癘を極め人類のこれを使用するに其難なるは知るべきのみ、是れ亜弗利加洲の欧洲に近接するに係らず、欧人の長く使用せざりし所因となり、然れども今や「新世界」の亜米利加は餘地に乏を告げ「最新世界」の濠太利も亦た漸く餘地の乏を告げんとするや、欧人はかくて又手するものにあらず、頃年來亜弗利加分領熱は烈火の如くに發し、欧洲の列國は相競ひて之を分領し、今や渺茫たる大沙漠にある一粒の沙すら其の持主なきはなく(サハラ大沙漠は佛蘭西の勢力範圍となれり)洋上の各島嶼もまた擧げて欧洲列國の兼併する所となれり。既に然り欧羅巴人は先づ北亜米利加、南亜米利加をその所有物となして、此所にて亜弗利加をその所有物となし、此所にも亦た新欧羅巴を建設せんとす、即ち殘る所は獨り亜細亜あるのみ。

渾圓球上六大洲の中、五大洲は實に欧人の占有に歸し、殘る所は獨り亜細亜あるのみ、然れども亜細亜もまた正しく欧羅巴人の占有に歸せんとするものあり、試みに見よ。

	面積	人口
亜細亜洲	二、八八〇、〇〇〇方里	八三五、〇〇〇、〇〇〇人
露西亜領	一、一〇〇、〇〇〇方里	二〇、〇〇〇、〇〇〇人
英吉利領	三三〇、〇〇〇方里	三〇〇、〇〇〇、〇〇〇人
佛蘭西領	四四、七〇〇方里	二二、〇〇〇、〇〇〇人
葡萄牙領	一、三〇〇方里	一、〇〇〇、〇〇〇人
總計	一、四七六、〇〇〇方里	三四三、〇〇〇、〇〇〇人

知るべし、亜細亜洲面積の半分より以上、人口の四割以上は業に既に欧人の掌中に在ることを。即ち中部より北部全體なる大地方は露西亜の所有に歸し、裏海の如き將さ

に「露人の湖」とならんとす、又た南部の中央なる印度の大半島は英吉利の所有に歸し、印度の西に隣接せるアフガニスタン、パルチスタンもまた英吉利の保護國若くは勢力範圍に歸せり、又た佛蘭西は今を距ること四十年前頃より漸く東南部なる後印度半島に指を染め、文久二年交趾を占領し、翌三年東埔寨王國を亡ぼして兼併し、明治十七年東京を經略し、同年また安南王國を亡ぼして保護國となし、同二十六年暹羅を敗りて其の領土の三分の一を割かしめ、以て「亞細亞に於ける佛蘭西の小帝國」の基礎を固定したり。明治十七年佛入の東京安南を經略して將さに支那の南部と內陸貿易を開通せんとするや英人たる者豈に佛人の盛事を傍觀して已むべけんや、翌十八年勃然起ちて緬甸を征し、その國王を擒にしてそれを遠竄しその社稷を亡ぼして兼併し、印度及び英領緬甸をいよ〳〵東に膨脹し、遂に印度を本體となし、右手をアフガニスタン、パルチスタンに擴げ以て、太陸南部の中央に覇威を稱へ來れり。次にかくの如くなる以て茫々たる亞細亞太陸もその半以上は歐人の掌中に歸し、所謂獨立國として殘留するは僅かに波斯、暹羅、朝鮮、支那、日本の五あるのみ、豈に亞細亞に於ける獨立國と云はんや、渾圓球上にて獨立國として殘留するものは實に此の五國に過ぎざらんとす。然れども波斯何を以てか能く今日に獨立し居るか、是れ他なし北に露西亞(中央亞細亞及び裏海沿岸地あり)南に英吉利(アフガニスタン、パルチスタン印度)あり、即ち露と英と兩々の平均せる勢力の間に介在して僅かに獨立を保維するのみ、露に煙草の專賣權を承認せば、英には鐵道敷設權を承認し、かくして微かに命脈を繋ぎ居るのみ、兩々勢力にして一たびその平均を失はんか、波斯や忽ちにして覆顚するを見ん、寧ろ消極的に獨立し居るものと云はまくのみ、又た暹羅(東埔寨、交趾、安南、東京)あり、即ち英と佛と兩々の平均せる勢力の間に介在して僅かに獨立を保維するのみ兩々の勢力にして一たびその平均を失はんか、暹羅や忽ちにして顚覆するを見ん、寧ろ消極的に獨立し居るものと云はまくのみ、又た朝鮮何を以てか能く今日に獨立し居るか、是れ他なし東に日本あり、北に露西亞あり、南に英吉利あり、即ち日本、露西亞、英吉利の三國が平均せる勢力の間に介在して僅かに獨立を保維するのみ、三國の勢力にして一たびその平均を失はんか、朝鮮や忽ちにして顚覆するを見ん、寧ろ消極的に獨立するものと云はまくのみ。支那に至りては如何、葡萄牙、明の嘉靖十六年(西曆千五百三十七年)南部なる澳門に割據し、露西亞は有名なる尼布楚條約(清の康熙二十八年、西曆千六百八十九年、外興安嶺を以て清露二國の境界と劃

定せし條約)を破りて咸豐八年(西曆千八百五十八年愛琿條約に依り南進して外興安嶺より南の方黑龍江に到る地方を占有し、同十年(西曆千八百六十年)北京條約に依り更に南進して黑龍江を超え滿州の東海岸二千七百清里の地方を併呑し浦鹽斯德港を開くに至れり。英吉利も亦た支那と戰ひこれを敗りて淸の道光二十一年(西曆千八百四十一年)南部なる香港を割與せしめ、明治三十一年に至り更に香港の對岸なる太陸の一部及び香港と大陸との間なる港灣を割與せしめぬ、若し夫れ明治三十一年及び昭和三十二年に至りては、歐洲の列國は相競ひて支那を蠶食し、獨逸は山東半島の南海岸なる膠州灣一帶の地方を占有し、英吉利も亦た山東半島の北海岸なる威海衞を占領し、露西亞は遼東半島なる旅順港及び大連灣一帶の地方を占領し、佛蘭西は南部の廣州灣一帶を占領し、更に其の所領なる安南と地續きせる廣西廣東の地方を得んとし、英吉利は中央なる楊子江溪谷一帶の大沃土を覬覦し、伊太利は浙江省の南半を欲望し、澳太利、比耳義、瑞西、丁抹の如きすら各々支那に得んと欲するものあり。蓋し歐人が支那分割に對する眞面目を悟了せんと欲せば英國の名士ヤングハスバントが三十二年十月公表せし滔々七千語の大論文を玩味するに若くなしとす、何んとなれば包まず匿さず、又も淡泊に最も明白に、歐人が胸奥の太秘を發露したるものあればなり、その要領に曰く、

凡そ人類の歷史なるものは優等なる人種が劣等なる人種を統治することを現示す、其間に動あり反動ありて、時に或は蠻人の文明人種を倒破せしことなきにあらずと雖も、遂には優等人種の劣等人種を征伏するに至るは人類歷史の本色なり。

何故に歐羅巴は其力を大に亞細亞に用ふるか何故に支那を壓迫するか是れ全く自己が衣食上の必要より起因せしものなり。想へ甲國にして其の國民が自己の衣食に必要する丈けの材料を悉く自國の內に見出すことゝせんか、彼等は固より外國に赴かずして自國に安居するならん、而かも不幸な哉歐洲の現狀は全くこれと相反せるを如何すべき。是を以て歐人はその衣食の材料を他邦土に需め來り、就中その衣食に最も必要なる原料の最も多額は實に支那に見出さるゝことなれば、歐人の滔々として支那に入り込むは豈に偶然ならんや況んや歐洲の人口は增殖し、生計の程度は益進し、衣食の原料を最も多く支那に求めんとする、今日に當り歐人の力を大に支那に用ふるもの豈に故なしとせんや。

顧ふに支那は世界の沃土なり、而かもその絕大なる天然の利源は未だ開發され

ず利用されず、徒らに不經濟に委ねて今日に至る、吾人豈に叉手して之れを看過するに堪ふべけんや。吾人は謂はんとす地球上の人口には限りなく、土地には限りあり、而かもこの限りある土地にして人類に有用なる部分とては更に限りあるものなれば、人類中の僅かに一部分の者共(支那を指す)が全地球中の最も豐沃なる部分(支那を指す)を專有し、而かも此の部分内に生存せる利源を姑息に開發し、而して他人の來り此所に力を盡くさんとする者あれば輒ちこれを拒絕するが如きものあるに至りては他人の相共同して支那を壓迫するに至れるものと豈に道理なしとせんや。支那人が其國の利源開發に力を用ふるは敢て妨げず、然れども支那人は他人の力を此所に用ひんとするものを決して妨ぐべからず、地球上に在る者は誰人も各々地球上が生産する所の物の分配に與かるの機會なかるべからず、歐人の確信する所は全く此にあり。此の確信の愈々增嵩すると共に歐人は此の大旨義を主張して益々支那に需むる所あらんとす、誰れか復たこれを非認せんや。

支那は大國なり、國内に不毛の沙漠もなきにあらずと雖も滿州及び支那本部の如きは眞に、沃土と稱ふべく、而かも此の部分のみにて百五十萬方哩あり、即ち英吉利に三十倍し、佛蘭西、獨逸、伊天利、濠太利の、合計面積に二倍し、長サ千八百六十哩、幅千五百二十哩あり、吾人何すれぞ支那を以て唯だ亞細亞州に偏局せる一國として是れ認視せんや。全帝國は北は北緯五十度より南は同二十度まで延長すれば、北部にてはカナダ地方の如き嚴寒に感じ、南部にては熱帶的の炎熱を感ずと雖も、大體より觀察すれば、氣候は大體の健康に適し人類をして强壯ならしむものあり。支那本部及び滿洲の地勢は丘陵多く平垣にして水利の便甚だ可なり、以て文明の發達には適せりと云ふべく、國の眞の中央を貫通せる揚子江の如きは長サ三千二百哩、太洋航行の大蒸氣船は江口より能く數百哩を溯り得べく、小蒸氣船なりせば四川省の中心たる重慶府に到るまで航行し得べし。國の大概は地味豐沃にして溫帶及び熱帶の最も有益なる耕作物は容易に生產し、理學的應用を施せばその收穫は大に加倍するを得べし。鑛物も亦た豐沃なる徵證あり、坑業は今日まで殆んど着手せしことあるなきを以て、充分にこれを測知するに由なしと雖も、金は滿洲及び支那本部に發見せられ、銀は今日すら多額に輸出せられ、石炭と鐵とは無盡藏と云ふべきものあり。ヴァレンチン・チルラル氏計算して曰く、支那をして僅かに日本の今日の程度までに開發せしめてすら、猶

ほ且つその貿易高は一ヶ年無慮二億磅に達すべしと。

（ヤングハスバンド氏は是に亟りて英吉利、露西亞、佛蘭西、獨逸の支那に於ける利益の關係、衝突將來を評論せり、その立論する所の鋭利なる犀牙の如きを見ろ）

若し夫れ支那を獨立になし置き之れをして中立國たらしめんとするは、恰かも老朽無識なる者をして蒸滊機關に點火せしむるが如し、遂に機關を前にも後にも進行せしめ得ず自から悶へ苦しましむるに過ぎず、吾人（英人）は先づ之れを印度に試みて其の過れるを悟り次で之れを土耳其、波斯に試みて些だに効用を見ず、今日尚ほ之れをアフガニスタンに試みて過を三演せんとす、何ぞ更に復た之れを支那に試みて失敗を重ぬべけんや。今や歐洲の強烈なる道德的光線が地球上の如何なる隅々までも照輝ぜんとする秋に當り、吾人は進みて夫の苛政と腐敗とを以て其の特色となせる亞細亞の諸獨立國を統治せざるべからず、吾人は吾人に對する歐洲の競爭者（英人に對する露佛獨人などを指す）を防禦せん爲めに無統一にして且つ半開なる人民（支那人）を庇護せんとするが如きは實に卑陋にして落膽すべき手段なることを確信して疑はざるなり。

若し夫れ露西亞及び佛蘭西にして英吉利を疎外し而して自己のみ支那に版圖を擴大せんと欲せば吾人は將來に於ける吾人が利益を保障せん爲め、進みて吾人が手近かにある楊子江溪谷即ち江口より雲南省までに吾人の勢力を擴大せざるべからず、而かも吾人の力にして露佛の聯合力に當る可らずとせんか、吾人は即ち他に吾人の同盟者を求めんのみ、然れども此の同盟者は斷じて白晳人種たるべく絶えて黄色人種たるべからず。

一言にすれば支那にして自國を保維するに足らずとせば、その潰裂するに任かすべし、吾人若くは他人はその廢趾の上に堅固なる新築建物を造るべし。蓋し歐洲列國の支那を分割するは到底免かれざる所なり、支那の某方面は露西亞の手に歸し、某方面は佛蘭西の手に歸し、某方面は獨逸の手に歸し、而して某方面は英吉利の手に歸すべし。かくの如きことを淡泊に公言せば、英人は例の戰慄を陽はに示しつゝ惡色を現はせどもかくの如き僞善的の言動をなす勿れ、議會の內外に在りて學者めける振つたる議論をなす勿れ、支那を保全するなどてふ思想は寧ろ一切打ち棄つるに若かず、見よや支那の潰裂は業既に前世紀より進行しつゝあるにあらずや、吾人は實に支那の分割に與かりたるものなり、而してそれが結果として吾人は自己を利益し且つ幾百千の支那人をも利益したるにあ

らずや。

然れども支那を分割することをば却て忌むべく卑しむべきことゝ看做す者少きにあらず、通般の人士は夫の老朽にして物の役にもたゝざる支那を振励し支持するを以て貴き事業と認識するものならん、支那を分割するを以て一種の政治的竊盗と認識するものならん、然れども支那分割にして果して政治的竊盗なりせば、獨り竊盗のみならず政治的謀殺もまた人類歴史の順序なり進歩の手段なり。

亜細亜若くは亜弗利加に旅行せし者は必らずや認識せん、歐人に依りて所領せられ又たは統治されたる部分は非常なる進歩をなし居ることをこれを支那、土耳其、波斯、アフガニスタンの如き腐敗、苛政、無法律の邦國に比較すれば實に同日の論にあらざるなり、見るべし歐人が通般の邦國を統治するは不道徳にあらず、否な進歩の障碍物を撤去するものなることを、英國統治の下にあるゼーナン、新嘉坡、香港在住の支那人と本國の支那人とを比較し見よ、前者は文明の恩恵に沐浴して各々其堵を安んじ其業を励むも後者は實に悲むべきの境遇に沈淪するにあらずや。然れば支那の分割を欲せざる者こそ世界進運の大趨勢に逆ふ者にして却て支那の進運を障碍するを是れ力め是れ奨励する者なれ。

之れを要するに不進歩なる人民を完全に統治し、正義を以て之れを待ち、泰西の理學的應用を施して其國の利源を開發するは文明の本義なり、次世紀の動機は正しく此の指針に向ひて潜轉默移するを認む。

既に此の如し、ヤングハスバンドは正しく歐人の胸奥に包藏せる大秘を發露せしものなり、支那の運命もまた茲々乎として危い哉。

此間に當り亜細亜に在りては眞正に獨立するものは獨り我が日本あるのみ、否な亜細亜以外の五太洲は悉く歐人の掌中に歸したるを以て六太洲中歐人種以外に獨立するものは獨り我が日本あるのみ日本の職責の重且つ大なる豈に常套語ならんや、世界の運命上より觀察すれば眞個に重大なりと云ふべし。亜細亜以外の五太洲は地形に地勢に規模の淺少にして重寶なればこそ歐人の早く既にこれを使用したるなれ、亜細亜に至りては地形地勢の規模絶大にして測るべからざるなれ、恰かも好し今の秋に當り未だ悉く歐人の使用に任せず歐人の所有に歸せざるなれ、恰かも好し今の秋に當りて日本たるもの亜細亜の救済と復興との大抱負を以て自から任ぜざるべけんや、亜細亜の壯大にして測るべからざるが爲めに未だ多大の餘地あるは、神明の天に在り

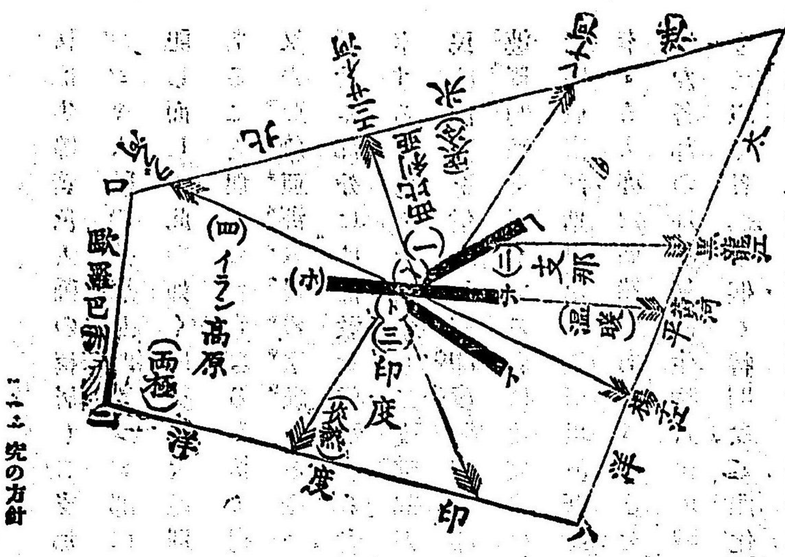
て私かに日本人の爲めに待つ所あるが爲めか。

亞細亞の規模は絶大なり、測るべからず、是を以て其の山河の形勢、氣候の冷熱、生物の配布、物産、人情、風俗、宗教を講究せんと欲せば固より期月の間に卒ふべからず、縱令一時の間は能く記憶し得るも、忽ちにして遺失するの患あり、乃ち其の大體を云ふべきか。

先づ第一に亞細亞洲の地勢、山河の形狀を知らんと欲せば、其の形狀をイロハニの如く略定し、而してイロは北氷洋に瀕し、イハは太平洋に瀕し、ハニは印度洋に瀕するものと略記し、ロニは大陸地(羅歐巴洲)なることを略記し尋て其の山脈(ホ)ホ即ちヒンヅユ、グーシユ崑崙山脈(ヘ)ヘ即ちアルタイ山脈(ト)ト即ちヒマラヤ山脈を略畫すべし。

此くせば亞細亞洲中央の地勢甚だ高崇なることを自から悟り得べし、而して又た亞細亞洲の大河の水源は必定此邊に存在することをも悟り得べし、尋て(ホ)(ヘ)ヘ以北の川河はイロ即ち北氷洋に向ひて注ぎ、ヘ(ヘ)(ト)トとホとの間に在る川河はイハ即ち太平洋に向ひて注ぎ、ト(ト)(ホ)以南の川河はハニ即ち印度洋に向ひて注ぐことをも悟り得べし、此の如くして後、地圖と對照參酌せば、レナ、エニサイ、ヲブ(ヲビ)の三大河の北流し、黑龍江、黃河、楊子江、の東流し、安額(ガンシユ)、インデュス二河の南流するは決して偶然にあらざ

ることを悟り得べし。又た這般大河系の流域を熟覽熟考せば、亞細亞太陸は實に三個の太平原、即ち(一)ヘ(ヘ)(ホ)以北即ち西比利亞平原、(二)ヘ(ヘ)(ト)ト以東即ち支那平原、(三)ト(ト)(ホ)以南即ち印度平原と一個の太高原即ち(四)(ホ)以西に在るイラン高原(波斯亞細亞土耳其の一部)より成立することをも悟り得べし。是に於てか亞細亞洲の地勢山河の大體は一見して瞭然たらん。次ぎに亞細亞洲の氣候たるや(一)西比利亞部は寒冷に、(二)支那部は溫暖に(三)印度部は炎熱に(四)イラン部は寒熱共に極端なることを略記し、以て各部なる動植物の差異あることを略量し、而して各部なる物産と人民の職業に差異あることを略定すべし。



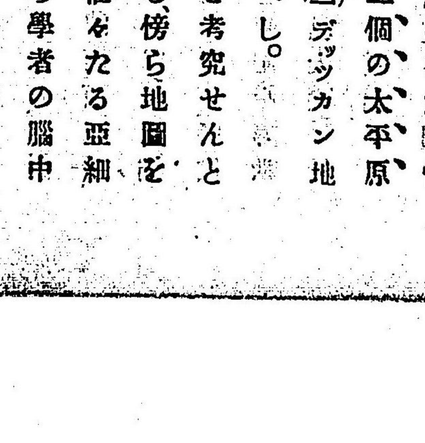
次ぎに亞細亞洲の人種たるや(一)西比利亞部

には劣等黄色人種の棲居し(二)支那部には高等黄色人種の棲居し(三)印度部にはカウカシャ人種の接居し(四)イラン部には黄色人種カウカシャ人種の雑居することを略記し而して此の如く地勢に大區別あるを以て人種の配布にも亦た此の如く大區別あること偶然にあらざるを悟り得べし。

又た亜細亜洲人民の宗教たるや(一)西比利亜部即ち西比利亜人民は薩満教(支那に附近せる部分には佛教を信奉する者あり、本國露西亜に附近せる部分には希臘教を信奉する者あり)を信奉し(二)支那部乃ち本部、蒙古、西藏、朝鮮、日本、安南、暹羅、緬甸、諸國の人民は佛教を信奉し(三)印度部即ち印度人民は婆羅門教(佛教を信教する者もあれども婆羅門教を信奉する者に比較すれば殊に少し)を信奉し(四)イラン部即ち中央亜細亜諸國亜富汗斯坦、比爾智斯坦、波斯、亜拉比亜及び亜細亜土耳其一部の人民の回教を信奉するも亦た偶然にあらざることを自ら悟り得べし。

又た各部の地勢、氣候、生物、人民の職業、人種、宗教の殊異せる所を相對照比較すれば、因りて以て各部の個々特別なる開化(一)西比利亜の劣等なる開化(二)支那の開化即ち支那本部より蒙古、西藏、朝鮮、日本、安南、暹羅、緬甸の諸國に擴布せる開化(三)印度の開化即ちサンスクリットの開化(四)波斯的、亜拉比亜的の開化即ち回教的開化の發達したることを怪むに足らざるを悟り得べし。

獨り大陸のみならず箇々の邦國が地理を悟了せんにも、亦た前陳の諸解説を適宜に用應するに過ぎず。例へば印度の地理を考究せんと欲せば先づ印度の形狀を第八圖イロハニの如く略定し、而してハニはベンガル灣に瀕し、ロニは亜拉比亜海に瀕するとを略記し、等て所在の諸山脈ヒマラヤ、ヒンヅークヒシ、ヴィンデャ、西ゴーツ、東ゴーツの位置を略畫せよ、此くせば國内の大河たるインダス、ナールバダ、ゴダヴァリー、安額の水源、灌域、河口等に關する諸般は自から悟り得べし。而して又た印度は二個の太平原(一)安額インダス河の溪谷(二)デッカン地第



第八圖

即ち此の如くして亜細亜洲の地理を考究せんとせば前陳の諸解説と對照參酌し、傍ら地圖を按じて幾多の思考を費すべし、茫々たる亜細亜太陸の形勢も一日にして輒ち學者の腦中に納め入ることを得べし。

(五) 支那地理考究の方針

黄河の河系十萬方里、楊子江の河系十二萬五千方里既に日本國の面積に九倍し、歐羅巴の列國、瑞典及諾威丁抹、埃地利及匈牙利、獨逸瑞西、伊太利、和蘭、比耳義、佛蘭西、西班牙、葡萄牙と地中海中の諸島嶼の合計面積に等しからんとす。"大或は支那を以て亞細亞太陸の一偶に偏局せる一邦國となす而かも廣袤の絶大なる、戸口の饒多なる、歴代治亂興廢の頻劇なる之れを歐羅巴太陸全體と比擬する何ぞ過當なりとせんや春秋左氏傳戰國史、三國史、南北史、五代史に於ける列國の分立抗衡は猶ほ歐羅巴太陸に於ける列國の分立抗衡に匹似す。唯だ支那の歐羅巴大陸の如くに長へに邦國個々に分立せずして遂に一邦國を構造するは、前者は山嶺交錯縱横して其間に溪谷を開き此所に個々邦國を發達して自から分立自治に便宜なるも、後者は莽々たる黄河、楊子江の兩河系、無邊無涯、遂に一統渾融に利する所あるを以てのみ。夫の數邦國に分立するを以て西洋史に重を置き、一邦國を構造するを以て支那史を輕看するは畢竟瞎々の徒のみ。

支那は黄河、楊子江の兩大河系延縁するを以て一統渾融に利あり、而かも這般の江河や、實に南北に流れずして東西に馳る。蓋し南北に流るゝ河は、熱氣候の地方と寒氣候の地方とを結串し、異物産の間を連絡し能く利害の衝突を調訂するも東西に馳る河に至りては然らず、唯だ同一の氣候同一の産物同一の利害を包容し得るのみ、遂に異風土の間を結串連絡する能はず、爲めに利害の衝突を調訂すべからず。故に支那は歐羅巴太陸の如くに長へに分立せずして遂には能く一邦國を構造するも機に臨み變に應じて黄河楊子江兩河系の間に利害の衝突を來たし歴史上の破綻を時々瞥見す。支那史を立論せんとせば先づ兩河系の風土を稽査せざるべからず。

黄河は支那北方の代表者なり、所謂「北方之强者居之なり。楊子江は南方の代表者なり、所謂「君子居之」なり。雁度寒雲、馬嘶古道、崇山峻嶺、徒開大陽、曠野平林、煙火攢簇、樵斧耕鋤、隱約在目」と是れ北地の太觀なり。「蝦房蟹舍、採菱捕魚小舟、蕩漾來往、濃陰之下、柳堤花塢、盡在春光蕩馹之中、水鄉人家、桔槹起、牛背笛聲、兩々歸來」此耕田鑿井餘風と是れ江南の風物なり。黄河河系は窮虜の如き天蒼々として四際に低れ、極目千里、高粱を植ゑ、日は高粱より出でゝ高粱に沒し、大行の山色微かに地平線を限りて餘嵐遠く中原を照らし、會、白楊の水畔に班點するも、他に植物の看るべきなく、風物單調一樣、時に之れを破るものは土人の穴居のみ、氣候は純乎たる太陸的にして無涯の黄風塵を

捲きて朔北より來り乾燥にして些の水分なく流水黄濁飲むべからず、又た洗滌に用ふべからず、故に百多の事物華潔ならず、清雅ならず生産は勞力の寡單なるもの耕種の簡易なるものゝみを撰擇し、生民貧窶困厄し、北部省城の殷繁は南部一府城と比すべく或は時に之より下るものあり。北部府城の繁庶は、南部一縣城と比すべく北部縣城の繁庶は、南部一縣鎮と比すべし。既に此の如く自然に逆遇せらる故に北人は意思強烈豪健にして容易に屈せず下らず、實行を主として想像力に乏しく、燕趙悲歌事を斷ずるや、爲す有らずんば遂に已まず、骨相亦た長大にして隆準肉角、眼釣り肩昂がり、面貌黄黧にして鬚髯髦々、宛として北方の強を顯表す。楊子江畔は坦々たる平原延緣すと雖も、江は古生紀地層の間を流駛し、江岸時に懸崖斗壁を見、翠巒碧峯處々に點綴して、風物單調ならず、氣候亦た和煦潤濕にして草樹鬱蓊とし、生産饒多、加ふるに流水清洌なるを以て、百多の事物華潔に家屋も雅趣多く人物瀟洒纖巧に且つ理想に富み多感多恨、色白く肉瘦せ、兩眼細く平かにして鬢髭多からず、短身にして音吐清朗なる處正に南人の眞面目を現示す。

黄河、楊子江南河系の風土や太差あること此の如し、其の個々の歴史に太差ある知るべきのみ。蓋し太塊上原人の發生地は亞細亞太陸の中央部に在り、漢族も亦た崑崙山下の祖國を出てたるも、楊子、江上流は崇巒嶮峰重疊するを以て自から之れを避け地利上輙ち黄河の流に浴ひて東下し、歴代の常王太低は黄河代系に奠都するを見る。

代	都	所在	黄河河系
三皇 大昊伏羲氏	陳	河南省陳州府	蔡河の岸に在り、蔡河は淤黄河に入る
三皇 炎帝神農氏	曲阜	山東省兗州府曲阜縣	泗水の南、洙水の北
三皇 黄帝軒轅氏	涿鹿	直隸省順天府涿州	拒馬河の右岸に在り、拒馬は白溝河に入り兩淀を經て白河に入るも、古地圖を按ずれば這般の諸河は皆黄河の河系に屬す
五帝 少昊金天氏	窮桑	山東省兗州府	泗水の傍近
五帝 顓頊高陽氏	帝岳	直隸省大名府顓頊城	黄河古金堤の傍近
五帝 帝嚳高辛氏	亳	河南省河南府偃師縣	伊河の岸に在り、伊河は洛河に入り洛河は黄河に入る
五帝 帝堯陶唐氏	平陽	山西省平陽府	汾河の左岸、平水の北
五帝 帝舜有虞氏	蒲坂	山西省蒲州府	嬀汭水の傍
后氏	安邑	山西省解州安邑縣	東永河の傍
段	亳	河南省歸德府	黄河、楊子江の間、淤黄河の南に在り
周	洛	河南省河南府洛陽縣	洛河の北即ち左岸
秦	咸陽	陝西省西安府咸陽縣	渭水の北即ち左岸

漢	西漢	長安	陝西省西安府長安縣
	漢	洛	河南省河南省洛陽縣
三國の一	魏	洛	河南省河南府洛陽縣
	西晉	洛	河南省河南府洛陽縣
	隋	長安	陝西省西安府長安縣
	唐	長安	陝西省西安府長安縣
五代	後梁	大梁(汴)	河南府開封府
	後唐	洛	河南省河南府洛陽縣
	後晉	汴(大梁)	河南省開封府
	後漢	汴(大梁)	河南省開封府
	後周	汴(大梁)	河南省開封府
	宋	汴京(大梁)	河南省開封府
	金	汴京(大梁)	南河省開封府
	元	大都(北京)	直隸省順天府
	清	北京	直隸省順天府

渭の南即ち右岸

前漢は四の方長安に都す故に西漢の名あり、後漢は東の方洛陽に都す故に東漢の名あり

東漢の末、魏の曹氏、呉の孫氏、蜀の劉氏、三國鼎立し、呉は楊子江下流の建業に都し、蜀は上流の成都に都す

前晉は洛に都す故に西晉の名あり、後晉は楊子江下流の建業に都す故に東晉の名あり

西晉亡びてより隋に至る二百七十二年間、東晉、宋、齋、梁、陳の五代興り皆楊子江畔の建業に都し、黄河河系の建都史は此間中絶す

唐亡ぶる年、後梁に却かされ都を洛陽に遷す

黄河幹流の南即ち右岸、二世十七年にして亡ぶ

四世十四年にして亡ぶ

二世十二年にして亡ぶ

二世四年にして亡ぶ

三世十年にして亡ぶ

床、汴に都する百六十五年、高宗の時、金人汴に陷る、帝南渡して楊子江下の楊州に幸し更に臨安に幸す、故に高宗以後は南宋の名あり

金、初め上京(今の會寧)に都す、後其の北僻に在るを厭ひ燕京(今の北京)に遷す、尋で蒙古の北より攻め來るや、更に南遷して汴に都す

黄河河系にあらざるも、黄河河系に延縁せる平原上に在り

即ち是れなり。蓋し黄河河係に王覇歴代の奠都せしは南方に關する經營は比較的に少きも北狄に對する用意苦心は長へに纒綿し勢ひ北方に據在せざるを得ざりしもの即ち是れなり而かも黄河河系に據在せし王覇歴代や其の外界の現象に風動薫化せられ規模雄大、局勢壯濶英摯の氣其の間に磅礴し眞個に俊鶻の雙翼を張りて朔北の雲を拂ひ汪々たる黄河の太平原上を獨り横絶するの觀あらしむ。乾坤を一轉して楊子江河系に觀んか。楊子江上に奠都せし者は、

代	都	所在	楊子江河系
三國の一 呉	建業	江蘇省江寧府	楊子江幹流の南即ち右岸に在り楚威王(戰國)金陵邑を置き王氣あるに因り金を埋めて之れを鎭す
東晉	建康	所謂(南京)	六朝
南朝 宋	建康		奏勇金人を壅む、故に金陵城の稱あり
齋	建康		舊城は秦淮を去る一里。秦淮口に桃葉渡あり。石頭山は江に臨む
梁	建康		支那の文華風流の中心となり、六朝の名區勝蹟多く、行人をして低徊斷腸に禁へざらしむ
陳	建康		長髮賊の兵燹に罹ると雖も、南朝四百八十寺、多少の樓臺は尚ほ煙雨の中に隱見す
南宋	臨安	浙江省杭州府	錢塘江口に在りと雖も、楊子江より延縁せる沖積層の上に建つ
明	應天府(南京)	江蘇省江寧府	明、都する六十六年、太宗の永樂十九年、順天府(北京)に遷す

即ち是れなり。蓋し揚子江河系に奠都せし王朝歴代や其の外界の現象に風動熏化せられ規模綺麗局勢清隠、江南春曉の曲を聽くが如く着色秋江の書幅を展ふるに似所謂「六朝の雅致」「昔時の清談」「南朝の風流」「南宋の纖巧」「明代の瀟洒」皆此所に在り、夫の建安七子の文、駢儷四六の體、此間に啓發せしもの自然たり。君や若し夫れ揚子江河系歴史の眞面目を悟了せんと欲せば、月明揚洲の畫樓上、水晶簾外に琵琶を彈く人に向ひて問へ、琵琶を彈く彼女自身こそ揚子江河系歴史の權化なれ。

嶺南行盡幾層層。　氣味偏如退院僧。　聽得吳娘歌水調。　春潮柔櫓入金陵。　秦淮舟中

黄河河系と揚子江河系と幾多の風土、歴史に太差あること此の如し、故に兩々の間動もすれば輒ち相容れず、北人南人と相抵排し、破綻又破綻せしもの偶爾にあらず。既に然り支那二十二代歴史の多分は北人將た北狄と南人との間なる確執史なり。夫の「曹足以記姓名而已、劍一人敵不足學、學萬人敵」と乃ち吳中の兵八千人を擧けて秦を攻めたる項羽の英爽、將た「倉卒蕪蔓亭豆粥、滹沱河麥飯」を嘗め荊天棘地の間を衝きて漢の遺業を恢復せし光武の俊邁より、張睢陽の齒、顏常山の舌、胡澹庵の文、岳飛の武、文天祥の節、方孝孺の義、鄭成功の俠に至るまで、畢竟是れ皆北人將た北狄と南人との確執

中に發せる意氣に過ぎず。然れども黄河河系の沖積平原は宜ちに揚子江河系の沖積平原に連り、他の山脈縦横して列國獨立に適宜せるが如くならず。要するに山は界國分治を促すも、河は遂に境域藩籬を作さず能はず、夫の陳の子範が「長江天塹豈能飛渡」とて只管揚子江に恃頼し、隋兵の來るを冷笑せしも、言未だ畢らざるに隋の將軍賀若弼は廣漢より江を渡り、韓擒虎は横江より夜渡り、進みて陳の都建康南京に入り陳主自から妃嬪と井中に投じて國亡び、隋遂に南北朝の列國を混同して支那を一統せしが如き即ち是れ。隋天下を獲るや通濟、永濟の兩渠を開き、南は揚子江の南より北は黄河の北に到り、即ち江河を縦絶して南より北に流駛する人爲の一大河系を鑿ちたるが爲め江河兩系は自から連絡し來り、茲に愈々一統的の趨向を致しぬ、特に隋の南北兩派の學を併せ採りたるが如きは最も江河兩系開化の統一を促したる所、蓋し東漢の鄭玄は孟子以後の大儒と仰望されたる者、後魏の王肅起りて之と拮頑するや、學風南北兩派を區劃し、南北朝の頃に至るや、北方には深厚縝密なる鄭玄等の學盛行し、南方には簡易綺靡なる王肅等の風自から好尚に投じ、爲めに南北間の思想界に巨溝を劃し黄河河系と揚子江河系と人々の習氣趣味を頗りに分隔せしも其の勉めて南北派を併せ採りたるは南北を連絡する大運河の開鑿と共に最も一統の氣運

を呵成せしもの。唐興るや、隋の遺業を繼承し乘ねて新鋭創業の風雲に際會し、愈〻益〻一統の氣運を勃發し、太宗英邁の資は早くも思想界の一統は即ち天下を一統する第一策たるを看破し首として南北學風の折衷を計り、孔穎達顏師古等に命じ五經正義を撰ばしめ、易は王弼の註書は孔安國の傳、詩は毛萇の傳、禮は鄭玄の註、左傳は杜預の註を取り併せて諸家の疎釋を加へ、天下をして據る所を知らしめたるより思想界の根柢茲に鞏立す。後幾何ならず、陳子昂、楊子江の上游に生れ黄河河系に倦留し、唐初の四大詩文家(王勃、楊烱、盧照隣、駱賓王)が南文(六朝以來の駢儷四六文)を綴るを屑しとせず、憤然獨り自奮し、北人の思想、周漢時代の古文、即ち黄河河系の思想を此間に注入せんとして未だ果さず、李白、楊子江河系の上游に生れ、黄河河系に來りて發達し、其の詩たる才分高く、趨向正く能く建安以後の綺麗を斥攘し、八代の衰を起すを以て自から任じ、韓愈退之江河兩系の中間地に人と爲り、淮南人を以て黄河河系の長安に上り、雄厚博大の才を揮ひて古文を復興し、柳宗元(子厚)黄河河畔より起りて之れと志を同うし剡意厲行以て思想界の中正を計りき、是より先き音樂の如き、太宗の時、祖孝孫出てゝ南北の兩樂を折衷し且つ古樂を酌取して大唐の雅樂を制定し、書風も亦た虞世南歐陽詢、顏眞卿、柳公權、李北海の徒起りて能く南北兩派を包容し、別機軸を出して各〻一家を作し是に至りて有形上に無形上に、黄河河系と楊子江河系との渾融一統は斐然として大成す。蓋し四千年の歴史中、江河兩系の微妙に調和神契して一團となり一國家となり一社會となりたるもの唐を以て第一に推ず。唐亡びて五十二年五代列國の亂あり、梁、唐、晋、漢、周、北漢は黄河河系に起り、吳、前蜀、楚、荆南、後蜀、南唐、湖南は楊子江河系に國を建て、群雄所在に割據し、虎呑狼噬江河兩系の大破綻を來す。宋興りて五代列國を一統し、暫らく江河兩系を渾融せしも、長へに之れを保全するの大力なく、北狄たる契丹、金元の爲めに交も〳〵窘蹙せられ、國亡びて、元之れに代はり、楊子江河系の民人は屏息して生氣なく、詩人の金陵(南京)を過ぐる者「玉樹後庭花不見、北人租地種茴香」の感懐あり。既にして明、楊子江上より起り、北狄たる元を倒し、稍江河兩系を一統せしも僅に兩系の破綻を彌縫するに過ぎずして眞成に渾融し得ず、文物特に見るに足るものなく、後遂に北狄たる清に亡さる。清國を建つる今に二百四十年而して遂に江河兩系の混同を大成せず、將來黄河河系の露西亞的となり、楊子江河系の英吉利的と北成するや未だ知るべからずとなす。「支那史」を立論し了り是に至り慨然筆を擱き西望して太陸將來の風雲を窺ふこと良久し。

(十八) 歐羅巴地理考究の方針

【南歐陽詢、顏眞卿、柳公權、李北海の徒起りて能く南北兩派を包容し、別機軸を出して各〻

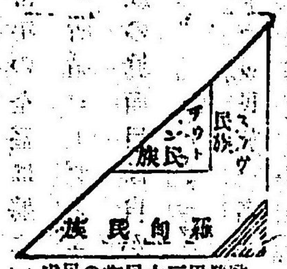
先づ歐羅巴大陸を西洋婦人なりと假定し、イベリヤ半島(西班牙、葡萄牙は頭部、ピレニー山系は頸、佛蘭西、白耳義、荷蘭は胸部、英吉利は右手を伸べたる狀、丁抹、獨逸、墺匈帝國、バルカン列國、土耳其は腹部、露西亞は洋袴を履きたるものと想像すべし。更に想像を逞くせば、葡蘭牙は頭(西班牙)を被る所の帽子、佛蘭西のブレターニュ半島は肩、愛蘭は右手(英吉利)の上に捧げたる物品、シシリー島は左手(伊太利)を伸べて把らんとする物品、瑞典及那威は足を高く後に蹴上げたる所と看做すべし。又地圖と相對照するに當りては歐羅巴の半島海角、灣、島嶼の特に多々なることと即ち海岸線の長さことをも能く〳〵參考し以て船舶交通の利便を大に誘致し、引き、て物産の交換より言語、技術、思想の交換を大に便利にし、有形無形共に彼此の交通交換を資け以て個々の開化を甚だ促したることを熟考するを要す。

歐羅巴各國の人情風俗

歐羅巴洲各國の人情風俗を詳知せんとせば、先づ各國の民族、文明の由來を考究せざるべからず。凡そ歐洲所在の白皙人種を大別して三民族となす、(一)羅甸民族、(二)チュトニック民族、(三)スラヴォニック民族是れなり。

○羅甸民族

羅甸民族は歐洲の南部に居處する者にして、伊太利、比耳義、佛蘭西、西班牙、葡萄牙、及び羅馬尼大半の人民實に之れに屬す。羅甸とは羅馬の一名にして此等國民は羅馬の開化を受納し以て文明の域に進歩せしものなり。然れども羅馬人なるものは、他國を征服し掠奪し以て大國を創成したる人民なれば自から貴族、軍人跋扈して平民の權力絶えてある無く上流社會のみ驕奢を極め、漸く浮華輕薄なる風俗を化成したり、而して歐洲南方の諸國は氣候の和煦にして温暖なる、空氣の清淨にして透明なる、花鳥の優美にして艶麗なる此等圍外物の感化はさなきだに其の人民をして小說的戲曲的に素養し、以て羅馬の開化を播種するに業既に好田地となり居ける折柄、忽ち羅馬の開化の輸入に會ふ、焉んぞ發達せざらんや、其の人情、風俗、宗教、政治、製造品も自から羅馬的即ち羅甸風なること怪むに足らざるなり。



歐羅巴三大民族の居處

故に羅甸民族諸國人民の性情は浮華、輕薄若くは奢侈、懶惰なり看よ佛蘭西人何ぞ浮華、輕薄なるや、西班牙人何ぞ奢侈、懶惰なるや。故に羅甸民族諸國の宗教は理窟少く仰々しき儀式と飾り付け品杷の賑かなるものを愛好せり、故に此等の國民は皆な基督

敎即ち天主敎を信奉す。

故に羅甸民族諸國の政治たる、時に或は君政となり、時に或は民政となり、時に或は貴族政治となり、時に或は僧侶政治となり、國中常に騷々しく革命一揆比々相踵げり。

故に羅甸民族諸國の製造品たる、大概は奢美、榮耀品にして人性必需のものにあらず、酒類、玻璃細工、敷物、花瓶、粧飾具(殊に婦人社會の流行物等)の著明なるものは皆な此等の邦國より出づ。

此等の邦國は當初激烈なる感情に刺激せられ、盛んに四方を征伐し或は發見し、或は探檢し、或は植民し、絶大の版圖を所有したるも、今日に至りては殆んど悉く之れを失ひ、當年の全盛は將に影を收めんとす。西班牙人、葡萄牙人を看て知るに足れり。カエザル(所謂シーザー)、ナポレオンは此の民族中の豪傑なり、其の言行錄を一讀せば、羅甸民族の眞面目は自から了解すべし。

○チュトニック民族

チュトニック民族、一名チュトン民族は歐羅巴洲の中部以北に居住する者にして、英蘭、獨逸、荷蘭、丁抹、瑞典、那威の人民實に之れに屬す。此等邦國の氣候は羅甸民族の邦國に比ぶれば、寒冷にして生物の發育も自から遲緩に且つ物產の種類も亦た寡少なり。

故にチュトニック民族諸國人民の性情は忍耐、勉强、質朴、節儉にして、浮華、奢美を事とせず力めて生產經濟に周旋す。故に其の意匠も緻密に自から數理的にして、羅甸民族の小說的戲曲的に反對す。

故にチュトニック民族諸國の宗敎は論理にも協ひ、仰々しき儀式も無く飾り付け品も賑かならぬをこそ愛好すれ、故に此等國民は皆な基督新敎を信奉す。

故にチュトニック民族諸國の政治たる、變化少く、激烈なる革命も比々ならず人民各、其業に安んぜり。

故にチュトニック民族諸國の製造品たる、人生必需のものにして奢美、榮耀品にあらず、羅紗、鐵細工器械等は皆な此民族の邦國より出づ。要するに此種の民族は甚だ他人の崇敬、信用を博し、貿易、通商日に月に盛大を極む。ワシントン、ウェリントン公は此の民族中の英雄なり、其言行錄を一讀せばチュトニック民族の眞面目は自から了解すべし。

羅甸民族とチュトニック民族との大差を悟了せんと欲せば、這般二個の民族が創造したる植民地若くは新邦國の狀勢を一言せよ北米合衆國、濠太利、新西蘭はチュトニック民族の移住したる所にして、墨西哥(メキシコ)中央亞米利加、南米諸國、ニュー・カレドニヤ島は羅甸民族の移住したる所なり。此と彼と相對照せよ自から差違の其間に發見するものあり。

らん。曾て『羅甸民族の植民地とチゥトニック民族の植民地』なる一篇を起したることあり、參考の爲め之れを左に掲ぐ。

○羅甸民族の植民地とチゥトニック民族の植民地

羅甸民族の植民政略は貴族派なり、チゥトニック民族の植民政略は平民派なり。羅甸民族の植民地は好裝流なり、チゥトニック民族の植民地は營業流なり。羅甸民族の植民地には政府之れに干渉し、チゥトニック民族の植民地には人民自から事物を料理す。羅甸民族の植民地には出入の船舶に重稅を課し、チゥトニック民族の植民地には海關を放開す。羅甸民族の植民地には政府首として軍隊を派遣し、チゥトニック民族の植民地には民間の會社先づ植民を送出す。羅甸民族の、植民地には初めて寺院を建立せば、チゥトニック民族の植民地には衆議堂を創構す。羅甸民族の植民地に酒庫を設置すれば、チゥトニック民族の植民地には道路を開鑿す。羅甸民族の植民地に貴族紳商の間、人を遣りて廣大なる植付け場を興起せしむるあれば、チゥトニック民族の植民地には多數の移住牧々として田園を新墾す。之を要するに羅甸民族は植民地を裝飾し、チゥトニック民族は植民地を利用す。即ち羅甸民族は植民地を所有するが故に失費多く、チゥトニック民族は植民地を所有するが故に利益豐なり。即ち羅甸民族は間〻植民地を放棄し、チゥトニック民族は斷々乎として植民地を保守す。羅甸民族植民地の萎微として振はず、チゥトニック民族植民地の日進月歩の趨あるは固より其所たり

○スラヴォニック民族

スラヴォニック民族一名ステヴ民族は歐洲の東北部に住居し、露西亞人實に之れが代表者たり。此の民族の住所は茫寞たる無涯の平原なるを以て、自から其の性質太悠、沈毅にして深遠宏渺測るべからざるものあり。宗教は大概希臘教(政教混殽せる一種測るべからざるを信奉す。文學も幽黯にして宏渺なる氣象あり。之れを要するに羅甸民族は先鋒なり、チゥトニック民族は中軍なり、スラヴォニック民族は後殿なり。羅甸民族は業既に發達して全盛を盡くしたる者なりチゥトニック民族は現時全盛の狀況を呈出する者なり、スラヴォニック民族は今後大に發達せんとする者なり。

曾て『歐洲三民族の性情』なる一篇を起したるとあり、參考の爲め之れを左に掲ぐ。

羅甸民族の事業は花の如し、戲曲の如し、豈に遂に恐るゝに足んや。チゥトニック民族は商人なり其の腦裡は算術なり是れ亦た恐るべくして甚だ恐るべからず。スラ

ヴォニック民族に至りては其の事業花の如くならず、戯曲の如くならず、商人的にあらず、幽涼にして雄大、沈勇にして宏壮なり、因りて想へば彼のナポレオン第一の兵甲五十萬に將として露の舊都モスクワに入るや、露人輙ち此の大都府(數百年來の古都にして當時既に五六十萬の人口を有てるを焼き棄て、さしもの佛軍を大に破りたるも、西北利亞萬里不毛の邊境に鐵道を横絶せんとするも、日本國都東京の最高所なる駿河臺に東京第一の建物を築造し屋上に大鐘を釣りてあたり憚はず之れを鐘き鳴らすも、流石に其の意匠の雄大壮宏なるスラヴォニック民族の事業と云ふべけれ、露西亞は素なり其の眼中豈に六國在らん哉。

右歐洲所在三民族の區分、幷に其の性情、風俗、宗教、政治、製造物、職業等の差異あることは須らく腦中に銘すべきものとす。

以上の如くして此の太陸を前圖の如く勾の股より短き直角三角形を略畫し、而して後(一)南部即ち羅甸民族の諸國(佛蘭西、伊太利、西班牙、葡萄牙、白耳義、羅馬尼)は地勢高崇にして沼池少く、氣候温暖にして花果豐熟し自然界の百事優勝なることを略記し、(二)中部及北部即ちチュトニック民族の諸國(英吉利、荷蘭、獨逸、丁抹、瑞典及那威は地勢南部に比較すれば平垣にして池沼若くは沼の遺趾多く氣候は温和よりも寧ろ寒冷に自然界の百事は南部に劣ることを略記し、(三)東北部即ちスラヴォニック民族の邦國(露西亞)は地勢甚だ扁平にして沼湖殊に多く、氣候特に寒冷に、自然界の百事は、南部中部に甚だ劣ることを略記すべし。次ぎに(一)南部即ち羅甸民族、(二)中部及北部即ちチュトニック民族(三)東北部即ちスラヴォニック民族の個々邦國の間に宗教、政體、人情、風俗、人民の職業、製造品、物産の相各、殊異する所を能く能く悟了すへし。例へば、葡萄、牙と云へば、羅甸民族の邦國なるを以て、問はずして其の人情の浮華輕佻に、其の宗教は基督舊教を奉じ、政治上には變化騒動甚だ多く製造品は酒類、ボルト酒、マデイラ酒、葉煙品等なることを悟了すべし。又た荷蘭と云へばチュトニック民族の邦國なるを以て問はずして其の人情の忍耐節儉にして職業に勉強し貿易に力むることを悟了し、宗教は基督新教にして、政治上には變化少く、製造品は人生必須の物たることを悟了すべし、而して將來の趨勢に至りても葡萄牙は希望少く、荷蘭は愈々盛大なるものと化成するや豫知すべし。又荷蘭と白耳義とは共に相隣り共に面積略々相等しき小國にして共に地勢平垣なる方土にありながら、甲はチュトニック民族の邦國なるを以て、人情は節儉に宗教は基督新教を奉じ、言語文字は獨逸語派を使用し、職業は農を主とするも、乙は羅甸民族

なるを以て、人情は自から奢美に其の國都プリュキセル市は自から「小巴里」と稱へられ宗教は基督舊教にして、言語文字も亦た羅甸語派(佛蘭西語)を使用し、職業は工業を主とし榮耀品の製作に名あり。此等の事情を熟慮熟思し、且つ地圖と能く〳〵相對照參酌し、以て歐羅巴洲の地理を攻究せば容易に悟了する所あるべし。又た一國にして異人種、異民族の相雜居する所に至りても、各々其の人種、民族特殊の性格を保有するを以て是れ亦た容易に其の諸般を悟了し得べし。例へば瑞西の如き其の東部は獨逸民族(チュトニック民族)棲居して西部は佛蘭西民族(羅甸民族)棲居す。故に東部人民は忍耐節儉に宗教は基督新教を奉ずる者多く、言語文字は獨逸語を使用するも、西部人民に至りては東部人民よりも特に奢美に、宗教は基督舊教にして、言語文字も亦た佛蘭西語を使用せり。埃匈帝國、バルガン列國の如きはチュトニック民族、スラヴォニック民族、羅甸民族及び黄色人種の相雜居するものなれども、是れ亦た少しく考思を以てせば容易に其の諸般を悟了し得べし。

○葡萄牙史の一章

▲函嶺塔の澤環翠樓、予が居る所の隣室杉聰雨の葡萄牙都城(リスボン)所見の七絶を壁上に題く、曰く

港頭林立別帆稀。十里江灣如括囊。步岸秋濤晴尙怒。海門直對太西洋。

▲括嚢の如きの江灣(Estuary)是れ實に西歐羅巴地方の貿易に大造せし所因なり、葡萄牙のリスボン、ヲポルト、佛蘭西のボルドー、ナント、ハーヴル、英蘭のロンドン、ニューカツスル、リヴアプール、蘇格蘭のグラスゴー、愛蘭のダブリン、白耳義のアンヴェル、荷蘭のアムステルダム、獨逸のハムブルヒ、ブレーメン等、孰れも括嚢の如き江灣にあらざるはなし。江灣は太平洋及海と內陸の水及內陸とを連絡するものなり、一言すれば海陸の要衝なり、故に貿易品の呑吐は無限の利便を與ふ。加之、太洋を長へに航行し來り、船底に海草、牡蠣、介、海蟲など生じて船底の木材、銅材、鐵材を霉蝕するが故に頓に淡水多き江灣に入りて錨泊するや自から死滅するを以て天然の驅除法輒ち行はる、是れ船頭の保衞上、江灣の海灣に優遇する所因となす。葡萄牙の海運貿易發見探檢植民、布教に往時大發達をなしたるは、江灣の多きこと實に其の源因の一に屬す。

▲日本には江灣なし、是れ貿易上、船艦の保衞上、大弱所たるを免れず。

▲葡萄牙の東方一帶は悉く大國の西班牙に包まれ、北方も亦た然り、其の東と北とに向ひて伸ぶ能はざるは固より然る所。

▲西は則ち如何、海門直對太西洋なり、乃ち葡萄牙の西に伸び且つ南に伸びたるものは地形の自然なり、西に伸びて對岸なる南米のブラジルに大帝國を恢弘し、南に伸びてマデイラ群島、アゾールス群島を發見し、亞弗利加の西端ヴェルト岬を廻ぐり、遂に喜望峯を發見し、前みて印度洋に入り、印度に到り、支那に到り、竟に日本の西陲なる、種ケ島に到り、到る處に領土を擴げるたるもの偶爾にあらず。葡萄牙の西方一帶太西洋に瀕したるは、其の萬里の波濤を開拓せし原因の一なり。

▲葡萄牙の土を世界に拓きたるもの此の如し、而して今や何の狀かある、前世紀の初年、早く既にブラジルを失ひ、國勢日々に蹙まり、其の初めて日本に到りたる歐人とはなり果てぬ、是れ明治二十五年葡萄本にて初めて治外法權を撤去されたる歐人とはなり果てぬ、是れ明治二十五年葡萄牙は、日本に公使館を設置するの暇に堪へず之れを撤去せしかば、日本は其の結果として葡萄牙の日本に於ける治外法權を撤去することゝはなりしなり。

▲喜望峯の回航者、東洋の發見者、ヴァスコ・タ・ガマの四百年祭は數年前リスボン府に擧げられれ、而て横濱グランド・ホテルの傭人にガマなる葡萄牙人あり、同年頃に横濱停車場の待合室に日本婦人を辱めんとしたりとて、執られたり、四百年前のガマ四百年後のガマ、同じく葡萄牙人にして其の東洋に於て爲す所の行業此の如く差異す、宛として葡萄牙の東洋に於ける勢力消長史の小粉本なり。

▲葡萄牙の遺影、今や日本に在るもの如何、曰く金平糖(葡語Confeito)の製造殘りて兒童を喜ばしむると、卑陋ながら雪隱(葡語Setin)の殘れると其の副領事館の東京靈南坂なる予が家の下方なる谷間靈南坂と裏坂との間にある窪地)に殘るあるのみ。

▲葡萄牙の東方に殘れる所領は印度の臥亞、支那の澳門、南洋のチムール島のみ、而して澳門、チムール島賣却の報は數ば耳にする所。

▲葡萄牙の實業は悉く英國資本家の掌裡に歸し、商業、工業、航海業、鑛山業、皆な英人の占むる所となれり。

▲當年全盛の葡萄牙、何にが故に此く衰廢せしものぞ、曰く(一)大發見又開拓の餘勢に乘じ、國民の得意となり奢侈となり放埒驕肆となりたる事、(二)頑迷なる宗教頑迷なる教育の國民の頭腦を固定せしめ、其の啓發を阻碍せしめたる事、(三)前世紀に於ける歐洲各國の科學的應用の大氣運に後れ、製造工業の發達に後れを取りたる事、(四)國內に於ける私黨の軋轢の爲めに國外に伸ばす勢力を蹙縮せしめたる事、(五)亞弗利加其他劣等なる人種と雜婚して葡萄牙人を雜血且つ凌夷せしめたる事となす。

▲葡萄牙の現勢此の如し、然れども亞弗利加に於けるモザムビックの大領土は將來最

も希望を屬すべき所、而して葡萄牙たる曾てカモエン(歐洲希世の詩人)、ガマ(大航海家)、ザヴエー(大傳道家)の如き世界の大材を孕み出たる國民なり、其の將來再興の期ある或は待つべし、而かも葡萄牙や近代期の教育、科學的應用の氣運を容れずんば到底再興し得ざるを知る。

以上の件々を熟思熟考したらんには、邦國都邑の將來の趨勢は容易に豫知し得べし。曾て『支那外なる第二の上海』なる一篇を起したることあり、參考の爲め之れを左に掲ぐ。

○支那外なる第二の上海

佛人安南を取り、銅柱に銘し、紅河(Sana koi.)滄瀾江(Mekong 又 Cambodia River.)の兩溪谷を經略して、將さに支那南部と內陸貿易の衝路を開通せんとす、英人豈に勃然たらさらんや、是に於てか故らに師を起し(伊蘇布物語の「狼と小羊との譬の如き理由を以て」)緬狄一軍、緬甸に入り阿瓦(Ava.)の舊都、馬德林(Mandalay.)の新京を陷れ、國王を擒にして逆境の間に遠竄し、當時の清況は白樂天が長恨歌中なる「漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲の二句を以て全班を蔽ふべし)、英領緬甸と本國との境界線は敢

へなくも抹殺されて、彼の「東接眞臘西接東天竺西南暹和羅南屬海北南詔地長三千里廣五千里東北袤長隣羊苴咩城凡屬國拾八」と、さしもに繁華と全盛を極盡せし驃緬甸の全部は英人の掌中に入りぬ、之れを明治十八年十一月の事となす。なり、加之ならず、其の緬甸を征服したるは佛人が安南を征服したる返照なり、佛人が支那南部と內陸貿易の衝路を開通するの企圖を先づ制せんとするを以てなり、彼等豈に躊躇せんや。是に於てか大金沙江(Irawadi)清人は怒江と稱へ又た直譯して依拉標底河と云ふ)を沿ひトングに到る一百七十里の既成鐵道を延長し馬德林より新街(Bhamo.)の間稻花黃雲を吐き綿糸白雲を吹き麻粟樹翠にして滇らんとする處を貫通し、夫れより一は西北に折れて阿薩密(Assam. 清人は亞山とも稱ふ)に入り印度鐵道の計畫線と相連絡し、一は暹羅王國の西北部に入りジムメ(Ximme)に到り、此所より一線は南伸して暹羅國都盤谷市に達し一線は支那の西南境なる雲南省普府(Peoul.)の思茅廳(Semow.)に走らしめんとす而して英人は業既に金沙江の右岸ブローム府に到る一百七十哩の鐵道線をも敷きたり、且つや印緬、馬德林の間は兩極より工事に着手したりと、曠世の事業なる哉。

緬甸鐵道は遂に成就すべきことなるを確信す、何を以てか確信する、曰く英人即ちチャトニック民族の事業なるを以てなりと。想ふにチャトニック民族の意匠は雄大なり、然れども精緻なり、冒險流なり、然れども老實なり、其の計畫の如きは深夜沈々たる間に千思萬考し、東天將さに白からんとするや他人に先ち立ところにして着手し、崎嶇間關、竟に免く其の志す所を果たす、緬甸鐵道にして此の民族の手に授けらる、豈に成就せざらんや。世人若し英人が蓄意の深遠なるを怪疑するあらば請ふ郭嵩燾氏が倫敦駐在の清國公使たりし際、李中堂に上りたる書を一閲せんか。

去冬上流を經、格致書院に於て一幅火輪車道圖を見るに、印度より直ちに雲南に通じ、一は臨安に出て、東し廣州に趨き、一に楚雄に出て、北し四川に趨き、折て漢口に達す、一は廣州より嶺に循ひ湖南に出て、漢口に會す、又乃ち南京より鎭江に至りて東し、上海に出て、以て京師に達す。一枝は折て寧波に出て、以て京師に達す。之を見て怪咋す、念ふ雲南甫めて通商し、即ち火輪車路に簪及するなりと、倫敦に來るに及び、此圖を得る已に十餘年前より出るを知るなり、蓋し西人蓄意の深き至らざるなきなり。印度の火輪車機かに阿薩密に及び、中國に通ずるや、山南山北兩道を分ち北道は阿薩密より直ちに依拉機底河に抵り、南道は緬甸を繞出し折れて東北し、依拉機底河に會して以て蠻允に達す、豫算此の如し、凡一二年の後、兩處鐵道必ず興修する者とす。

緬甸鐵道の結果何事ぞ緬甸內地の土產も暹羅國中の物品も、阿薩密所在の石鹽石油、石炭も、雲南省中の金、銀、銅、鐵、氷銀も、二千餘万の人口を保有せる四川一省の諸雜貨も、天然無重の利源を未だ開發せざる貴州地方の蓄藏も、北は溫帶中より、南は熱帶圈裡の物產に到るまで、這般鐵道に賴り、大金沙江の溪谷を南下して其の江口に輻湊すべけん。大金沙江口の傍に港頭あり、ランゲーン(Rangoon)と云ふ、海を距ること三十七哩、江水汪々として幾多の大艦巨船を錨泊せしむべく、モンキー・ポイントの突角は風波を遮斷すべく其の所在は坦平にして百万の戶屋を建造するに足れり、是れ豈に第三の上海たらざらんや。

後印度所在なる歐洲各國の植民地にして今後能くランゲーンと競爭し得るものを佛領の柴棍(サイゴン)港となす。然れども柴棍は竟にランゲーンの競爭者たる能はざる者なり、何を以てか確信する、曰く羅甸民族の殖民地なるを以てなり。想ふに羅甸民族は小說的なり、戲曲的なり、通商貿易の如きは其の最短所なり、チャウトニック民族の最長所は、羅甸民族の最短所なり、自己の最短所を以て他人の最長所と相競爭せ

んとす是れ如何んぞ能くすべけんや。柴棍は佛領なり、羅甸民族の殖民地なり、ラングーンは英領なり、チウトニック民族の殖民地なり、柴棍の遂にラングーンに數歩の讓與する豫言すべきなり、況んや柴棍と支那界境線との距離はラングーンとの二倍するをや、ラングーンは今後必らず後印度所在なる歐洲各國の諸殖民地に覇たるべけん。

料るに中央亞細亞なる英露の長道線が相連絡するも今より年を期すべく、羅甸鐵道の竣成も亦た今より數年を出でざらんとす、悟了せよ、日本支那の旅客は、邏羅國都なる盤谷市若くはラングーンに上陸せば、汽笛一聲鐵車夢を載せて輒ち歐洲の諸大都に到るべきことを、日本の貨物も亦た這般鐵道に頼りて以て直接に前後の南印度、中央亞細亞に運搬され得べきことを、日本の水產物も亦た頼りて以て支那の西南部に入り込み得べきことを。語を寄す浦潮斯德港に注目し西比利亞鐵道工事を喃々する人士よ、請ふ轉一轉してラングーン港に注目し、緬甸鐵道工事を喃々せよ。緬甸鐵道チウトニック民族の鐵道、ラングーン、第三の上海宜しく予鑒の腦裡に銘銘すべき哉

此の一章は明治二十二年七月中、起草する所に係る後二年半、支那新聞は報ず、柴棍は旦々に衰頽し、商館、銀行の倒破するもの甚た多く、而してラングーンは愈々繁盛に赴くと、又云ふ、緬甸鐵道の工事は近時愈々進行し、今や雲南省の思茅邇を距ること三百哩の處まで竣工し尚ほ前途も數段中なり。

(七) 亞弗利加洲、太洋洲、南北亞米利加洲地理考究の方針

亞弗利加洲太洋洲亞米利加洲の自然地理を考究するには前二章に於て亞細亞洲、歐羅巴洲の地理を考究せし如く地圖と相對照參酌し、學者の腦中にて適宜に外形を略定し、即ち亞弗利加、北亞米利加、南亞米利加は各、南方に斜傾せる三角形、濠太利は長方形と略書し、而して後熟慮熟考するところあるべし。次ぎに人事地理を考究せんとするには、チウトニック民族の移住して成立せし邦國及び植民地とは、諸般に大差あることを悟了すべし。例へば喜望峰植民地濠太利の各州、新西蘭、北米合衆國はチウトニック民族の移住せし處なり、故に生產貿易繁盛して人情も質朴活潑に、宗教は基督新教を信奉し、政治に變亂少く將來の趨勢も亦多望なることを悟了すべし。之れに反してニューカレドニヤ、墨西哥、中央亞米利加の各國、南亞米利加の各國は羅甸民族の移住せし處なり、故に生產貿易繁盛せず、人

情浮華輕佻にして宗教は基督舊教を信奉し政治に變亂多く將來の趨勢に至りても希望少きことを悟了すべし『歐羅巴の三大民族』の項を能く參考して應用すべし又た地圖と相對照するに當りては近世紀以來歐羅巴各國の植民政略甚だ熾盛にして各國の占領地月に歲に增加することを記憶せざるべからず南亞米利加三洲は往時羅甸民族(西班牙、葡萄牙、佛蘭西とチュトニック民族(英吉利)との競爭上の舞臺なりき後此の舞臺は太洋洲に向ひて移動し太洋洲はチュトニック民族(英吉利、獨逸)と羅甸民族(西班牙、佛蘭西、葡萄牙)との競爭上の舞臺となりしも羅甸民族は二舞臺共に失敗の狀を呈し更に新舞臺たる亞弗利加洲に競爭し同洲の分割を悉く了りて今や最新舞臺たる亞細亞の沃野即ち支那に競爭中なり然れども支那に於ては歐洲の三大民族の外にチュトニック民族の新支屬たる北米合衆國と白晳人種以外なる日本も亦た競爭者の間に交はるを以て支那は第二十世紀に於ける世界列國競爭の大舞臺なるべし

亞米利加所在のチュトニック民族諸國と羅甸民族諸國と相殊異せるは其の人種の殊異なるに因るもの外更に他の源因あるなり嘗て之れを立論せしことあり參考の爲と左に掲ぐ

一西班牙人、モール人と國內に鬪ふこと七百年、西班牙人は悉く軍人武夫冒險者と化成し、覇氣富物、復た商人、農夫、工匠にあらず、而してモール人を國內より驅逐するや、平和的の諸般事業未だ些も興起せざるに閭龍(コロンブス)の發見に依り、新世界の盛觀は突如として眼前に現はれ來り、戰勝の餘豪勃々たる西班牙人は相率ゐて新世界に入り、武力を以て土地を占略し遂に今の墨西哥、南亞米利加諸邦を形成せり若し夫れ北米に至りては、勤儉節約なる和蘭人移住して新アムステルダム(今の紐育(ニウヨーク)州)を形成し、信仰の自由を以て死よりも重視する英國の清教徒(ピューリタン)移住して今のマサチュセッツ州を形成し、博愛寬容なる英國のクエーカー教徒移住して今のペンシルヴェニヤ州を形成し、グスタヴス・アドルフス王の下に在りて羅馬舊教と奮戰せし瑞典人移住して今のデレウェヤー州を形成し、清爽好義にして而かも工匠的なる佛蘭西の新教派ウゲノーの徒移住して今の南北カロライナ州を形成し要するに勤儉節約不羈自由、正義博愛躋農自立の風紀は桑創の時代より磅礴し來る、南米と北米と形勢の甚だ相違するもの實に大因果あり

二北亞米利加(墨西哥以北)は其の土著の員數當初より少く、個々の小種屬に分離して皆な邦國を形成せず、歐人の政治上、社會上に土著の感化を享受せしこともあらず

而して其の員數其の勢力年に月に銷沈し去る。南亞米利加(寧ろ墨亞哥以南)の土蕃に至りては大に然らず、其の員數は過多に個々の種屬は各々完然たる邦國を形成し、モンテズマの帝國は今の墨西哥に在り、チブチャス國は今のコロンビヤ高原に在り、豐富强盛なるインカの帝國は今の秘魯高原に在り、進取的なるアロカニヤン國は今の智利平野に在り、西班牙人若くは葡萄牙人の此所に移住せし者今日に至るまで眞誠に土蕃を征服する能はず、土蕃の員數現に三千五百萬爲めに歐洲移住人民の作爲せる政治上及び社會上に土蕃の感化を授與すること少からず。要するに墨西哥以南の亞米利加は歐人の開化を生產せずして歐人土蕃との混殺的一種特別なる開化を創製するを見る。加ふるに西班牙、葡萄牙の迷信流なる羅馬敎は、此の歐人と土蕃との混殺的開化を浸漸して、宛如たる歐洲中古暗世時代の氣象を此所に現じ來れり。北米と南米との形勢甚だ相違するものあるは眞に偶爾にあらず。

南米の羅甸民族の諸國中、獨り智利のみは希望を屬すべきものあり。故に立論して曰く、智利は幅狹く丈は長き國にして、二方は洋海に面し、一方はアンデスの大山鏈を以て他の南亞米利加の國土より全く隔離せられ、其の實際は細長き島國の如く然り。幅員我が日に匹如して、國民も亦た他の西班牙民屬の邦國と異にし進取好武にして、雄心壯勃些も柔懦萎縮の風を見ず、宛たる南米の日本なりと。

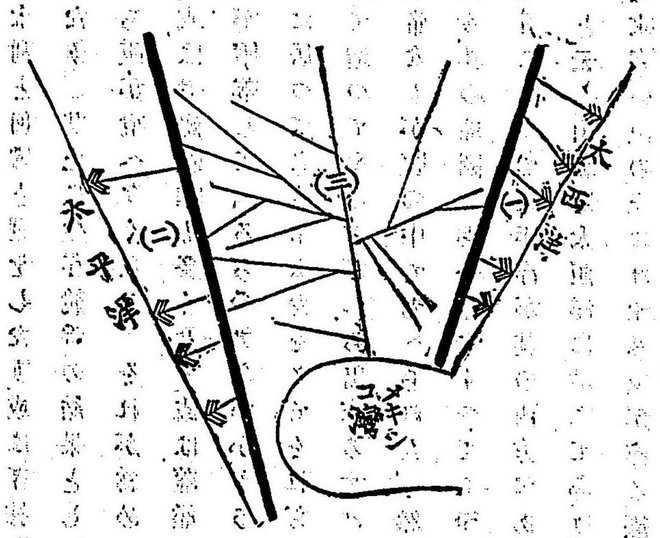
○米國史と日本史の地理的係關

米國と申しましても素より前代の亞米利加の如き唯だ土蕃の印度人が住んで居つた米國は諸君子も御承知の如く世界の文明開化に何等の關係をも致さざるものでござりまする故、白人の米國と、日本との歷史の關係を考究致す必得てありまする。そこて白人の出所は何處から來たかと云へば、初は亞細亞洲の中部から起り段々歐羅巴に移つて根據を占めたことは諸君子の御承知の通りてある。然るに歐羅巴の地形はどうてあるかと申しまするに海岸線が長い、岬が出て居り、半島が出て居り、島があり、海岸が屈曲して船舶の出入に便利てある、これか爲めに我の物產を交換するのても、彼我の思想を交換するのても、有形無形共に甚だ便利てある、それ故に歐羅巴が開明の域に進んだと申しまする、これは素より其通りて、歐羅巴が早く開けて來たのは、地形が右の如く大屈曲をなして居つたからてある。併しながら是に反し若し大きな山脈があり、大きな高原があり、大きな海があり、そうして大きな半島があり、海岸線の屈曲が少なかつたならは、重たくして、と云

ふては、をかしうございますが、人間の手に餘り力に餘るもので一口に申せば調法でない、是を人間が使はうとしても智力が進んで來なければそれを使ふ丈けの力はない、人類が幼稚の間は人類の力丈に適なやうなもの、人間が利用の出來得べき範圍にある程のものが先づ開けるのであります。然れば歐羅巴の地形が半島が出て居り、岬が出て居り、大小の灣があり、港があり、斯く海岸線が屈曲して人類の利用の爲めには都合が宜いには違ひなけれども、一言にて盡しますればコセ〳〵して居つて調法がられる、人間て云へば使ふには便理てあつて惡く申せばチョコ〳〵して居るからてある。

歐羅巴の地形はチョコ〳〵して居る、それてあるから早く進んだ、文明開化に進んて衣食住とも充分になつて、色々の甚しき競爭が起つて來た。そこて此の歐羅巴にては人種の競爭が起り、色々生存競爭が劇しくなつた、時に當りまして、新たなる大陸が歐羅巴人の前に備へられました。新大陸と云ふは即ち南北亞米利加てござりまする。是を舉へて申さんか、佛樣ても宜しい、又耶蘇敎の神樣ても宜しい、阿彌陀樣なり上帝なりが天に居つて考へらるゝには、どうも歐羅巴も困るぢアないか、斯う人間が澤山になつて列國の間に戰があつたり、佛蘭西と何國と戰をしたり、或は埃太利と何國と戰をしたり、或は丁抹と何國と戰をしたり、或は西班牙と何國と戰をしたり、或は丁抹と何國と戰をしたり、或は西班牙と何國と戰をしたり、或は埃太利

ますと、そこで地圖を御覽なさるとハッズンだとか、デレウェヤーだとか、サスケハンナだとか、ボトマックだとか、サヴァン、ナだとか色々な川の名はありますれども、要するに大體に於て是に過ぎない。夫から西の方でも右樣です、ロッキー山脈の中に水源があ



り、而して水は高い所から低い所に落る以上は、(二)の如く川は西に走りて低き太平洋に向ひ流れるに違ひない、地圖を御覽なさるとフレーザー川だの、コロムビヤ川だのと云ふのが其の通りに流れて居りまする。然るにアレガニー山脈より東の處と、ロッキー山脈より西の處の間は川が右の通りに流れたが、此間即(三)の處はどうするのであるか、南方がメキシコ灣で、北方が陸續きであるから無論陸續き即ち英領北亞米利加の方が高くてメキシコ灣の方が低いに相違ない。低ければ北方の陸續きよりする水とアレガニー山西の水と、ロッキー山東の水とは遂にメキシコ灣の方に流れ集るべき筈である、即ちミシシピーの大河は圖の如くドーしても此處になければならぬ筈である。偖又米國の北方はどうなつて居るかと云ふと、御承知の通りスーペリヲルとか、ミシガンとか、ヒューロンとか、イリーとか、ヲンタリヲとか云ふ湖水が連續し居りて全世界の淡水の分量の過半を保つて居ると云ふ樣な地中海の如き大きな湖水系がある。さて米國の川は一方は(一)太西洋の方へ流れ、又(三)ミシシピー河はメキシコ灣に流れ、所謂四通五達である。大河のある。所は平坦であります、又た川の邊の地味は肥へて居る、山や岩のガク〳〵して居る所とは違つて大河の流れる所は陸地も便利である、水運の便利なることは素よりのこと

てある、それから水を田畑へ注ぐことと即ち灌漑の便利があることは又御承知の通りである。詰り米國にはさう云ふやうな大きな湖水が連續して居り、又大きな川が縦横に流れて居るから、あらゆる點にて利益である。然るに此の北亞米利加太陸の外の太陸は、何れも大變困ることがある、亞細亞でも、亞弗利加でも、濠太利でも、内部には雨の降つたことがない、亞弗利加で言へばサハラ、リビヤの沙漠を始め喜望峯の北方のカラハリ地方は雨が降らぬ、亞細亞にもゴビ、シャモの沙漠を始めペルシャの沙漠にも雨が降らぬ、又た濠太利大陸の内部でも雨が降らぬ、是れは水蒸氣が充分にない故であります。然るに北亞米利加大陸は阿彌陀樣なり上帝が考へられて大きな川を澤山造つて下さいました上に、海と同じやうな即ち地中海とも申すべき非常に大きい且つ深い湖水系が造つてあつて、萬遍なく水蒸氣が能く疎通して居りますから大變能く出來て居る、全體に於て丁寧の上に丁寧に建築して、そうして、當分は阿彌陀樣なり上帝なりが幕を掛けて隠くして置かれました。所が、舊世界も人口が殖えて生存競爭が烈しくなつても、もう仕方がないと云ふ秋に至り、コロンバスと云ふ者の力に依りて幕がズッと開きました。すると實に何と申して宜いか立派に完全に造られた大陸が眼の前に現はれたものでございますから、歐羅巴の人が此の大陸に向つて大に移住しやうと云ふ考になつたのでございます。

さて歐羅巴は太西洋を隔てゝ亞米利加の東に在る、所が亞米利加の川々は「御出なさい〳〵」と云ふやうに口を歐羅巴の方に向けて開いて居る。そこで測量も何にもせぬ、初めはどんな所でもさうですけれども船は川口から奥へ這入る、然れば歐羅巴に向ひ「御出なさい〳〵」と手招きをするやうに開いて居りますから、英吉利、佛蘭西或は和蘭瑞典の船は各々川口から上つて往きました、所が大河のある邊は地味の肥えて草木の好く生長して居るものでありますから、佛蘭西人はハッズン川の岸に今日の紐育州を造つた、或は英吉利人はジェームス川の岸に今日のヴァージニヤ州を造つた、或は瑞典人はデレウェヤー川の岸に今日のデレウェヤー州を造つた。是等の人がなぜ移住をしたかといふと、皆本國に居つては食へぬ計りでない、宗教信仰の自由が得られない、非常に壓抑をされる新しい宗教を奉ずると酷い目に遭つて殺されたり或は牢屋へ入れられたりするものであり升から、信仰の自由を得る爲めに此方へ移住したのであつて、元と〳〵から自主政治上、社會上の自由を得やうとする人々が移住したのであつて、元と〳〵から自主自由、不羈獨立の思想が充滿して居つた。さう云ふ人民に限つて、個人主義を執りな

かなか聯合せぬ。所が幸にして北亞米利加の地形が非常に都合が好いことになつて居つた、御承知の通り桶でもさうてある、小木片が七ツか八ツ寄つてそれへ箍が嵌うて水が洩れぬやうにして便利に使用が出來る樣になる、時も箍さへ取ればバラ〳〵に別れるのであるけれども、東方が太西洋でさつて西方にアレガニー山脈が連り北米の十三州は太洋と山脈との間に挾まつて居りて、此の二つの箍に依りキツシリと締めつけあれば、自然結び付かなければならぬやうになつて居りまする。そこで北亞米利加の十三州は地形の然らしむる所で、もと〳〵個人主義の移住民ばかりですけれども、是等が容易に聯合した。强大なる本國の英吉利が壓制じたと云ふとで微弱なる十三州が聯合して獨立の氣運が起つた。自由を得やう、束縛の壓抑を受けさらんが爲めに新しい大陸に移つたものでありますから、忽ち兵力にまで訴へて本國の壓抑と戰ひ、英吉利の攝絆を脫して十三州が獨立して亞米利加合衆國が出來たのであります。然る所十三州即ち太西洋と、アレガニー山脈との間の帶の如き細長き一小地は早く既に歐州よりの移住民の爲めに餘裕の無いやうになつて仕舞た。アレガニー山脈を越えて西方にミシッピーの大平原がある然かし此大平原の四分の三は佛蘭西の領分であつたが、佛蘭西が內國にて色々な事情がありまして此のミシッピー平原の方へ向つて手を着け、力を盡くすことが出來なくなつたから、止むを得ず北米合衆國へ賣つて仕舞つた。所が當時の亞米利加合衆國即ちアレガニー山東の十三州の地に一杯に人が充滿して來たから、今迄の土地丈けでは滿足することが出來ない恰も好しアレガニー山脈の間には幾條となく大きな谷が通じて居りますから、其谷を通つてミシッピー平原の中へ人々が續々移住しました。すると所謂是こそ形容詞などで言ふのではなく眞に沃野千里である、實に立派な大平原が人々の眼の前に現はれ來た者でありますから、そこでアレガニー山東即ち太西洋岸丈け所有せしときは亞米利加合衆國の人も小さい考を持つて居つたけれども、今度は本統の亞米利加人の大なる考が出て來まして、十三州の故土の方から銘々移住をした、西へ〳〵と移住するやうになつた、數長のパークレーと云ふ人が『西へ〳〵と國の運行が進んで往き大きな亞米利加の方は西方に膨脹して大帝國を產み出すものである』と云ふことを詩に作つた通りである。

さて亞米利加人はミシッピーの大平原に移住して農業牧畜を以て大に實力を養成し大なる發達をなしたのであります。元來亞米利加人は自國の建國の要素を『自由平等主義と玉蜀黍と豚の肉』であると云ふとを申すのでありますが、それはどう言ふ

意味てあるかと云ふに、玉蜀黍を四百斤食べさせますと、豚の肉が四百斤殖へます、所が玉蜀黍がどんなに高いとした所が一斤一錢なり、豚の肉は、どんなに安いと見ても一斤八錢位てある、玉蜀黍四斤即ち四錢のものを以て八錢のものが出來ると非常な經濟てある、又た假りに玉蜀黍四斤を他の地方へ運送しやうと致しますと、四斤のものてあるから四斤だけの運賃を拂はなければならぬ、所がそれが豚の肉の一斤になつて仕舞ふと運賃は四分の一となり而かも價値は二倍になりましたから非常な經濟てある、自由平等主義と、玉蜀黍と、豚の肉と言つて得意がつて居るのは是れてありまする。其他にもう一ツ亞米利加人が大農業て非常に利益を得て居る。それは若し一反歩の畑に百時間働いて三俵の麥が取れると致しますると、是が正比例の理窟の通り往きますと、二百時間働いたならば六俵、三百時間働いたならば九俵、四百時間働いたならば、十二俵取れなければならぬ。若し此理窟の通りに往つたならば、誰れも彼れも皆な百姓になるてすけれども、さう云ふことは事實に於て出來得べからず、働いた割に殖へるけれども段々殖へ方が少くなり遂には殖へることが皆無となるものにて、固より一反歩から五十俵だの百俵だのと取れ得べきものてない。所が是は同一の一反歩のてある故なれども、土地さへ廣くさへあれば、正比例の通り往く、即ち甲の一反歩に百時間働いて三俵取れるものならば、乙の一反歩からも三俵取れる即ち甲乙二反歩では六俵取れる、更に土地が廣くして丙の一反歩あればこれからも三俵、合計九俵取れる、丁の一反歩あればこれからも三俵即ち甲丙丁の畑にて十二俵取れる。土地の廣い所ならば、これが出來ますが、我が日本の如き國柄にてはむづかしい、農區は細かく切つてありまして、土地は狹く、人口は多く、地價が高いのでありますから、大農は餘程むづかしい。けれども亞米利加の如き非常に大きな國土て大平原があつて、人口は少く地價の安い所であるならば、此事は即ち出來得るのてあります、即ち大農業を以て大に利益を得た。若し學生に御教授のときに、亞米利加は何故に農業國てあるかと云ふことに對し、土地は平坦て且つ極めて肥えて居り、大河が縱橫し、陸運は便利てあつて、水運も便利てある、人は少くない上に地面が廣いものだから土地が大變安い、此の如き國にては人民は重もに何を職業にして居るかと尋ぬれば、學生は直ちに農業をして居ると答へるてありませう。さう云ふやうな譯て大農業て利益があるから、歐羅巴人が段々移つて來て、西へ〳〵と往つて遂にロッキーの大山脈にかち合つた。さて私も經驗し、諸君も御承知てありませうが、例へば此の部屋より外に出づる爲め

障子を明けるのでも、自分の直ぐ前にある障子を開きさへすれば直ぐに外とへ出られるのですけれども、前の障子より一枚か二枚隔つて障子の開いた所があるとなか〳〵其直に往かずして横の方へ向つて其の開いてる所から外に出る、人間といふものはなか〳〵横着なものでありまして、ズッと真直に往つて障子一枚さへ開けば出られるのに、それにすら面倒がつてか横の方の開いてる所から出る、餘程殊勝な人でなければ前を開けて出る人はない。障子は幅二三尺で縦六尺位のものである、夫ですら面倒臭いので有ますのに、況んや五千尺、六千尺、一万尺もあらうといふ山が障子の如く何百哩、何千哩と連つて居るから人間が自由自在にこれを越へて往くものでない、ロッキーの大山脈にかち當つて容易には越へて往かれぬから米國の西漸の力は此處まで來て一休みしたのであります。所が幸にして墨西哥と戰爭して合衆國の勝つた結果としてロッキー山西の地方即ち太平洋岸が悉く合衆國の手に這入りました。此の太平洋岸にカリフォルニヤあり、此處にて黄金の澤山出るとを發見になりまして、我も彼もとカリフォルニヤに往く樣になりました。其時には鐵道がまだ出來なかつたから皆な蒸汽船を以てパナマの海峽まで往き、然なくば遠く南亞米利加太陸の西端たるホルン岬を廻りて遂に太平洋岸なるカリフォルニヤに到着したものである。然るに恰も好し太平洋岸の川々は皆西に向ひて流れ、此方に對して口を開ひて居つて「お出なさい〳〵」と言つて居る樣になつて居るから、カリフォルニヤへ來て先づ金を堀つて見た所が金も澤山あるし、且つは菓物は好く生育するし、穀物は好く生育するし、人間が住むには二となない氣候の好い所であると云ふので漸次に人々が其所に移住し、土地を開墾し物産を起すと云ふことになり、太平洋岸に今日のワシントン州、今日のオレゴン州、今日のカルフォルニヤ州が出來まして發達をした譯でござります る夫で段々に西漸の力と太平洋發達の力と兩方の力を以て何時ともなしにロッキーの大山脈の間に車道を拵へる、トンネルを鑿る其後に太西洋から太平洋に貫く鐵道が出來て米國の力は遂に東より西へ一貫した。

元來何處でもさうでありますけれども暑い所と寒い所とは物産が違ひます、暑い所にては烟草が出來るとか砂糖が出來るとか、寒い所では全く別の動産が出來ると云ふ工合なので、寒ひ所と暑い所は萬事に利害が相違して居りますから、常に利害が衝突するのである、衝突すべき者であるから南方即ち暑い所と北方即ち寒い所とは常に喧嘩する。例へば支那の歷史でも南人と北人が競爭する、近代て見ても宋人は南人てあるが、北人の元の爲めに滅され、元は又南人の明の爲めに滅され、所が又北人が

來て今日の清朝を造つた樣な譯て支那の歷代の歷史を御覽なすつても分りまする、それに限らず支那の書でも醫術でございましても、或は文章の書き方でも哲學でも書の方でも、音樂でも、其手續は南北相互に違つて居ります、總ての點に向つて南方と北方とは違つて居り、人の思想までが違つて居りまする。然るに支那と亞米利加と地勢の違つて居るよを申しますれば此事が判かる、支那にては黃河と云ふのが西より東へ流れて居る、夫から楊子江も別に西から東へ流れて居る、夫ですからして此間の聯絡はなかつた、なぜかと云ふと黃河楊子江も西から東へと銘々同じ、氣候、同じ物産で、同じ人情同じ利害の所のみを流れて居りますから、北方即ち寒い所と、南方即ち暑い所を結附ける丈の力はなかつた。然るに亞米利加合衆國に於ては是と違ひましてミシッピーの大河は寒い所の北の方から暑い所の南の方にまで流れて居りますから、北方より小蒸汽を出し彼方より鐵道を設ける、さうして暑い所の物産と、寒い所の物産を容易にミシッピー川が交換し利害を結附けて居つた、支川が蜘蛛の巢の如くに東西に縱橫に流れて居りますから、其の沿岸に道路を造り、鐵道を造り、がくて又東西を聯合させてミシッピー川は『乃公が居らなければ亞米利加のユニオン即ち共和合衆は保てないぞ』と頑張つて居るやうに、亞米利加の南北東西を結附けて利害の衝突せぬやうにして居つて呉れぬので、支那の歷史と其點に於て全く違ふ。

さて又亞米利加が發達して歐羅巴から來ました勢力が、西へ〳〵と來まして、遂にはロッキーの大山脈も人爲的にあるかないかのやうになり、トウ〳〵太平洋岸まで達しました。然かし此の西漸の勢力は、太平洋の中へ膨脹するなどは出來ぬと云ふやうなことでなく、どうしても膨脹して往かなければならぬ者である。即ち太平洋に入りて先づ布哇を開發し、千八百五十三年即ち我日本の嘉永六年には太平洋を渡り初めて我が浦賀へ來まして、日本國の門の扉を捻ぢ開けた、亞米利加の西漸の力が遂に我が日本へ這入つて來ました。さて、米國史と日本史との聯絡は此所て出來ました、固より日本は今日に至るまで三千年來無數の先輩上は列聖始め下は無數の人民の先輩が今日まて辛苦經營して三千年の歷史を作つたのてありますけども、我國の近世史の一局面を作つたものの、今の開明の歷史の導火線を爲したのは亞米利加人が浦賀に來て日本國の門戶を開き、其の西漸の力が日本の中に這入つて來たからてある以て今日の有樣になつたのである。コロンバスが西へ〳〵と當初航行せし目的は、彼のマルコ・ポロの所謂ジパング「日本國」の漢音)即ち日本國に達せんとしたのであるが、未だ日本に達せざる中

途には亞米利加を發見し、爲めに日本に達せなかつたのである、然るに米國の勢力の西漸の結果が日本に達じたので、此處に至つてコロンバスの當初の目的即ちシパングへの到着は達せられたのである。そして今日の有樣になつた譯であります。是れまでにて亞米利加と日本の近世史との地理上に對する關係の一節を申上げたのであります。

序でながら日本の開國以來日本の爲めに盡瘁せし人、寧ろ日本の爲めに新文物の制定者となりし米國人を擧げてみませう、是れ日本が如何に米國人に負ふ所あるかがわかり又た此等の米人の功績を記憶するのは我々日本人の德義であると思ふ故であります。即ち

米國最初の公使にして日本が開國幼稚の際、未だ外交に慣れず國交上內外に、紛糾を極めたる間に當り英佛の諸國を壓して日本の爲めに大に援助せし人、其他日本の政治、社會、人民の識力を開發せんとし親切に勉めたり。

ハーリス

『ミカド帝國』の著者にして初めて日本の眞面目を世界に紹介せしグリッフィス

舊開成學校(帝國大學の濫觴)の教授、其他日本に關する種々の著述

（論文を發表し大に日本の價格を世界に擧げたり。

英語をして日本の第一外國語となすに最も力ありし所謂平凡先生なり、平凡辭典の著者平民的眼藥なる「精綺水」の製法を日本に傳へたる人。

ヘボン

日本の社會改良及び論理上、敎育上に功績ありし所謂フルベッキ先生なり、獨逸流の醫說醫術を初めて日本に應用することを勸告せし人。

ザピーフルベッキ

シモンズ　初めて平民的醫術を傳へし人、所謂セメン先生なり。

モーレー　日本の敎育制度を制定せし人。

スミス　日本の財政制度の制定に功績ある人。

カプロン　北海道開拓制度及び事業を制定せし陸軍少將なり、日本に初めて女子敎育の事を傳へし人。

クラーク　札幌農學校創立者、日本にて初めて禁酒會を制定せし陸軍大佐。

ライマン　初めて日本に地質學、地質調査の方法を傳へし人。

クローフォルド　日本に於ける米國流鐵道敷設法の傳來者。

モールス（初めて人類學を傳來せし人、優勝劣敗、生存競爭、適種保存の原理を傳來せし人。

パムフレー（初めて日本に鑛山採掘、治金の學問及び方法を傳へし人。

メンデンホール（初めて日本に電氣學、傳活機、蓄音機を傳へし人。

レーラスド（初めて日本に體操術を傳へ、日本人の體格、體度の改良に與りて力ある人。

夫から序に申して置きますが、此後とても亞米利加の勢力が日本又東洋に餘計に來ると思ひます。それはどうであるかと申しますれば、亞米利加が比律賓群島を占領致したのでもグワム島を占領したのでも、支那に向つて經營しやうとするのでも、亞米利加の大なる力が西漸の力が布哇に來り轉じて日本へ來りそれがもう一つ比律賓群島まで來りたる次第にて、斯く亞米利加の西漸の力が段々太平洋の方へ擴がつて來て、亞米利加第一の新聞なる紐育トリビューンが『太平洋をして亞米利加の湖水たらしめよ』と主張するまでになつて來たのであります。元來亞米利加の國是はさう云ふ占領などの事をすべからざる義であるに拘らず、尚ほ且つ東洋に手を出し初めて來たのは何であるかと申しますと、西漸の力が膨脹せしより段々右樣のことになつたのであります。支那の義和團が山東省に蜂起せし當初、英吉利とか、露西亞とか獨逸とかが出兵せんとするは不思議ならねども、亞米利加が、先づ兵を遣出したと云ふのは全く亞米利加の勢が段々西漸した結果である。先刻も申した通り亞米利加の經濟は今日までは農業で持つて居つた所が段々人口が殖へ土地が少くなつた其上に歐羅巴に農產物を輸出するに競爭者が南米のアルゼンチン、濠太利印度に起つた就ては向後は製造に依らなければいかぬ傾向になりまして結果、製造貿易に依るには彼方此方に向つて販賣市場を求めなければならぬ、國外の彼方此方に向つて石炭の儲藏場を設けなければならぬ、ステーションも即ち足溜りの場所を國外に占領せねばならぬ樣になつたのであります。今日農業の益が薄くなつてさうして段々土地が少くなくなつて來た以上は勢ひ製造貿易の傾きになつて來た。例へば今迄は日本と米國とは片貿易であつて、亞米利加から日本へ來る者は極めて少なかつた、日本も農業國であるから、農業國たる亞米利加の物產はアマリ日本では需用がなかつた、即ち我々が食べる味噌であらうが、大根であらうが日本で出來る、それから豆が多く出來る、醬油も日本で出來る、魚も日本で出來る、それから豆が多く出來る、それから豆が多く出來る、それから豆が多く

所の國の力は借りない、罐詰抔を食べますけれども奢侈にあらざる限りは日本の品て食ふとが出來る。これと全く反して英吉利人は茶を一つ喫むたつて英吉利て出來ない支那印度から來る、砂糖も英吉利て出來ないから獨逸より、大根即ち甜菜て造つた砂糖か又は熱帶諸國の甘蔗から造つた砂糖を入れなければならぬ、ミルクを入れると英國内のものにては不足故に和蘭、米國から來る所のコンデンス、ミルクをも入れる、英吉利人が食べる麵麭の粉は自分の國では多くて四分の一、收穫の少き年には六分の一しか出來ないから、露西亞、亞米利加印度の麵麭の粉を輸入する、肉は亞米利加、濠太利から凍氷にして來るのを主に食べる。然るに我日本は英國などと全く違ひ今日の所にては農產物では他國の厄介には一もならない亞米制加の農產物を輸入する必要はなかつた唯だ日本の物が亞米利加へ往くのみてありました、生糸てあるとか、茶てあるとか、塗物てあるとか、總ての雜貨類に至る迄亞米利加へ輸出するのてすけれ共、亞米利加の物は日本へ輸入する物は今まて少なかつたから片貿易てある所が三四年來亞米利加の方から這入つて來る品物がダン〳〵多くなりました、御承知の通り、昨今はまるで打つて變つて亞米利加よりの輸入品が多くなつた。今日のトラストとて製造家の組合を造らんとする議論が盛んになりましたが此のトラストと云ふものも亞米利加の製造工業家が團結をして他の國へ販路を擴張し大に自國の製造物を輸出しやうと云ふ者て起つたものてすからそれを防禦せんとするより却て歐羅巴其の他にてもトラスト論が盛んに起つたのてあります。日米間の貿易の形勢の全く顚倒し來たのを見ても亦た亞米利加が漸く製造貿易國になつた現象を證據立てゝ來た。それてあるから、亞米利加が製造貿易國とならんとする以上は、先刻申す通り販路擴張を圖り石炭の儲蓄所即ちステーション即ち足溜りを國外に造らなければならぬ樣になつた。それ故に布哇を占領し更に進んて支那の外交上にまて喙を容れんとするのてあるが、かく驚くやうに豹變した現象になつたのは必要上からさうなつて來たのてありますから今日となつては過去の亞米利加の考を以て亞米利加を御覽なさると大變違ひます。現に支那に於て御承知の通り亞米利加は中部の漢口からして南部の廣東迄の南北を中斷する鐵道の敷設權を得た所が敷地は大概買上げた敷地を買收する丈の株金は既に集まりました。さう云ふ譯て亞米利加の總ての方針が變つて來ましたから、此後東洋の歷史を研究なさるのても、亞米利加が東洋に大勢力を用ゐると云ふ新現象を顯はして來たと云ふことを御注意なさらなければならぬ。

さて又英國が目下密かに計畫中なる同國及び西歐羅巴より北亞米利加カナダを經過して、十七日半にて日本まで着來することが落成すれば、日英間の行程はシベリヤ鐵道より迅くなるのである。元來鐵道は長く往けば長く往く程速力が減じて往きますから、迚も長い日時間同一の速力で往くものでありませぬ、故に英吉利より千七百半で日本に來るとが出來れば、シベリヤ鐵道が出來ても矢張り以前の樣に歐羅巴の勢力は亞米利加を通過して日本及び東洋諸國に來る樣な譯になる。又米國は太平洋の海底電線を洗設せんとすることを回布哇のホノルルを經て比律賓群島まで、更に布哇其他の諸小島を經て日本まで無線電信を試みんことを希望に議決した。して居る。夫れからニカラガ運河をも開鑿して太西洋と太平洋とを連絡し、歐洲及び米國の太西洋岸と東洋との直接の連絡をする樣にする。然れば此後とても歐羅巴の勢力は亞米利加を通過して來る方が多くして、日本と西洋との關係は亞米利加を通過して來るのは以前の歷史と變らないと信ずる、並に關係が益々密着になると云ふことを私は信じて居ります。今日は唯地理上より亞米利加と日本の歷史近世史とを申上げ並に將來の關係のことを申上げたのであります、是で今日の講演を終ります。

世の所謂地理學なるもの畢竟理學にあらず、單に山川湖海、溪谷の名稱所在、氣候の冷熱生物の配布を雜陳するに過ぎず邦國の境界、面積、人口、都市、宗教、政體、風俗、人情、物產を羅列するに過ぎず、所謂地理學なるもの此の如きものならんや、(一)山何に因りて聳ゆ、海何に因りて展ぶ、溪谷何に因りて闢く、氣候何に因りて冷たり熱たる、生物の配布何に因りて秩然たる、之れを探討し且つ其の結果を推究する是れ地理學の一本領たり、(二)邦國の境界面積何に因りて今日の狀をなす、人口何に因りて疎たり密たる、都市何に因りて興る、宗教政體風俗人情物產何に因りて此の如くなる、之れを稽查し且つ其の結果を察知する是れ地理學の一本領たり、而かも世の所謂地理學なるもの此所に出でず、茲も事實と事實との間を聯鎖せる脈々の關係を說明せず、單に百多の事實を雜陳し乾燥なる材料を羅列し、以て少壯年の徒に授け些も之れが腦裡を開發するの途に就かず、闇誦記憶の一片にのみ依り以て徒らに其の頭腦を困殺煩殺するに過ぎず、爰に地理學の爲めに遺憾となす、況んや地理の學たる、獨り人生に効益あるのみ

ならず、少壯年の腦裡を開發し、其の知識を啓育し、兼て敢爲進取の氣概を奮揮せしめ、萬里遠征の壯心を興起せしむるには、之れが考究に過ぐるなし、是れ最も現代の日本の少壯年を陶冶するに適當所なり、豈に獨り少壯年のみならんや。

特に當今の急務は日本國民の能ふ丈け多數をして『世界に於ける日本國の位置如何』を悟了せしむるに在り。而して之れを明かに悟了せしむるは先づ地理學の考究に在りとす。

之れを要するに日本國現代の風氣を克く根柢より挽回するは、實に地理學知識の普及に在り、地理學の日本國將來の運命に繫がる此の如く重且大なり、乃ち愈々益々此學を考究せざるべからざることを悟了すべし。

さて今日まで地理に關する大體の研究法を講述致しましたから、只今より漸次に精しきことを申上げまする、即ち「地と人との關係」を講義致しまする。

「地と人との關係」と申しますれば、古人も「人を離れて事なく、地を離れて人なし」と最も簡明に土地と人生との關係を申したるが如く、凡そ此の世界に千百の出來事を生じ、千百の變遷を生ずるのは、全く人類なるものが此の世界に居りて、此の人類なるものが活動する故である。然るに此の人類は恒久に生息して居るかと云へば、生地があるからである、土地が無ければ、人類も無く、人類が無ければ、世界に歷史なるものは無くなるのである。人は土地の上に生まれ、土地の上に死し、其間に當り土地の上にて活動するより歷史なるものが出來るのである。要するに、土地は人類をして今日を致さしめたる原力なると共に、土地は人類が活動する舞臺、否な唯一不二の舞臺であ る。以上の如くなれば、地と人とは離るべからざるもの、分つ可らざるもの否な「地と人との關係」は離さしめんとするも遂に離さしむる能はざるもの、分かたしめんとす

るも斷じて分かたしむる能はざるものである。されば東西三萬里の治亂興廢を知らんと欲せば、到底『土地と人生との關係』を知らざるべからず。要するに『土地と人生との關係』を研究するは、各種の學問の第一の階梯である根本である。彼のヴルシヱユリーは、諸君子の善く知れる行政學の大家であるが、氏は、其の著述の政治學書の中に特に「リヒテル(獨逸の地學者)の著述に依りて、吾人は人と地とは離るべからざるもの、國家は地と人とが相互に活動したるより結果せし一機關なり、故に先づ土地と人との關係を詳かにして初めて國家の事を研究し得るものなることを悟り得たり」と記せり。されば政治に志す者國家に志す者などは、特に『地と人との關係』を最も能く研究せざるべからず、これ只今より『地と人との關係』を精しく講述せんとする所因である。

さて諸君にして若しも三疊敷の部屋に入つた時と、二十疊敷の座敷に入つた時とにて自分の心持が如何にも相違すると云ふことを悟らるゝと、即ち同一の人にてありながら狹き所と廣き所とにて心持が直ちに相違すると云ふことを悟らるゝと、直ちに島國と大陸とにて人の氣象に相違があると云ふことの偶然でないことを悟らるゝならん。又諸君子にして若しも此の學校の樓下に居られたる時と、樓上の二階に上られ二階の窓より早稻田の平地より目白の高臺などを下瞰された時とにて自分の心持が如何にも相違すると云ふことを悟られなば、直ちに平原と山地とにて人の氣象に相違があると云ふことの偶然でないことが悟らるゝならん。若しも此の內海(東京灣)と此の大平原(武藏野)とが無つたならば、元來此の東京市なるものが果して建立し得られしものなるか、縱し建立せられ得たとするも、果して今日の如き大市街を發達し得たるや否やは疑問であるのみならず、實に不可能の事なりしと信ずる。又た淀川即ち安治川が無つたならば、元來大阪市なるものが今日の繁昌を成就し得たるや否やはこれ又た疑問のみならず、不可能の事と信ずる。元來淀川がありて大阪の平原は大概起生せられ(土地昇起も亦た大阪の平原を起生したりと雖も)此の平原の上に大阪の市街は建てられ、市街の背面には肥沃なる淀川の大平原が連なり、大阪は實に此の大沃原を負ひ、且つ安治川(淀川の海に注ぐ所)が船舶の出入に便利を與ふるが故に、其の繁昌は益々增加したのである。されば如何に大阪人が商業に機敏なりとて、淀川が無りしならば、元來より大阪の市街は發達し得なかつたものである。されば又た若しも日本が島國にあらざりしなら如何、如何なる結果を生じたるか試みに一々これを列擧すれば左の如くである。

一　日本は島國なるが故に、國民は獨立心に富めり。されども若し大陸國なりせば、人心は散漫となりたるが故に、自負心は薄弱なりしならん。

二　日本は島國なるが故に、國民は自負心に富めり。されども若し大陸國なりせば、人心は散漫となりたるが故に、自負心は薄弱なりしならん。

三　日本は島國なるが故に、國民は負けぬ氣に富めり。されども若し大陸國なりせば、人心は散漫となりたるが故に、負けぬ氣は薄弱なりしならん。

四　日本は島國なるが故に、國民は勤王心に富めり。されども若し大陸國なりせば、人心は散漫となりたるが故に、勤王心は薄弱なりしならん。

五　日本は島國なるが故に、國民は外部よりの刺戟に會へば忽ち聯合するなり。されども若し大陸國なりせば、人心は散漫となりたるが故に、聯合力は薄弱なりしならん。

六　日本は島國なるが故に、外國より容易に侵害を被ふらず、長へに國家の威嚴を保ちたり。されども若し大陸國なりせば、陸續きなるが故に、四隣の強國より侵害を被ふりたることあるべし。

七　日本は島國なるが故に、國民の度量は狹隘なる所あり。されども若し大陸國なりせば、自然界の廣大なるに連れて度量は今よりも廣大なりしならん。

八　日本は島國なるが故に、國民の眼界は近短なる所あり。されども若し大陸國なりせば、自然界の廣大なるに連れて眼界は今よりも遠長なりしならん。

九　日本は島國なるが故に國民の見識は底卑なる所あり。されども若し大陸國なりせば、自然界の廣大なるに連れて見識は今よりも廣大なりしならん。

十　日本は島國なるが故に國民の規模は局小なり。されども若し大陸國なりせば、自然界の廣大なるに連れて規模は今よりも廣大なりしならん。

十一　日本は島國なるが故に、國民は事物を消極的に觀察するの弊あり。されども若し大陸國なりせば、自然界の廣大なるに連れて今よりも事物を積極的に觀察したることとならん。

十二　日本は島國なるが故に、外部より文明を受くること早く、又た其の一度外部より受けたる文明を直ちに普及するを得たるなり。されども若し大陸國なりせば、外部より文明を受くることも遲く、又た其の一度外部より受けたる文明も速かに普及し得ざりしならん。

十三　日本は島國なるが故に、大陸の治亂興廢には關係なく、自己の島國内に力を

十分に養成し得たるなり。されども若し大陸國なりせば、四隣の治亂興廢に捲き込まれて內に十分に力を養成することを得ざりしならん。

十四　日本は島國なるが故に、大陸にて絕滅せし文物は、自己の島國內に保存せられ、從て此の保存せられたる文物を十分に發達し得たるなり。されど若し大陸國なりせば、此の如き事をなすを得ざりしならん。

十五　日本は島國なるが故に、海上の交通は四方に便利なり、故に一たび海外と交通するや、通商は甚だ發達せり。されども若し大陸國なりせば、此の如く速かに通商を發達し得ざりしならん。

十六　日本は島國なるが故に、水產國となり、國民は魚食人民となれり、故に日本人の歷史は魚を食ひて得たる力より發せり。されども若し大陸國なりせば、牧畜國となり、國民は肉食人民となりしならん、故に其の歷史は獸肉を食ひて得たる力より發せしならん。

十七　日本は島國なるが故に、今日までの歷史を造り出せり。されども若し大陸國なりせば、日本の歷史の面目は今日と大に相違したるならん。

此に至つて一言堅く御斷り申し上げ置くことがある、此の事は諸君子の頭腦に必ら

ず銘ぜられんことを望む、これは人が土地のみの關係、即ち地理上のみの原因にては感化されぬと申すにとである、只今日本が島國なるが故に日本國民が今日の狀態を發達し來り、今日までの歷史を形造つたと申し上げたるが、單に地理上の關係のみにて日本國に前陳の如き結果が生じたと思はれては間違である、地理上の關係は元より有力なる大原因の一ではあるが大原因の全體ではない、即ち一個人の固有の性質、これを擴充すれば一民族の特性、一人種の特性も亦た一國家なり一國民の歷史を造り出す大原因の一である、地理上の關係が大原因の一となり、民族又は人種の特性が大原因の一となり、此の三大原因にて一國家の發達の狀態が定まり、一國民の歷史が形造られるのである。されば一國家なり一國民の狀態は、土地のみの關係、即ち地理上のみの原因にては定まらぬ、民族又は人種の特性が主觀的となり、土地の關係が客觀的となり、此二大原因で定まるのである、而して人の力が地理上の力を侵略したり、又は地理上の力を破壞することもあるし、かくて又た地理上の力が人の力を侵略し、又は人の力を破壞することもある。されば要するに此の世界の變遷は、人と地との相互の働きたる力の結果である、故に地理上のみの力と御思召になつては間違である。然しながら諸君子が今日まで此のことを冷淡に見て居たり又たは忘却

して居つたのは二層の大間違である。これより私が種々講義を申上げますが此所に御斷り申し上げたることを善く〳〵各自の腦に銘じて置て下されたし。さて又た試みに今日の和蘭國なるものが無かりしならば和蘭人の狀態は如何これを指點せんか、

一、和蘭は小國にして、人口は稠密なり、而して地勢は低平なり。されば和蘭人は土地に缺乏を告ぐるが故に、海水を侵略し、堤防を築きて新土地を作り居り、最近の七十年間に國の面積は二倍となれり。されど此等の堤防は時々海濤の爲めに破壞せられ又た大河は縱橫して此の低平なる地勢の間に流駛すれば、河岸の堤防も亦た時々崩壞せらる。此の如く和蘭人は內には河水の氾濫を防ぎ、外には海水の侵入を防ぎ、四六時中、內外に防戰し居るを以て、和蘭國民は氣力強勁にして他人に屈せざる性質を作り出したのである。若しも和蘭人にして今日の如き國柄にあらざらしめたることならば、今日此くまでに國民の此の如き性質を助長せざりしことならん。又た以上の如き國土にして或は堤防を築き或は運河を穿つことの頻多なるを以て、和蘭人は水利土木學及び水利土木の應用に至つては世界第一の國民となつたのである。此の水利土木の長所と雖も若し和蘭にして以上の如き國柄て無かつたならば、今日の樣に十分の發達を遂げなかつたものと信ずる。

二、和蘭は小國にして、人口は稠密なり、而して濱海の地甚だ多し。されば和蘭人は、一方には盛んに海外と貿易をし、人口二人に對する輸入高も輸出高も共に世界第一である。されば又た他方には始めて濠太利（オーストラリア）、新西蘭（ニュージーランド）土などを發見し、又た各地を探檢し、從て世界に於ける植民地も多く、本國の面積に十倍する領地を有する（濠太利及び新西蘭土は今日和蘭領にあらずされども和蘭領は南洋東印度、西印度及び南亞米利加に散在せり。）若しも和蘭人にして今日の如き國柄にあらざりしならば、此の如き國民の海外侵略的傾向をも助長せしめず、從て海外との貿易も又た海外の植民地も少かりしことならん。又た以上の如き理由にて和蘭の海軍は國土の割に比較して仲々強勢である、又た商船の數も甚だ多いのである。

三、和蘭は海濱の地甚だ多く、且つ地勢低平なり、故に濕氣多し。されば物品の腐敗及び變色すること多きが故に、國民は洗濯洒掃に最も勉め、遂に潔癖は此の國民の特色となつたのである、外國人の此國に遊びたる者が馬小屋すら客間の如くに清潔なりと批評した程にて、北和蘭のブローエックの住民は潔癖に過ぎるとて惡評がある位である、若しも和蘭人が今日の如き國柄にあらざりしならば、國民の潔癖

を今日此くまでには助長せざりしことならん。

四　和蘭は小國にして人口は稠密なり、而して濱海の地甚だ多し。されば和蘭人は一方には盛んに漁業を經營し鰊漁業の盛んなることは世界にて一二を爭ふのである、又た北海（ノルスエー）の漁業權も和蘭人に屬するのである、又た遠洋漁業をも盛んに經營する。又た他方には海風が低平なる土地に吹き來るを以て、風車を盛んに利用し、各種の小工業を盛んに經營する。又た土地低平にして、而かも土地狹小にして人口稠密なれば、陸産は利益の最も緊つて居るものを擇ばざるべからず、故に牧畜に從事する者多く、和蘭は舌來酪農を以て世界に知られ、人口一人に對する牛の頭數は世界第一なり。土地低平にして、濕氣深ければ粘土質の地多く、從て陶業は盛んである。若しも和蘭人が今日の如き國柄にあらざりしならば、其の漁業も其の風車の利用も其の牧畜も其の陶業も今日の如くに發達せざりしことならん。

五　以上の如く低平なる土地に居り、又た運河堤防も到る處に多く、又た風車の利用も盛んに行はれ、且つ漁業及び牧畜が盛んなれば、和蘭には一種の平遠沖濶なる畫風を孕み出し、特に夕陽の下に網を上ぐる處竿々たる芳草の上に牛の徐行する處運河の柳蔭に風車の輕く靡がる處などの畫に至ては、和蘭人の特得なり。若し

も和蘭人が今日の如き國柄にあらざりしならば、此の如き畫風も今日の如くには發達せざりしことならん。

又た試みに問はん、アルプス山にして無かりしならば瑞西の狀態は如何、それを指點せんか、

一　瑞西の國中にはアルプス山脈蟠屈せり、故に四方との交通は不便利にして、自ら獨立の一地區を成すことなれば、國民は自ら此所を守り自ら此所に任ずるの氣象厚く、即ち不羈自由の氣象及び獨立心に富めり。若しも瑞西にしてアルプス山無かりしならば、其の國民の不羈自由の氣象も其の獨立心も今日の如くには十分に助長せざりしことならん。

二　瑞西の國中にはアルプス山脈蟠屈せり、故に四方との交通は不便利にして自ら獨立の一地區を成すことなれば、國民は自ら此所を守り自ら此所に任ずるの氣象厚く、且つ山は聳え、谿谷は幽邃に、又た明媚なる湖多く、風景絶美なれば國民は其の絶美なる鄉國を愛するの觀念深く、甚だ愛國心に富めり。若しも瑞西にしてアルプス山無かりしならば、其の國民の愛國心も今日の如くには十分に助長せざりしことならん。

三、瑞西の國中にはアルプス山脈蟠屈せり、故に四方との交通は不便利にして且つ土地狹少にして、地味も磽确なれば生產物少し。されば此の如く風土の逆なる所に人と爲りしを以て、國民の意志は强く氣象は剛壯なり。又た以上の如き風土の間に人と爲りたれば、瑞西人は忍耐にして勤勉なり。又た瑞西人は非常に節儉にして非常に貯蓄心に富み、過度に節儉なると非常に貯蓄心に富めるとの結果金錢に貪慾なるの弊を生ぜり。又た以上の如き事情なれば、人民は歐羅巴の各大都市に出稼ぎし、貯金したる後は必らず其の愛慕せる鄉國に歸るを常とす。若しも瑞西にしてアルプス山無かりしならば以上の如き國民の傾向を助長せざりしてとならん。

四、瑞西の國中にはアルプス出蟠屈せり、故に國民は不羈自由の氣象に富み百般の制度も自ら自由にして、且つ共和聯邦の國柄なれば、政治上の事物は最も寬大なるが上に更に國の地位は歐羅巴大陸の中央に當り、又た風景も絕美なる國柄なりとて、歐羅巴國中の國事犯は此國を以て其の最も好き隱場となせり、歐羅巴洲中の國事犯者が此の如き隱れ場を所有するも亦たアルプス山の間接の恩惠である。

五、瑞西の國中にはアルプス山蟠屈せり、故に四方との交通は不便利にして且つ土地狹少にして、地味も磽确なれば、生產物少し。されば、人民は利益の最も緊り居る職業に從事せざるべからず、而かも谿流多く湖水多く水力を利用し得べければ、人民は此等の水力を工業に利用して絹毛布及び時計の製造盛んなり(我が日本にも多く綿絹呉呂及び時計を輸入する)。若しも瑞西にしてアルプス山無かりしならば、以上の如き種類の工業も、今日の如く甚だ盛んには發達せざりしことならん。

以上講述せし如く島國にあらずして大陸國なりしならば、日本國民の發達は今日と其の面目を異にし、和蘭國が無かりしならば、和蘭國民の發達は今日と其の面目を異にしたることは明かである。先きにも堅く御斷り申し上げたるが如く、地理上のみの原因が國民の變遷に關係を及ぼすとは申し上げぬ、然かし地理上の原因が大なる勢力であることは前陳の日本和蘭及び瑞西の三例にて明かに御了解になつたことゝ信ずる。此の如く大勢力のあることを今日まで冷淡に見て居つたり、甚しきはこれを忘却して居つたのは元來の過りである、それ故に行政學者ブルンチュリーをして前に述べたる勢力に最も注意せられ、最もこれを重視せられんことを切望する。ソコデ私はこれが如き覺悟を特筆せしめた所因である、諸君子にも何とぞ地理上の人事に及ぼす大

より一々項を分ちて地理と人文との關係を逐次に講述致します。

(九) 地形と人文

先づ地形より申し上げますれば、地形は島、半島、大陸の三に大別致しまする。そこで島、半島、大陸と人文との關係を各別にして申上げまする。

(一) 島と人文

第一に島と人文との關係を申し上げまするに先ち、元來島とは如何なるものであるか。普通の解釋に從へば、島とは四面水に依りて圍まれたる陸地である。然れども四面水に圍まれたるものにて、東大陸(亞細亞、歐羅巴、亞弗利加)も西大陸(南北亞米利加)も全く水に依りて圍まれたる陸地である、然るにこれを島と呼ばずして大陸と稱ふるは何ぞや。或は辯じて曰はん、東大陸も西大陸も共に絕大なる陸塊なれば、これを大陸と稱ふるのである、島とは大陸よりも小さき陸塊にして水に圍まれたるを呼ぶものなりと。果して此の如きものとせんか、東大陸、西大陸の如きは、成る程陸塊も絕大なればこれを大陸と稱ふと致しましたる所で、東大陸よりも又た西大陸よりも遙かに小なる陸塊にして且つ四方共に分明に水に依つて圍まれたる濠大利の如きは果して大陸と稱ふべきか、將た島と呼ぶべきか。或は辯じて曰はん、濠太利の陸塊も大なれば大陸と稱ふべしと。果して然らばグリーンランドの如き、將たボルネオの如き、地塊の大なるものは曰はん是れ大陸にあらずして島なりと。然れどもグリーンランドと云ひ、ボルネオと云ひ、濠太利より小は則ち小なりと雖も彼を大陸と稱へて此を島と呼ぶの理由は果して何くにあるか。此の如き人々の稱ふる所を一言すれば、大陸とは濠太利以上の面積を有する陸塊を云ふ、島とは濠太利以下の面積を有する陸塊を云ふと解釋するのである。此の如きは一聞して俗には通ずれども科學上より觀下せば實に取るに足らざる解釋と申すべく、凡そ原則には此の如き據例的のものを許さず、須らく抽象的のものならざるべからず、況んや何等の原則もなくして漠然と地塊の大小に依りて大陸と島とを區別すと申すが如きことは到底許すべからざるものである。是を以て歐洲特に獨逸、佛蘭西の地學者の間には、島の解釋に就き議論が紛々として起り、甲の主張する所を以てすれば其間に訂正(コレクション)を生じ、今に諦着する所なしと雖も、要するに島なるものは萬遍なく海の感化を享くるものなりとの解釋に諦着したの

てある。海の感化を萬遍なく享くるとは、海若くは大洋のインフルーエンスを當該陸塊が内部の如何なる處と雖も、享けざる處なしと云ふ義にて當該陸塊の氣候と云ひ、生物と云ひ、皆な海若くは洋のインフルーエンスを享くると云ふ義である。東大陸、西大陸の内部は固とより濠太利の内部にも海若くば洋の感化を享けざる處あるを以て東大陸、西大陸將た濠太利は此の解釋に依りて大陸と稱へ、さてクリーンランドの如き、ニューギニーの如きボルネオの如きは、其の如何なる内部と雖も洋海の感化を享けざる處なきを以てこれを島と呼べば、何等の衝突もなく撞着もなくして抽象的に大陸と島との區分を解釋し得るのである。故に島の解釋に就ては、此の外に別に良き考もなき故に、予はこれを取らんとするものである。

さて島は以上の如く萬遍なく海の感化を享くるものにして四面は直接に海若くは洋に依つて圍まれたるものである。然れば島の住民は海の感化を全く享け、海の氣候を享け、此の氣候に依りて感化されたる生物に依りて衣食し、四圍の海水中にある生物に依つて衣食するものである。日本人が千二百餘年の間、殆んど魚のみを食用し、魚に依りて其の腦力を鍛へ、熱を發し物體力を發し、以て日本歴史の大部分を造出したるのも、英吉利が航海に、植民に、貿易に、海軍に、大發達を遂げ、其力に依りて弱威を世界に輝かせるのも、いづれも瞰する所は海の感化に依るものである。又た英吉利が風濤に耐ゆるが如き頑強なる水夫水兵を造り出したるのも、全く其の島であつて、島の四圍の風濤と戰ひて鍛へ上げられた故である。更に又た英吉利人が綿布の製造に最も發達せしは、其國が綿絲の紡績上に最も適合せる海的氣候を享くるを以ての故にして、其の大洋を渡りて來りたる濕暖なる空氣は綿絲を強くすれども、若しも乾燥にして寒冷なる空氣なりせば、綿絲は脆く破れ易くなるを以て、他邦人が此の事業に就ては英吉利人に相及ぶこと能はざるは、全く他邦に無くして英國にのみある此の海的氣候の恩惠なりとは、工藝家の齊しく唱ふる所である。要するに英吉利は島即ち海の感化に依りて其の大歴史を構造したるものである。

島は四面海水に依りて圍まれ、母陸と離れ世界と隔て、獨り波浪の中に孤懸するものなれば、島の住民の長所を曰へば獨立心に富むことである、自負心に富むことである、所謂る負ケヌ氣に富むことである愛國心に富むことである勤王心に富むことである、平時に當りては内部にて分爭すれども、一旦外部よりの刺戟に遇へばイザとて即ち聯合統一するとてある。洋海の中に獨り孤立して居るより、島の住民には獨立心

が多く生ずる筈である、世界から自分ばかり離れて居り、母陸の紛擾には相關せず自分は自分だけで居り、自分の島内の發達及び改良に十二分の力を用ふるとが出來る故に自負心の生ずる筈である、隨て負ケヌ氣を生ずる筈である、又た一には自分で自分の在所即ち島を守ると云ふ氣になると、一には世間を知らざるより自分の在所のみを善き所と思ひ込むより愛國心の盛んなる筈である、島は洋海中におれば自から一家の如くに思ひ、全島の住民に自から一家族の如き感念が起り、其の家族の主張を尊敬愛慕する感念が盛んに起ると同時に、一般世界の變動を被ふること殊に少く、外部より來りて主長の權力及び尊嚴を侵略することも少く、其の家系も變動を被ふらざるを以て、住民が主長及び其の家系を尊敬愛慕するは自然である、即ち勤王心に富む筈である、又た世界より隔離して居れば、平時には島の内部にありて住民が相互に小鬪分爭するのである、然かし一旦外部の刺戟例へば外國より攻め寄せられた場合などに會へば、一には心寂しきより相互に援け合ふと云ふ感念が起り、一には家族的の感念が回復して、イザと云へば聯合統一し外敵に當る樣になるのである。要するに島は大洋の間を航行する大なる船なりと見做せば宜しいのである、即ち船中の人々が自分の乘り居れる船を最負じ、人々相親しみ相扶け、船長を頼みにしてこれを愛慕尊敬し、且つ難破の際に相互に援け合ひ同心協力して船を援ひ、即ち自分を援はんとするの自然なるとを悟れば、島國人が獨立心に富む筈なること、愛國心深き筈なることも、勤王心多き筈なることも、外難に當りて一致協力する筈なることも、いずれも能く悟り得らるゝのである。英吉利人は島國人なるが、イングランド(England)と云ふ島國主義を自負するのは全く以上の如きものを云ふのである。以上の如きは實に島國人の長所と云ふべきものである。

獨立心に富むと云へば、日本又た英吉利のみならず、世界中にて大小の島嶼の住民ほ到る所此の長所を備具するのである。日本の歷史にて國民が其獨立心を發揮せしとは元寇の役に過ぐるものはない、即ちこれは日本人が島國人の長所と短所とを併に發揮し、且島國たる地形に依りて便宜と勝利とを得たものにて、島國の歷史の眞面目を現ばしたるものである。更に精しく申し上ぐれば、其の初め(文永十一年十月六日)元の戰艦九百餘艘、號して三萬餘人と云ふ大軍が我對馬に押し寄せて來た、然れば島國人性格の長所たる獨立心、自負心、負ケヌ氣、愛國心、勤王心、聯合統一の觀念は一時に勃發したのである、即ち對馬の目代たる右馬允七郎宗助國は慨然八十餘騎にてこれを迎へ擊ち、

三子親姻と共に身を國に殉じたのである、助國の廟は今でも其の討死の地たる小茂田村にありて小茂田濱神社と稱へ縣社となつて居る、對馬の海岸は大概頁岩（シエール）若くは砂岩（サンドストーン）より成立し、數百尺なる懸崖が直立する所が多い、而して亞細亞大陸より西北風が黄海を經て蓬々と吹き來り、此の數百尺の懸崖に浪が打ち衝りて忽ち百碎し、潮怒りて飛沫が白雪を噴く邊に、岩石の罅隙より松が些しも屈撓する所なくして生長して居る、此の景色が如何にも能く島國人の性格を代表して居る、日本人の性格、日本の歴史の小粉本を此所に代表して現はして居るものと思ふのである。さて又た元は杜世忠等を使として日本に發した、スルと時の執權北條時宗は杜世忠等を鎌倉に送致し、これを瀧の口に斬つた、更に元は范文虎等を日本に遣はした、スルと時宗は又たこれを博多に斬つた。そこで元主忽必烈は大に怒りて所謂十萬と號する大兵を日本に發し、元の戰艦は海を蔽ふて日本に攻めて來た。是に於て島國人に特得の愛國心は忽ち發し、日本國民聯合して元の師を防いだ。其の中に大風が起り、大海嘯が起り、元の戰艦は悉く覆沒して所謂十万の師生きて還へる者三人（唯の「三人」のみなりしとは最も疑ふべく、これは歴史考證家に讓ると雖も）とは支那の歴史にも皆な記載されてある。元寇の歴史を讀むと實に日本に於ける島國的、洋海的感化が十二分に判かる、即ち（一）日本人が島國人固有の獨立心、自負心、負ケヌ氣、愛國心、勤王心、外部の刺戟に因る聯合統一を悉く現はした、（二）其の長所を現はしたと同時に、時宗が元の使を斬つたる强硬主義を取りたるは、島國に居たから世界の形勢を知らず、元が亞細亞、亞弗利加、歐羅巴にも跨りたる大國なるを知らず、强雄なる勢力なることを悟らず、世界の形勢に通ぜざりしより、所謂盲人蛇に怖ぢずと云ふ氣味にてスグと元の使を斬つたり又たは强硬主義を取つた形跡がある。少しくこゝに到りて講義が横道に入る樣なるが、序てながら御參考までに申上げますが、對外硬は長所と短所とを有するものである、即ち時宗若しくは島國人の如く一方には獨立心、自負心、負ケヌ氣、外部の刺戟に因る聯合統一を促すと同時に、世界の眞の形勢に通曉せざるより起るのである、日本にても對外硬の連中は老人、漢學者、東洋的頭腦の青年、軍人と云ふ樣な或は長所あると共に世界の眞の形勢には迂濶なる粗造なる頭腦の人に限つて多い、對外軟の連中は或る短所あると同時に、世界の眞の形勢に能く通曉する人が多い、王政維新の前後對外硬の論者は浪人、野武士、漢學者、國學者などに多く、對外軟と呼ばれし者は將軍慶喜などを始め、責任ある位置に居て直接外交の衝に當り、能く歐米の事情に通曉した人に多かつたのである、小松帶刀、後藤象次郎などが二條城にて將軍に拜謁せし際、

對外硬を稱へて將軍に大に遣り込められ、席を退きて城門を出づるや、流石の小松も、後藤も一息を吹き、相互に顏を見合はせて「將軍の世界の形勢に通曉せらるゝには實に驚いた、其の議論を聞いて居て冷汗が背中一杯に出た」と曰つたと云ふ事實がある、支那にても滿人の大官や、榮祿や、義和團一流の人々が對外硬を主張し、世界の形勢に最も通曉せし李鴻章が生前に國家を双肩に負擔する責任より常に對外軟なりとて、凡俗の支那人より非難され居りしも同一の理由である。北條時宗も亦た然り、時宗が島國に居て世界の形勢に通曉しなかつたから元の使者を再び斬つたものゝ、若し當時の眞の世勢に通曉して居たならば、相摸太郎も果してスグと元の使を斬つたかドーだか實に一疑問であると思ふ。然るに島國の幸なるは(三)忽必烈は海軍を以て日本を征伐せなければならぬ、故に多數の戰艦を日本に發し、海上にて颶風に會ひ、海嘯に會ひ、元の戰艦は殆んど悉く覆沒して將士は海の藻屑と化したのである、又た(四)元は再び日本を征伐せんとするにも、日本は島國なるが故に更に多數の戰艦を派出せなければならぬ、故に再度の失敗を怖ぢて遂に罷めたのである、これとても日本が假りに亞細亞の大陸の中に國を成して居り、地續きの所にてもありたることなれば、なか〳〵傲慢なる忽必烈が再征を罷めるなどのことをする筈はない、必らず再び三び攻めて來た筈である、即ち日本は島國にて大陸と海を隔てゝ居たが故に元の再征を免れたのである。固より元寇に際しては日本人は其の島國人固有の長所を發揮したるものである、日本の歷史に光輝を添へたものである、然かし賴山陽得意の『蒙古來』の「可恨東風一驅附大濤、不使羶血盡膏日本刀」と云ふ一段に至りては如何であるか、科學上よりすれば一疑問である。

十萬の師生きて還へる者僅に三人と云ふは日本ばかりの歷史ではない。又た大颶風が外敵の戰艦を悉く覆沒せしめたと云ふは日本ばかりの歷史ではない。島なるシシリア、ボルンホルム及英吉利の歷史に徵しても、何處にても島なれば此の如き出來事はある、如何にも好く似て居る出來事がある。シシリアは伊太利の南西にある島なり、佛蘭西が王ルイ第十三世の九子なるアンジャー侯シャルルが此島の王位を奪ひ、副王を派遣して此島を占領し、佛の軍隊が駐屯せし際、同島人は慷慨に堪へず、耶蘇基督昇天日(ゲエスター)の夕起ちて駐屯の佛蘭西兵を鏖にし、佛人生きて本國に還る者なく、佛蘭西の伊太利及び東邦諸國に對する覇圖は茲に全く頓挫したり、是れ西曆千二百十二年昇天日の夕起りたる出來事とて、今日に至るまで"Sicilian Vespers"と呼び歷史上に其名甚だ高し。ボルンホルム(Bornholm)はバルチック海中にある花崗岩(みかげいし)の絕壁斷崖多き

島なり、此島は素より丁抹（デンマーク）に屬したるが千六百五十八年、大國なる瑞典に割讓せられ、瑞典の將軍プリンツエンスキール（ド）が大兵を率ゐて占領し來り、島のハムメルシュース堡に駐屯せし際、島人は外國兵の爲に我が島を占領されたるを無限の恥辱なりとし、一夜起ちて右の堡を襲ひ、瑞典兵を盡にして一人だをも餘さず、生きて瑞典に還りたる者は當時會、堡内に在らざりし兵士十二人のみなりき、是れ前陳せるシシリア島の"Sicilian Ves-pers"に甚だ似たりとて、これに擬へて"Bornholm Vespers"と呼べり。西班牙の所謂「打ち破るべからざるアルマダの大艦隊が舳艫相銜み白帆の海を蔽ひて英吉利に攻め來るや、時の英國女王エリザベスは婦人ながらも健氣に身を以て國に當り、自ら劍を按じて將士を激勵し、英人は島國人の性格たる獨立心、自負心、負ケヌ氣、愛國心、勤王心外難に當りて輒ち聯合統一する氣象を一時に發揮し、西班牙の大艦隊を逆へ擊ちたる際、颶風は海上に起りて西班牙の艦隊を覆沒せしめ、艦の滿足にて西班牙に還りたるものは僅かに數隻に過ぎざりきと云ふ。"Sicilian Ves-pers"にて瑞典兵の生きて還る者僅かに十二名なりと云ひ、又た英吉利人が西班牙のアルマダ大艦隊を逆擊し且つ颶風の大艦隊を覆沒せしめたる事と云ひ、何れも島國歷史の眞面目を表はすものにして、島國たる日本の元寇の役と少しも違ふ所なきは決して偶然のことにあらず。

以上は地積の大にして住民の多數なる島の例を取りたることなるが、更に地積の小にして住民の少數なる島にても亦た固より以上の如き島人の性格を具有するなり、新潟縣會にて佐渡選出議員は平生の黨派恩讐を相忘れ打ち揃ひて越後議員に抵抗し、島根縣會にて隱岐選出議員の動もすれば輒ち出雲議員に反對するが如き即ち是なり。日清戰役の際大陸にては支那兵殊に軟弱なりしと雖も、獨り臺灣島なる支那人は最も頑強にして日本兵に抵抗し、同島を死守せしが如き即ち是れなり。聖ジョン（セント）の勳功士（ナイト）等、地中海のロデス島に據るや、獨立自治すること二百年に至り、亞細亞、歐羅巴、亞弗利加の三大陸を征服せし全盛の土耳其人に抵抗し、久しく死守せし後、遂に去て地中海中のモールタ島に據るや、こゝを死守すること二百六十八年、其間土耳其人に抵抗し、一城が四個月間の重圍に屈せずして遂に土耳其人の撤兵せしが如き即ち是れなり。クロムウェルの革命を首唱してチャールス（インデペンデント）王に反抗するや、英吉利海峽中なる一小島ガーンジーの住民は擧りて勤王を主張し、一人だに革命派に黨する者なかりしが如き即ち是れなり。佛國ロアー河口にバッなる一村落あり、元と島なりしも、後世河口の泥沙の爲めに大陸と連續し、今は島の面影だに見えず、然れ共村民は今に「我」（ガン）

が島」と喚び「我が島」の人々はサクソン民族なり、スカンディネヴィヤ種なりと誇り村民の背高く、容貌麗はしく、眼の碧色なるを自負し、言語としても第十七世紀の終期まではブレトン語を使用し、今日とても尚ほ傍近の一小村には此語を使用し來り、少壯年の輩は其婦を「我が島」以外に捜むを無限の汚辱となせば、村人は相互に從兄弟從姉妹に係り、全村二千七百五十の人口中、其の半は八家族より成り、一家族の員數四百九十人に及べる者あり、故に姓名の外に綽名を附して人々を呼稱するに至る、特に道德に關しては傍近の民人より好評せられ、村人の間に諺あり、曰く「我が島にては絶えて酒盃の投げらるゝことなし、烟酔して喧嘩などする際、酒盃は常に正直なる人の屋前に至て止まればなり」と云ふが如き即ち是れなり。

ヘルゴランドは獨逸のエルベ河口に近く北海にある島なり、島と云へば島なれども、其の面積とては一方里の五分の一ばかりにして實に二個の巖礁とも云ふべきものなり、而かも同島の往民は「世界中にて最も善く且つ最も麗はしき陸なり」と云へりと。島國人の愛國心、獨立心、自負心、負ケヌ氣に富み居ること實に以上を以て知るを得べし。

さて又た島國の效能は一言にて盡くせば自助的と云ふことである、大哲學家のカントが島國人の性質を „den es sich selbst angeschafft hat" (自己にて自己を處理すると講述した、誠に簡にして要を得たる言なりと思ふ。海洋の中に孤懸して居るが故に島國人は自己の事物とては自己にて處理するなり、他人の力も借りず、又た借りる機會とても無ければ、何事も自助的となり、萬般に自助的の傾向ありて「オレの内の事はオレ丈けで始末するサ」といふ風を養成し來るのは自然てある。我か日本人が我が三千年の歷史を研究して見ると能く此間の消息を解することが出來る。又た英吉利及びヴェネチア(ヴェニス)の歷史を研究しても此事が能く悟らるゝのてある。英吉利にてはアルフレッド大王の頃業既に同島内は統一せられ居りて一國を成立し居つたけれども、歐羅巴大陸にありたる佛蘭西にては、シャルレマーヌ大帝の下に於てすら佛蘭西と云ふ國は未だ成立し得なかつたのてある。島國にては風と濤とが能く外部よりの侵略的勢力を防禦する、外よりは恐ろしい者とては寄り着かぬ、而かも亦た内には分裂したり叛亂したりする傾向とては無く、實に内願の憂は無い、故に(一)には海外の紛擾に仲間入りする必要もなく(二)には外寇に敗らるゝ患なく(三)には内にて自己の力を十二分に養成することが出來る。然れば島國は此の三個の效能を利用して其の光輝ある歷史を形造りたるのみならず、内願の患なく且つ内に十二分の力を養成し居る

こと丶て、防禦的より一轉化して海外を侵略する傾向を生する。日本が元寇及び大陸よりの侵略を防禦し旦つ斥攘したる事より一轉化して、胡蝶軍が支那大陸を荒らしたり、豐臣秀吉が朝鮮を征伐したり、日清の戰役を生じたり、日露の戰役を生じたる始終を研究すれば、日本が島國であることが實に此の氣運を養成したる源因の重なるものであることが判かる。佛蘭西のナポレオンの大勢力を以て歐羅巴大陸の列國のいづれも其の膝下に摺伏したるに拘はらず、獨り英吉利の屈せざりしは、其の島國なることの御蔭である、而して英吉利はナポレオンを防禦し、ナポレオンの海上權(佛蘭西、西班牙聯合の)をトラファルガルにて大破壞し了るや、一轉化して侵略的となり、世界に於ける要害の個所々々を占領したるは大概此時に行つたのである、英吉利が今日の海上世界に覇を稱へ居るは實に此時より一段落を開いたのである。伊太利のヴェネチア(ヴェニス)は誰人も能く知れる如く多數なる小島の上に建てられたる一都會である、島國の利益たる風と濤とは能く外部よりの侵略を防禦し、即ちボーラ(Bora.)と呼ぶ大風と又た風濤の爲めに築かれたる沙隄とは完全に此島的都會を防禦し、且つ島國人特得の獨立心、自負心、負ケヌ氣、愛國心は内に僭物せるを以て、當時亞細亞、歐羅巴、亞弗利加の三大洲に覇圖を擴張し居たる土耳其人の侵略を能く防禦し、土耳其人を斥攘したるのみならず、内に十二分の力を養生したるを以て、進んで大に力を海外に用ひ、貿易上に大に成功して西洋貿易の中心となり、更に進んで海外の各地を侵略し、大に領土を擴ろげ、一都會なりしヴェネチアは當時覇威赫々たる一強國と化したることあり、是れ實に島國の御蔭に因ること多しとす。然れども島國が以上の如く、防禦的より海外の侵略的となることは、獨り島と云ふ地形に因るのみならず、亦た島と云ふ地積にも因るものたり、即ち島は元來大陸よりも遙かに地積の小なる者なり、而して外部より侵略を被ふること殊に少きことゝて人口は增加し來り、此の增加し來れる人口は遂には内に溢るゝを以て、到底海外に向ひて力を用ひ、海外を侵略するより外に致し方なきを以て、海外侵略となるものなり、英吉利及びヴェネチアの歷史と日本今日の事情とを研究すれば、亦た此の間の理由を悟るに足るべし。獨り以上の如き大島國の歷史なるのみならず、小島にも徵し見よ、テルナーテ(Ternate)とチドール(Tidore)とは東印度諸島中にある甲は面積四方里、乙は面積五方里の小島のみ、而して兩小島共に獨立の蘇丹長く君臨し(今日は和蘭の保護國となりたれども、蘇丹は依然として君臨せり)セレベスの大島を侵略し、兩小島の蘇丹にてセレベス大島を折半して分領し、母島に四千倍する領地を母島以外に所有し居るなり、テルナーテもチドー